長崎県佐世保文化財調査事務所調査報告書　第２集

一般国道497号佐々佐世保道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

Ⅳ

武　辺　城　跡

末　永　遺　跡

２００８

長崎県教育委員会

序

本書は，西九州自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の通巻第４分冊として，武辺城跡並びに末永遺跡の調査結果を収録したものです。

武辺城跡は，平成16年度に範囲確認調査を，平成17年度，18年度に緊急発掘調査を実施いたしました。調査範囲は，主曲輪から離れた場所にある西曲輪の一部と主曲輪と南曲輪を結ぶ途中の尾根部分，大手と推測されていた谷筋の一部分でした。調査の結果，谷筋から５列の石列や数ヵ所の平場等の遺構を検出しました。将来，城跡の南曲輪や谷筋が詳細に調査されることによって，より城の性格が把握されるものと思われます。

末永遺跡につきましては，佐々町に所在する遺跡として範囲確認調査を平成17年度と平成18年度に実施いたしました。その詳細につきましては，本書に掲載したとおりの内容であります。今後は遺跡の内容調査等によって，遺物包含層や生活遺構が確認され遺跡の性格が明らかになることを期待いたします。

西九州自動車道建設工事につきましては，道路建設計画当初から可能な限り文化財の保存に努めていただくよう，県教育委員会は国土交通省及び関係機関と協議を重ね，その結果７箇所の遺跡については記録保存をすることになりました。

発掘調査は，県教育委員会が国土交通省九州地方整備局長崎河川国道事務所の依頼を受け，平成13年度から平成19年度までの計画で実施しております。

武辺城跡並びに末永遺跡の発掘調査成果が，文化財保護や地域の歴史資料・学術的資料として活用され，県民皆様の関心に少しでも応えることが出来ればと考えております。

本書の刊行にあたり，発掘調査に従事された方々をはじめ多大なご尽力をいただきました関係者各位に対し，衷心から厚く御礼申し上げます。

平成20年３月

長崎県教育委員会教育長
横田修一郎

総　目　次

Ⅰ　発掘調査の端緒と経過……1
Ⅱ　武辺城跡……9
Ⅲ　末永遺跡 ……125

挿　図　目　次

第１図　西九州自動車道佐々佐世保道路計画図……2
第２図　長崎県内西九州自動車道の計画状況……3

表　目　次

第１表　西九州自動車道埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表……4
第２表　西九州自動車道埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表……5
第３表　西九州自動車道埋蔵文化財発掘調査計画一覧表……6

Ⅰ　発掘調査の端緒と経過

(1)　建設省は，昭和62年６月30日に道路審議会答申に基づき，14,000㎞の高規格幹線道路網計画を決定した。西九州自動車道は，高規格幹線道路網の一環として計画された道路で，福岡市を起点として，唐津市，伊万里市，佐世保市を経由して武雄市に至る延長約150㎞一般国道の自動車専用道路であり，九州西北部の地域経済の活性化，高速定時性の確保に大きく寄与することで計画された。

(2)　長崎県では，高規格幹線道路をはじめとする幹線道路網の整備については，県民の暮らしの豊かさを支える重要な課題として取り上げ，県内主要都市を２時間程度で結ぶ道路ネットワーク構想を策定し，景観や自然環境との調和を図りながら整備を推進している。

西九州自動車道の長崎県内での計画路線は，下記の通りである。

「佐世保道路」　佐世保みなとＩＣ～佐世保市矢岳町間（区間距離約2.9㎞）

「佐々佐世保道路」　北松浦郡佐々町沖田免～佐世保市矢岳町間（区間距離約９㎞）

「伊万里松浦道路」　松浦市志佐町～今福町間（～佐賀県伊万里市までの間）（長崎県内区間距離約９㎞）

「松浦～佐々間」　（松浦市志佐町～北松浦郡佐々町・区間距離約17㎞）

(3)　長崎県教育委員会は，平成９年に建設省九州地方整備局長崎工事事務所（現国土交通省九州地方整備局長崎河川国道事務所）と「佐世保道路」と「佐々佐世保道路」に関する埋蔵文化財の取扱いについての協議を行った。その後，現地踏査の依頼を受け，平成９年11月に分布調査及び平成12年12月に分布調査の補足調査を実施した結果，発掘調査が必要な面積は92,100㎡となった。

(4)　長崎県教育委員会は，平成15年度から平成19年までに当該路線内の埋蔵文化財に関する範囲確認調査及び発掘調査を実施することになった。この間に，範囲確認調査及び現地踏査を実施し，遺跡の範囲が縮小した遺跡（川久保遺跡，小野Ｆ遺跡，九州文化学園構内遺跡）と拡大した遺跡（門前遺跡，武辺城跡）が確認された。

調査の結果，当該事業の「佐世保道路」と「佐々佐世保道路」で発掘調査が必要な遺跡・面積は下記の通りである。

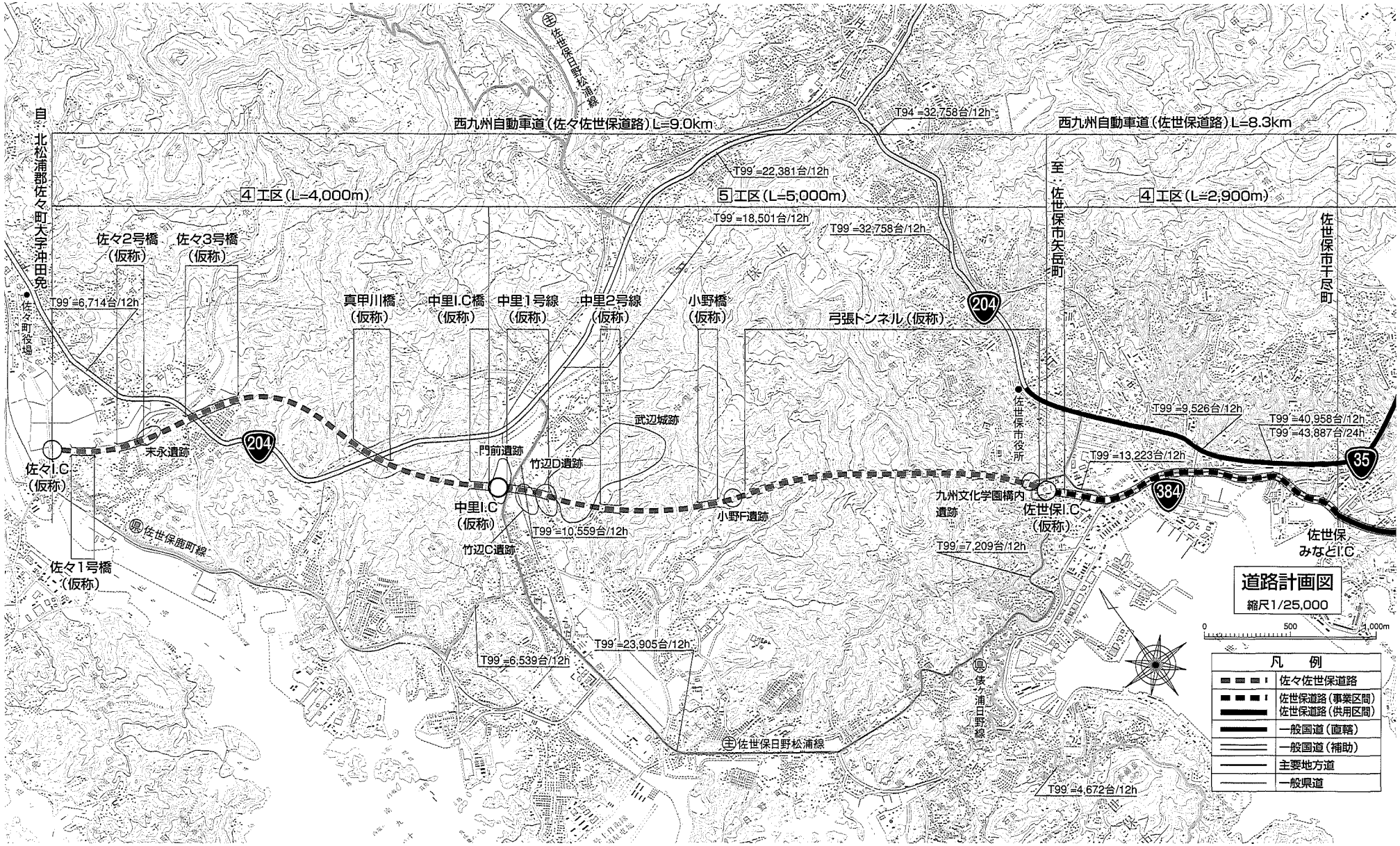
遺跡数：７箇所

分布面積：約92,380㎡

要調査面積：約88,869㎡

調査済面積：約87,074㎡

平成19年度発掘調査予定面積：約1,795㎡



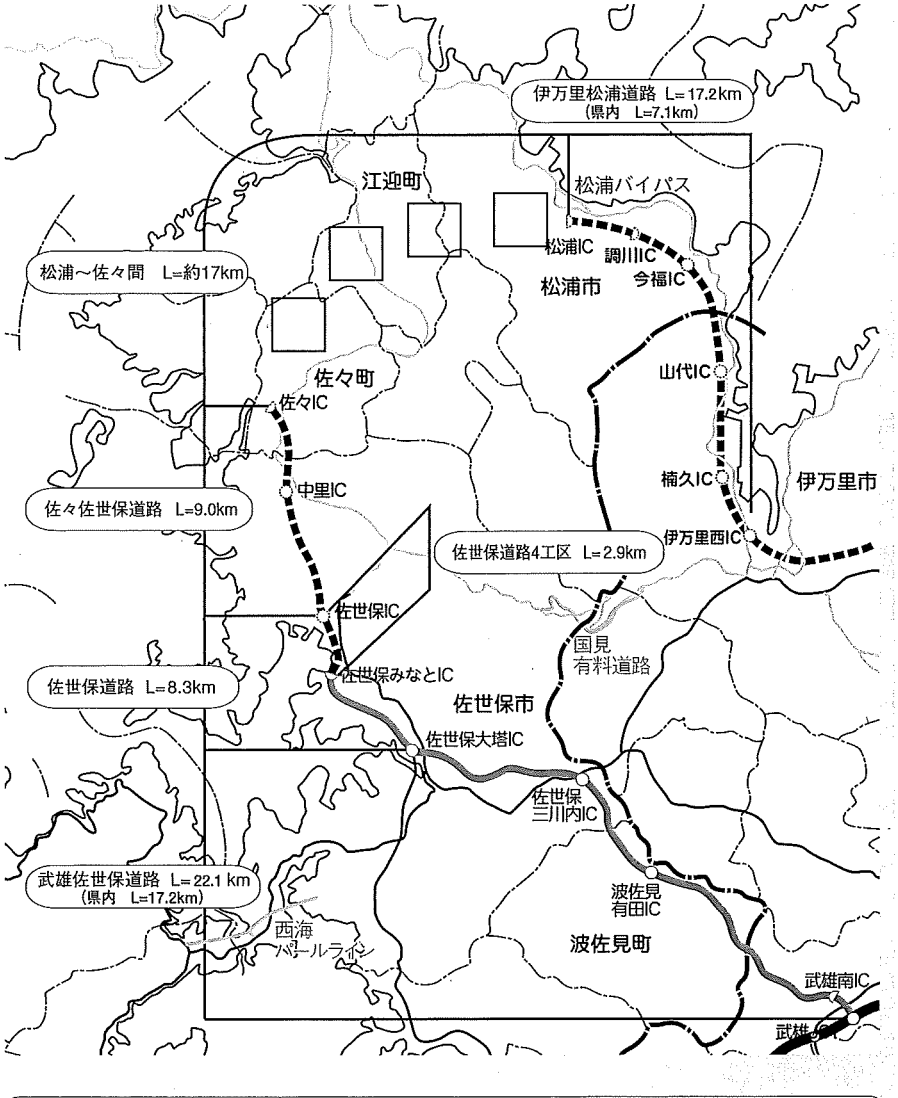
第１図　西九州自動車道佐々佐世保道路計画図

(5) 武辺城跡発掘調査に至る経緯について

平成９年11月に周知の遺跡である武辺城跡が，当該工事範囲に含まれるために分布調査を実施した。当初，中世の城跡として武辺城跡と殿平城跡の２箇所が周知されていた。

現地踏査の結果，城の中心から外れているとの判断で，立合調査で良いとの見解であった。

その後，武辺城跡の主郭からは外れているが，大手口等の遺構が残存している可能性があるのではとの判断で，平成12年11月に竹辺Ｃ遺跡，竹辺Ｄ遺跡の再度の現地踏査の際に，武辺城跡の現地踏査を実施し当該工事に係る部分は西曲輪と南曲輪とに繋がる部分及び谷部分が城の大手に当たる可能性があるとの指摘があったので，範囲確認調査を行って遺構の有無について確認することになった。



長崎県内	：約60km	
・伊万里松浦道路	： 7.1km	事業中（測量及び地質調査）
・松浦市～佐々町間	：約17km	調査中（路線計画、環境基礎調査など）
・佐々佐世保道路	： 9.0km	事業中（用地買収中、埋蔵文化財発掘調査中、H14年度工事着手）
・佐世保道路4工区	： 2.9km	事業中（用地買収中、H14年度工事着手）
・佐世保みなとIC～佐賀県境間	：22.6km	供用中

第２図　長崎県内西九州自動車道の計画状況

（国土交通省九州地方整備局長崎河川国道事務所発行のパンフレットより）

範囲確認調査は，平成17年１月11日～３月１日にかけて，計画予定路線内に９箇所（144㎡）を実施した。その結果，建物の礎石等が確認された。当初の分布面積は6,500㎡であったが，検討した結果，21,000㎡について発掘調査を実施することになった。

緊急発掘調査は，平成17年５月16日から平成18年３月17日まで，約18,200㎡について民間発掘調査機関に委託した。

発掘調査の途中で計画変更を行った。調査を必要とする箇所の土地取得が進展したので，新たに1,500㎡の調査面積の追加と産業廃棄物処理等での伐採木，ガレキ類の1,800㎥についての収集・運搬業務を追加するために計画変更を行った。調査終了面積は，19,700㎡であった。

(6) 平成17年度及び18年度の武辺城跡発掘調査の調査体制について

武辺城跡発掘調査は，民間発掘調査機関に委託して実施した。

○委託業務内容

発掘調査業務，遺構実測業務，検出遺構の空中写真撮影業務，検出遺構図作成のための空中写真撮影及び図化作業業務，掘削および排土運搬業務，ベルトコンベア，水中ポンプ，ローリングタワー等配置業務，仮設作業用道路等設置工，仮設堤体・仮設排水管埋設工を委託した。

（受託調査員の配置，発掘調査作業員雇用も併せて委託している。）

番号	遺跡名称	所在地	当初 変更後	分布面積（㎡）	要発掘調査予定面積（㎡）	範囲確認調査面積（㎡）	時代	概要
1	川久保遺跡	佐々町川久保	当初	8,800	0	(48)	中世	中世の遺物散布地
			変更後	48				
2	小野Ｆ遺跡	佐世保市小野町	当初	4,000	700	(68)	縄文時代	縄文時代早期～前期の包蔵地
			変更後	768				
3	門前遺跡	佐世保市愛宕町・中里町	当初	48,900	51,270	(204)	縄文時代 弥生時代 古墳時代 古代～中世	縄文時代～古代，中世に至る複合遺跡 特に縄文早期～前期及び弥生時代後期の集落跡
			変更後	51,270				
4	九州文化学園構内遺跡	佐世保市矢岳町	当初	11,500	6,000	(266)	縄文時代	縄文時代後期～晩期の包蔵地
			変更後	6,000				
5	竹辺Ｃ遺跡	佐世保市竹辺町	当初	5,250	5,672	(18)	縄文時代 弥生時代 古墳時代 古代～中世 近世	弥生時代後期の集落跡，弥生時代・古墳時代の墓，古代～中世･近世の集落跡
			変更後	5,530				
6	竹辺Ｄ遺跡	佐世保市竹辺町	当初	4,250	4,227	(67)	旧石器時代 弥生～中世 近世	旧石器時代，弥生～中世の包蔵地，近世の集落跡
			変更後	4,227				
7	武辺城跡	佐世保市竹辺町	当初	6,500	21,000	(144)	中世～	中世（15世紀後半頃）の山城跡 松浦氏の居城
			変更後	21,000				
8	末永遺跡	佐々町末永	当初	2,900	0	(108)	旧石器時代 縄文時代	旧石器時代～縄文時代の包蔵地
			変更後	0				
合計			当初	92,100	88,869	(923)		
			変更後	92,380	88,869			

第１表　西九州自動車道埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表

調査年度	調査形態	遺　跡　名	調査面積(㎡)	調　査　期　間	調　査　担　当	民間発掘機関
平成９年度	現地踏査	西九州自動車計画路線内		H９.11.20～21	藤田・東	
平成12年度	現地踏査	追加踏査		H12.11. 7	副島・竹中	
平成13年度	範囲確認調査	川久保遺跡	48	H13.12.10～12.19	本田・東・本多	
		小野Ｆ遺跡	68	H13.11.20～11.30	福田・東・本多	
		門前遺跡	108	H14.１.24～２.15	村川・内藤・上原・本多	
	緊急発掘調査	門前遺跡	600	H14.２.18～３.20	村川・井立・上原・本多	
平成14年度	範囲確認調査	門前遺跡	96	H15.３.10～３.26	副島・寺田・石橋・栗山・平岡・北原	
	緊急発掘調査	門前遺跡	6,200	H14.７.１～H15.３.31	副島・寺田・石橋・栗山・平岡・北原	㈱埋文サポートシステム
平成15年度	範囲確認調査	九州文化学園構内遺跡	266	H15.９.29～10.29	副島・川畑・織田	
		竹辺Ｃ遺跡	18	H16.１.13～２.16	副島・川畑・織田	
		竹辺Ｄ遺跡	67	H16.１.13～２.16	副島・川畑・織田	
	緊急発掘調査	門前遺跡	11,300	H15.５.12～H16.３.31	副島・寺田・石橋・栗山・平岡・北原	㈱埋文サポートシステム
		小野Ｆ遺跡	700	H15.５.12～８.12	副島・川畑・織田	
平成16年度	範囲確認調査	武辺城跡	144	H17.１.11～２.15	副島・町田・寺田・栗山	
	緊急発掘調査	門前遺跡	15,750	H16.６.１～H17.３.31	副島・町田・川畑・杉原・川口・寺田栗山・織田・石橋・松尾・深澤・松原江上	国際航業㈱
		竹辺Ｃ遺跡	1,238	H16.11.15～H17.３.31	町田・木村・大山・冨永	
		竹辺Ｄ遺跡	3,012	H16.６.７～11.15		
	報告書作成	小野Ｆ遺跡		H16.４.１～H17.３.31	川畑・織田・深澤	
	整理作業	門前遺跡		H16.４.１～H17.３.31	寺田・深澤・栗山・石橋・松尾	
平成17年度	範囲確認調査	末永遺跡	72	H18.２.13～２.28	町田・松尾・川鍋	
	緊急発掘調査	門前遺跡	10,100	H17.５.16～H18.３.31	副島・町田・杉原・吉野・石橋・松尾松原・江上・中村・沖・萩坂	㈱埋文サポートシステム
		竹辺Ｃ遺跡	1,974	H17.５.16～H18.３.31	副島・町田・木村・川向・大山	
		竹辺Ｄ遺跡	506	H17.５.16～H18.３.31		
		武辺城跡	19,700	H17.５.16～H18.３.31	副島・町田・川畑・今里・冨永・深澤柴田・川鍋・栗山	㈱パスコ
	報告書作成整理作業	門前遺跡		H17.４.１～H18.３.31	副島・川畑・松尾・江上・石橋・栗山	
平成18年度	範囲確認調査	末永遺跡	36	H18.９.13～９.21	町田・松尾	
	緊急発掘調査	九州文化学園構内遺跡	6,000	H18.５.22～９.27	副島・町田・吉野・今里・深澤・柴田半田・杉本・川鍋・秋山	特定埋文発掘調査共同企業体
		門前遺跡	6,504	H18.８.７～10.31	副島・町田・杉原・石橋・浦川	㈱シン技術コンサル
				H18.11.９～H19.３.20	副島・町田・杉原・石橋・松尾・浦川	安西工業㈱
		竹辺Ｃ遺跡	2,460	H18.５.29～９.27	副島・町田・木村・江上・矢葺	㈱パスコ
		竹辺Ｄ遺跡	709	H18.８.８～９.22	副島・町田・川向・川鍋・秋山	㈱三基
		武辺城跡	321	H18.９.25～10.27	副島・町田・今里・柴田・秋山	㈱三基
	整理作業	門前遺跡ほか		H18.４.１～H19.３.31	副島・町田・今里・杉原・吉野・川向木村・石橋・江上・松尾・杉本・深澤川鍋・柴田・半田・矢葺・秋山・浦川	

第２表　西九州自動車道埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表

調査年度	調査形態	遺　跡　名	調査面積(㎡)	調　査　期　間	調　査　担　当	民間発掘機関
平成19年度	緊急発掘調査	武辺城跡	122	H19.11.9～H20.2.12	副島・町田・今里・池田・半田・矢葺 浦川	㈱埋文サポートシステム
		門前遺跡	816			
	報告書作成 整理作業	九州文化学園構内遺跡			副島・町田・今里・半田・杉本	
		竹辺Ｃ遺跡			副島・町田・江上・矢葺	
		竹辺Ｄ遺跡			副島・町田・江上・矢葺	
		武辺城跡			副島・町田・今里・柴田・秋山	
		門前遺跡			副島・町田・杉原・池田・松尾・江上 浦川	
		末永遺跡			町田	

調　査　形　態	面　　積	備　　考
調査面積	88,869㎡	西九州自動車道計画路線内８遺跡の調査面積
発掘調査済面積	88,074㎡	平成13年度～平成18年度の発掘調査面積
発掘調査予定面積	795㎡	平成19年度以降の発掘調査予定面積

第３表　西九州自動車道埋蔵文化財発掘調査計画一覧表

①平成17年度　○業務名称：一般国道497号佐々佐世保道路埋蔵文化財発掘調査委託業務
（武辺城跡）

・調査遺跡：武辺城跡

・調査面積：19,700㎡

・委託期間：平成17年５月16日から平成18年３月17日

・受託調査員：４名（現場代理人１人，調査員３人）

・委託業者：株式会社パスコ

○委託業務内容

発掘調査業務，遺構実測業務，検出遺構の空中写真撮影業務，掘削および排土運搬業務・水中ポンプ，ローリングタワー等配置業務を委託した。

（受託調査員の配置，発掘調査作業員雇用も併せて委託している。）

②平成18年度　○業務名称：一般国道497号佐々佐世保道路埋蔵文化財発掘調査委託業務
（武辺城跡）

・調査遺跡：武辺城跡

・調査面積：321㎡

・委託期間：平成18年９月25日から平成18年10月27日

・受託調査員：２名（監理技師１人，調査員１人）

・委託業者：株式会社三基

(7)　武辺城跡発掘調査関係者

平成16年度　県教育庁佐世保教育事務所長　荒木輝彦

総務課長　本村保彦

係長　藤本賢二

文化財調査課長　副島和明
係長　町田利幸
文化財保護主事　寺田正剛
文化財調査員　栗山安彦
平成17年度　県教育庁佐世保教育事務所長　荒木輝彦
係長　藤本賢二
文化財調査課長　副島和明
係長　町田利幸
文化財保護主事　今里順一郎・川畑敏則
文化財調査員　栗山安彦・冨永百合子・深澤幸江
柴田妃三光・川鍋知秋
平成18年度　県教育庁佐世保教育事務所長　荒木輝彦
係長　藤本賢二
文化財調査課長　副島和明
係長　町田利幸
文化財保護主事　今里順一郎
文化財調査員　柴田妃三光・秋山千尋
平成19年度　県教育庁佐世保文化財調査事務所長　副島和明
係長　藤本賢二
係長　町田利幸
文化財保護主事　今里順一郎
文化財調査員　柴田妃三光・秋山千尋
半田　章・杉本茂喜

(8)　調査協力者

田中健一郎（佐賀県教育庁文化課）
東　貴之（長崎石鍋記録会）
東漸寺
洪徳寺

(9)　整理協力者

川崎祥代・神田ゆかり・郡由美子・小坂敦子・髙山奈保美・徳住あゆみ・畑原佐智子
林かおる・森園真由美・吉野貴子・山川さおり・山口千春・山本久子

（副島和明）

Ⅱ　武　辺　城　跡

武辺城跡遠景（北西より）

西曲輪尾根とその斜面部（南東より）

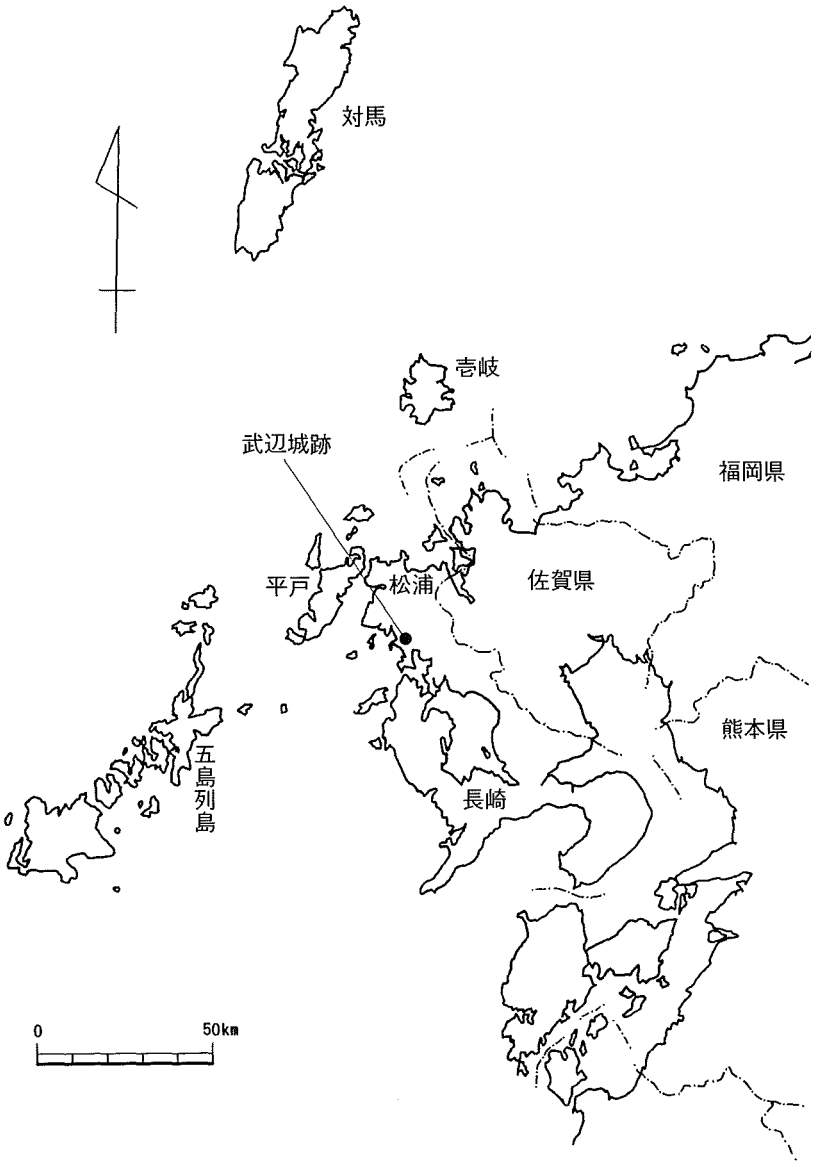
南曲輪尾根部と近世墓（北より）

巻頭カラー④

谷部石列

巻頭カラー⑤

武辺城跡北西端



第１図　武辺城跡位置図

例　　言

Ⅰ　本書は，一般国道497号佐々佐世保道路（西九州自動車道）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第Ⅳ分冊である。

調査は長崎県教育委員会が国土交通省九州地方整備局長崎河川国道事務所の依頼を受け，平成13年度から平成20年度までの計画で実施している。

Ⅱ　当該遺跡に係る遺跡は，小野Ｆ遺跡，門前遺跡，竹辺Ｃ遺跡，竹辺Ｄ遺跡，武辺城跡，九州文化学園構内遺跡，末永遺跡の７箇所を数え，発掘調査が終了した武辺城跡について本書に収録するものである。

Ⅲ　今回報告する遺跡の内容は下記のとおりである。

1　武辺城跡：長崎県佐世保市竹辺町に所在

2　武辺城跡の範囲確認調査と本調査は，県教育庁佐世保教育事務所が担当した。本調査は，発掘調査を民間の発掘調査会社に業務委託した。

平成17年度の本調査は，発掘調査業務を株式会社パスコに委託。

平成18年度は，株式会社三基に委託。

3　武辺城跡の発掘調査実施状況

(1)　範囲確認調査：平成17年１月11日～３月１日

調査担当：県教育庁佐世保教育事務所

(2)　本調査：平成17年６月15日～平成18年３月17日

調査担当：県教育庁佐世保教育事務所

(3)　本調査：平成18年９月25日～10月27日

調査担当：県教育庁佐世保教育事務所

4　本書の執筆は，副島和明，今里順一郎，柴田妃三光，秋山千尋が分担して行い，執筆者は各項文末に記した。

5　出土遺物については，大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館長），櫻木晋一氏（下関市立大学教授），中島恒次郎氏（太宰府市教育委員会）にご教示を得た。

6　調査に際しては，西谷　正氏（伊都国歴史博物館長），下山正一氏（九州大学大学院教授），千田嘉博氏（奈良大学准教授）に調査指導をいただいた。

7　付編は，長崎大学　分部哲秋氏，佐伯和信氏，岡本圭史氏に玉稿をいただいた。

8　Ａ・Ｃ・Ｅ区の平場は，人為的に造成されたため遺構としての取り扱いもあるが，本書では，各地区の小地区として捉え，検出された遺構のみを記載した。

9　調査時の写真撮影は各担当者，掲載遺物写真は今里が行った。

10　貿易陶磁器の分類は，太宰府市教育委員会　2000『大宰府条坊跡ＸＶ』―陶磁器分類編―，森田勉　1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』№2に準拠する。

11　本書で用いた遺構に関する表記は次のとおりである。

SF：石列・石組み遺構，SB：掘立柱建物跡，SD：溝状遺構

SA：柱穴列，SK土壙，SR：河川跡，SX：不明遺構，Pit：柱穴

12　土層註記については調査担当者のものを使用した。

13　参考文献は巻末にまとめて記載する。

14　本書の編集は，各執筆者が担当し，今里，柴田，秋山が総編集を行った。

15　本書関係の出土遺物と図面及び写真類は現在，長崎県教育庁佐世保文化財調査事務所に保管している。

本　文　目　次

Ⅰ　遺跡の立地・環境
1　地理的環境……27
2　歴史的環境……29
Ⅱ　平成16年度の範囲確認調査
1　調査概要……37
2　土層……38
Ⅲ　平成17年度の本調査
1　調査概要……39
2　土層……40
3　遺構・遺物……45
A区……45
(1)　遺構……46
①河川跡（SR-1・2）……46
②掘立柱建物跡（SB-1）……47
③土壙（SK-1）……47
(2)　遺物……49
B区……50
(1)　遺構……50
①土壙（SK-2）……50
(2)　遺物……50
C区……51
(1)　遺構……53
①平場4・5……53
・掘立柱建物跡（SB-2）……53
・掘立柱建物跡（SB-3）……53
②平場6……54
・柱穴列（SA-1）……54
・溝状遺構（SD-1）……54
・土壙（SK-3）……54
・遺物……54
③平場7……56
・石列（SF-1・2）……56
・墓壙（SC-1）……57
・不明遺構（SX-1）……57
・不明遺構（SX-2・3）……57

・不明遺構（SX-４）……58
・遺物……58
D区……60
(1) 遺構……60
①石列（SF-３～７）……60
②石組み遺構（SF-８）……60
(2) 遺物……62
E区……63
(1) 遺構……63
①墓壙（SC-２～30）……63
②不明遺構（SX-５）……65
(2) 遺物……71
F区……79
(1) 遺構……79
①土壙（SK-４）……79
Ⅳ 平成18年度の本調査（G区）
1 調査概要……80
2 土層……81
3 遺物……81
Ⅴ まとめ……82
図 版……85
Ⅵ 附 編……115
・長崎県佐世保市武辺城跡出土の人骨について

挿　図　目　次

第１図　武辺城跡位置図……19
第２図　武辺城跡周辺の表層地質図……28
第３図　相浦川流域の主な遺跡……30
第４図　武辺城跡周辺の遺跡……32
第５図　武辺城跡縄張り図……33
第６図　県北部山城分布図……34
第７図　武辺城跡発掘調査範囲図……35
第８図　16年度～18年度の調査地区図……36
第９図　試掘坑配置図……37
第10図　TP. ５平面図及び土層断面図 ……38
第11図　調査区地形図及びトレンチ配置図……40
第12図　土層断面図②・③……41
第13図　土層断面図⑥・⑨……42
第14図　土層断面図⑤・④・⑦……43
第15図　土層断面図⑧・①……44
第16図　Ａ区遺構配置図……45
第17図　SR-１・２平面図及び土層断面図 ……46
第18図　遺物実測図①……46
第19図　SB-１平面図及び断面図 ……47
第20図　SK-１平面図及び土層断面図 ……47
第21図　遺物実測図②……48
第22図　遺物実測図③……49
第23図　SK-２平面図及び土層断面図 ……50
第24図　遺物実測図④……50
第25図　Ｃ区遺構配置図……51
第26図　平場６・７土層断面図……52
第27図　平場４・５遺構配置図及び土層断面図……53
第28図　平場６遺構配置図及びSA-１断面図　……54
第29図　遺物実測図⑤……55
第30図　平場７遺構配置図及びSF-２土層断面図 ……56
第31図　SC-１平面図及び断面図 ……57
第32図　遺物実測図⑥……57
第33図　SX-１平面図及び土層断面図 ……57
第34図　SX-２・３平面図 ……57
第35図　SX-４平面図及び土層断面図 ……58

第36図　遺物実測図⑦……58
第37図　遺物実測図⑧……59
第38図　Ｄ区遺構配置図……60
第39図　Ｄ区土層断面図……61
第40図　遺物実測図⑨……62
第41図　Ｅ区遺構配置図……63
第42図　Ｅ区土層断面図……63
第43図　SX-５平面図及び見通し断面図……65
第44図　遺物実測図⑩……67
第45図　遺物実測図⑪……68
第46図　遺物実測図⑫……69
第47図　遺物実測図⑬……70
第48図　遺物実測図⑭……72
第49図　墓壙別銭貨出土状況……74
第50図　銭貨拓影図①……76
第51図　銭貨拓影図②……77
第52図　SK-４平面図及び土層断面図……79
第53図　武辺城跡遠景（北より）……79
第54図　トレンチ配置図……80
第55図　土層断面図……81
第56図　遺物実測図⑮……81

附編―図１　武辺城跡位置図……116
　　図２　人骨の遺存状態……117

図　版　目　次

巻頭カラー①　武辺城跡遠景（北西より）
巻頭カラー②　西曲輪尾根とその斜面部（南東より）
巻頭カラー③　南曲輪尾根部と近世墓（北より）
巻頭カラー④　谷部石列
巻頭カラー⑤　武辺城跡北西端

図版１　範囲確認調査……85
図版２　Ａ区遺構・遺物・検出状況……86
図版３　Ｃ区遺構・遺物検出状況①……87
図版４　Ｃ区遺構・遺物検出状況②……88
図版５　Ｃ区遺構・土層・完掘状況……89
図版６　Ｄ区遺構検出状況……90
図版７　Ｅ区遺構・遺物検出状況……91
図版８　Ａ・Ｂ区遺構・遺物・土層・調査区風景……92
図版９　Ｃ区遺構・遺物・調査区風景……93
図版10　Ｃ・Ｄ区遺構・調査区風景……94
図版11　Ｄ・Ｅ・Ｆ区遺構・調査区風景……95
図版12　Ａ区出土遺物①……96
図版13　Ａ区出土遺物②……97
図版14　Ｂ・Ｃ区出土遺物……98
図版15　Ｃ区出土遺物①……99
図版16　Ｃ区出土遺物②……100
図版17　Ｃ区出土遺物③……101
図版18　Ｄ区出土遺物……102
図版19　Ｅ区出土遺物①……103
図版20　Ｅ区出土遺物②……104
図版21　Ｅ区出土遺物③……105
図版22　Ｅ区出土遺物④……106
図版23　Ｅ区出土遺物⑤……107
図版24　Ｅ区出土銭貨①……108
図版25　Ｅ区出土銭貨②……109
図版26　Ｇ区調査区・土層・遺物出土状況……110
図版27　Ｇ区出土遺物・調査風景……111
図版28　調査区外の武辺城跡の遺構……112
図版29　武辺城跡周辺の遺跡……113

附編―図版……124

表　目　次

第１表　試掘坑配置表……37
第２表　地区別説明表……39
第３表　遺物観察表①（SR-２）……47
第４表　遺物観察表②（SK-１）……48
第５表　遺物観察表③（Ａ区）……49
第６表　遺物観察表④（Ｂ区）……50
第７表　遺物観察表⑤（平場６）……55
第８表　遺物観察表⑥（SC-１）……57
第９表　遺物観察表⑦（平場７）……59
第10表　遺物観察表⑧（Ｄ区）……62
第11表　墓壙観察表……64
第12表　遺物観察表⑨（SC・甕）……66
第13表　遺物観察表⑩（SC・陶磁器）……70
第14表　遺物観察表⑪（SC・金属）……71
第15表　遺物観察表⑫（Ｅ区）……72
第16表　銭貨総出土数……73
第17表　墓壙別銭貨出土数……75
第18表　銭貨観察表……78
第19表　遺物観察表⑬（Ｇ区）……81

附編―表１　武辺城跡出土人骨資料……115
表２　幼児大腿骨計測値比較……118
表３　幼児脛骨計測値比較……118
表４　大腿骨計測値比較……119
附表１　橈骨計測値……122
附表２　尺骨計測値……122
附表３　大腿骨計測値……123
附表４　脛骨計測値……123

Ⅰ　遺跡の立地・環境

1　地理的環境

本遺跡は佐世保市の北西部にあり，直線距離で北北西にある平戸市までは約20km，北北東にある松浦市までは約15km，南東にある大村市までは約40kmの地点に位置している。長崎県北部の北松浦半島・西彼杵半島北部一帯は，数百万年前の火山活動によって流出した大量の溶岩によって形成された玄武岩台地となっている。その下には，数千万年前の堆積作用によって造られた砂岩・泥岩・石炭からなる杵島・佐世保・野島層群が厚く広がっている。それらが，長年の河川の浸食作用等により当時の面はほとんど残っていないが，烏帽子岳・国見山・冷水岳・石盛山など佐世保市内の主だった山々が溶岩残丘として残存している。武辺城跡の南東に連なる将冠岳・但馬岳・弓張岳といった標高300～400mの山々も溶岩残丘である。これらの山々の西側は緩斜面で，佐世保層群といわれる砂岩等の水成岩層から構成されており，浸食作用により入り組んだ小尾根・小谷が裾野まで広がっている(註1)。武辺城跡がある標高約80mの古城山もその一部となっている。杵島・佐世保・野島層群は，北西へ緩く傾くか，ほぼ水平に砂泥互層になり，浸食に強い砂岩の部分が島や岬として取り残されている。

本遺跡の北東部から南西部にかけて総延長約20kmの相浦川が流れている。下流域には，河岸段丘が発達し，また，狭いながらも堆積平野がつくられ，そこでは人々の生活が営まれてきている。北東部から西に向かって流れる相浦川は，武辺城の北西約700m付近から流路を南西方向に変える。また，現在は海岸まで3kmほどあるが，城が機能していたと考えられる中世には，すぐ近くまで入り江となって海水が入り込んでいた(註2)。武辺城跡から相浦川を挟む西に約1kmの場所には，円錐状の愛宕山（標高259m）が聳え，この地の目印的存在となっており，信仰の対象ともなっている。

武辺城の立地環境を見てみると，北側と西側は川が自然の堀となり，東側は険しい山，南側は海に囲まれた好条件の場所に立地していたと考えられる。

平戸領となった後，竹辺，相浦地区は農業の重点地域として重要視されていった。江戸時代になると次々に相浦川河口が干拓事業により耕地化され，明暦2年から寛文6年にかけて相神浦や山口村が，安政4年から慶応元年にかけて大潟が干拓され，新田となっていった。

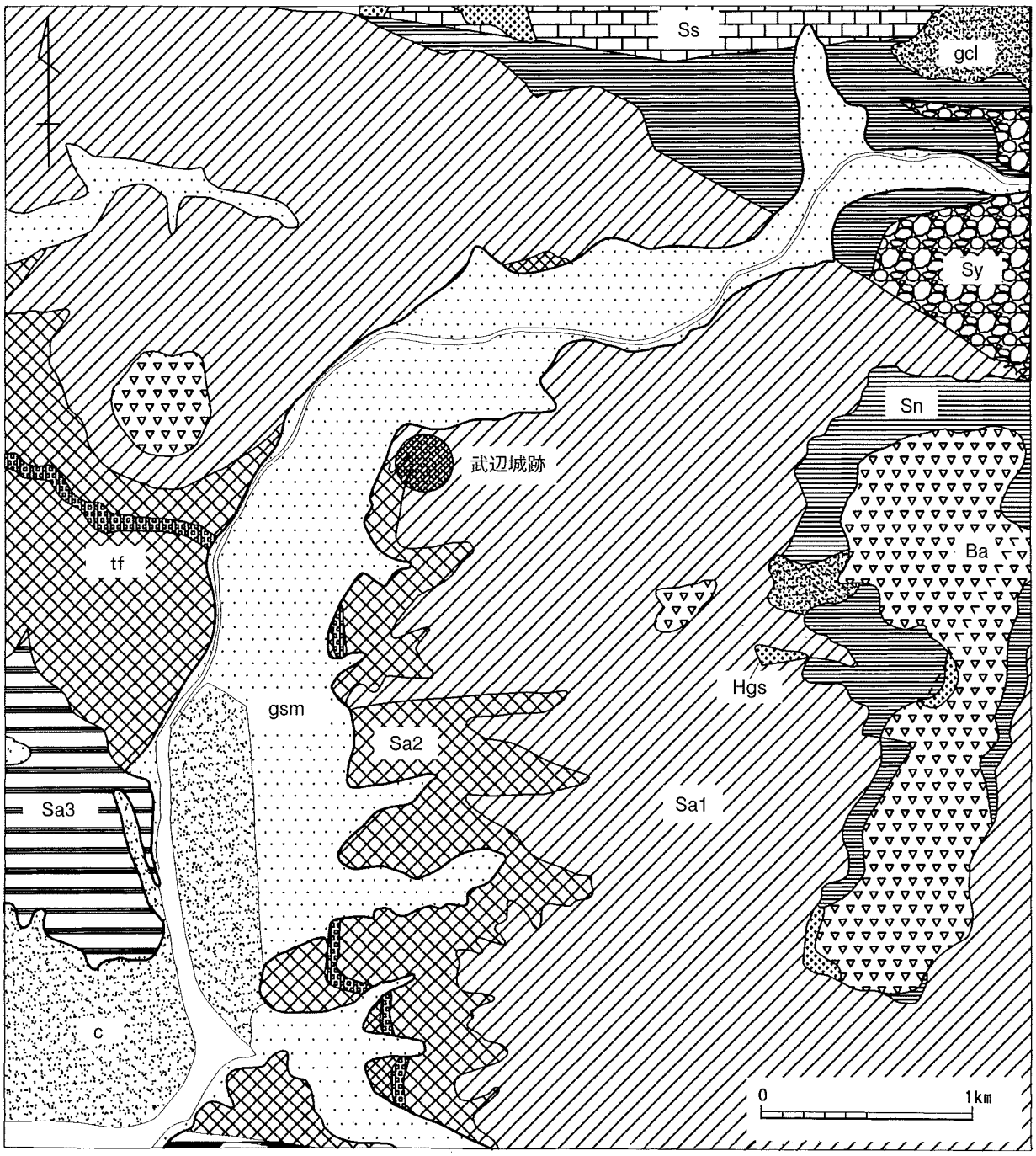
河川流域には田畑が発達し，山裾には村落が形成されていくが，そこで使用される燃料となる炭は将冠岳や弓張岳等の斜面を利用し焼かれていた。城が位置する古城山一帯にも炭窯跡が点在している。

古城山から飯盛山の間，わずか1kmほどの地域に門前遺跡，竹辺C遺跡，竹辺D遺跡など数多くの遺跡が点在している。点というより面で覆われていたと考える方がよいと思うが，縄文時代から中近世まで人々が自然地形をうまく利用した痕跡が見られる。標高80mほどの丘状の山域も，里山的存在として中世以前からも人々の生活の場として利用されてきた可能性が高い。

【註】

（註1）吉富一　1965『佐世保及近郊地形誌』隆文社

（註2）下山正一　2006「Ⅱ　遺跡の立地と環境」『門前遺跡』長崎県文化財調査報告書　第190集　長崎県教育委員会



凡例

c	第四紀 現世 土石	Sn	新第三紀 佐世保層群 中里層 砂岩・泥岩・石炭	Ss	新第三紀 佐世保層群 世知原層 砂岩・泥岩・石炭
gsm	第四紀 沖積世 礫・砂・泥	Sa1	新第三紀 佐世保層群 上部相浦層 砂岩・泥岩・石炭	Sy	新第三紀 佐世保層群 柚木層 砂岩・泥岩・石炭
gcl	第四紀 沖積世 礫・粘土	Sa2	新第三紀 佐世保層群 中部相浦層 砂岩・泥岩・石炭	tf	新第三紀～第四紀 佐世保層群中の 凝灰岩層
Hgs	新第三紀 鮮新世 礫・砂	Sa3	新第三紀 佐世保層群 下部相浦層 砂岩・泥岩・石炭	Ba	新第三紀 玄武岩

第２図　武辺城跡周辺の表層地質図（S＝1/30,000）

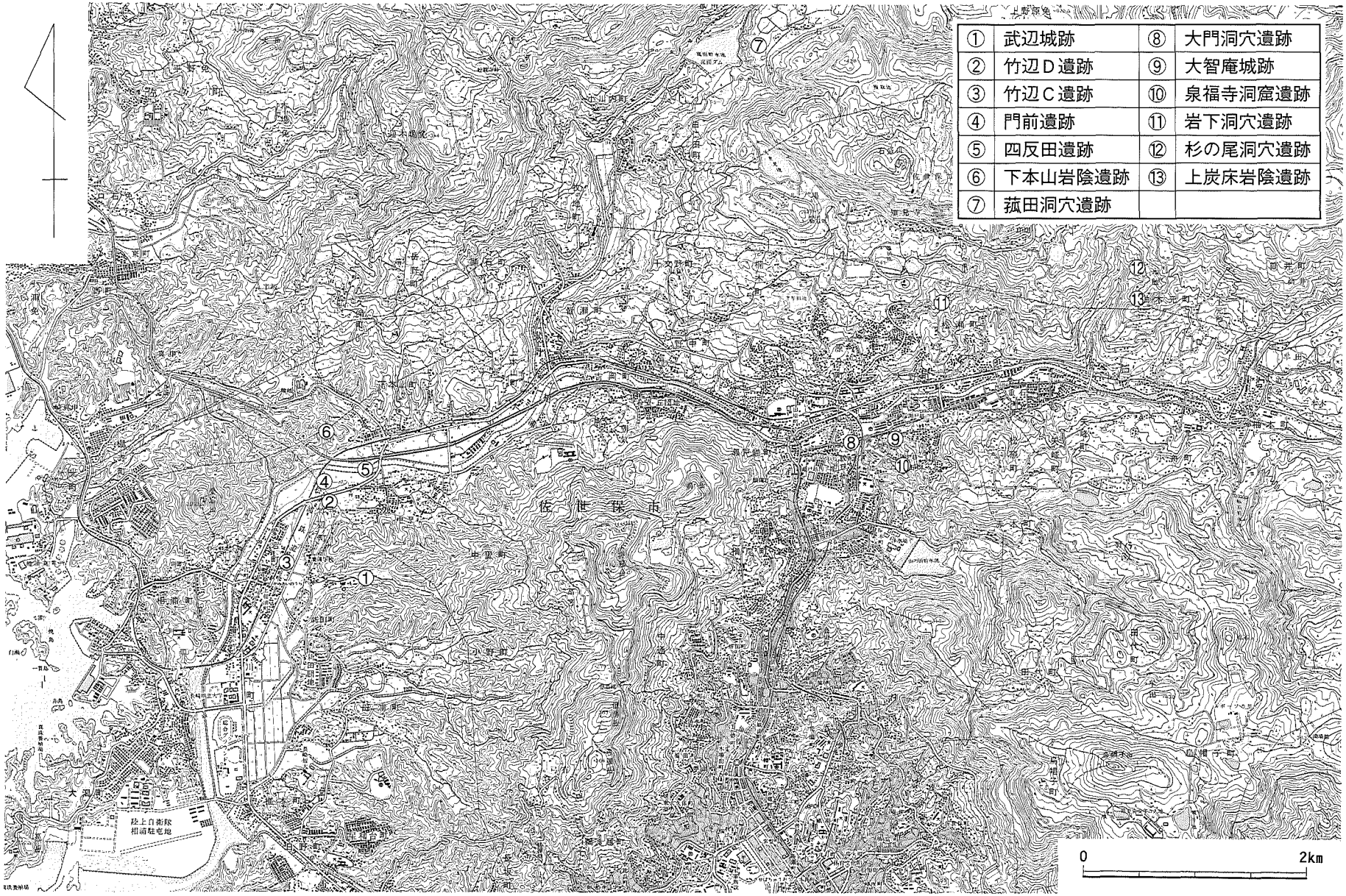
2　歴史的環境

長崎県北部の佐世保市や北松浦郡一帯には，旧石器時代から近代までの遺跡が数多く存在している。中でも武辺城跡のすぐ近くを流れる相浦川の流域とその北部を流れている佐々川の流域には，旧石器時代や縄文時代の洞窟・洞穴遺跡が集中しており，福井洞窟，直谷洞穴，泉福寺洞窟，岩下洞穴等，30箇所以上が把握されている。武辺城跡周辺でも，縄文時代前期～晩期，並びに弥生時代後期の下本山岩陰遺跡，縄文時代晩期～弥生時代中期にかけての四反田遺跡，旧石器時代～近世までの複合遺跡である竹辺Ｃ・Ｄ遺跡，小野Ｆ遺跡，現在も調査中である縄文時代～中世までの複合遺跡である門前遺跡などが列挙できる。

古代から中世の遺跡を見てみると，県北部では松浦党に関係したものが多い。『佐世保市史(註3)』をもとに松浦党の起源について時系列で述べてみると，県北部は８世紀初頭頃から成立していたといわれる肥前国の支配下におかれた。宇野御厨は全国に設立されていた御厨の一つとして，県北部から五島列島にかけての広範囲に存在していた。平安時代から鎌倉時代になると宇野御厨が松浦半島や伊万里湾沿岸部に限定されるようになる。さらに荘園的要素も加わり，宇野御厨荘といわれるようになった。嵯峨源氏の子孫で摂津国渡辺荘出の源久が延久元年（1069）に肥前国宇野御厨検校並びに検非違使として下向してきている。松浦氏の祖といわれるが，それ以前にも源聞や源知という源氏の一字姓の嵯峨源氏に関わる人物が国司として下向し，土着し力をつけていて武士団の基礎を築いていたことが『小右記』に記されている。子孫たちが松浦半島や伊万里湾沿岸を中心に各地に独立して松浦党といわれる武士団の形態を形成することになる。利害得失により行動する在地武士団であり，経済基盤は主として海域であった。『松浦家世伝』によると源久の孫である清が宗家松浦の第３代当主として，今福，志佐，相神浦，佐世保，五島，壱岐などを所領としている(註4)。その後も第４代めぐる，第５代直・・・と宗家松浦は続いていく。一方，第２代当主清の弟，披は平戸松浦の祖となり，以後，所領をめぐり宗家松浦と権力争いを続けていくこととなる。なお，宗家松浦氏には少弐氏が，平戸松浦氏には大友氏が背後につくことになるが，後に勢力拡大に成功した大友氏とつながりがあった平戸松浦氏が優位に立っていく状況となる。

城館跡をみてみると，まず平安時代末に源久が築城したと伝えられている松浦市今福の梶谷城跡，鎌倉時代の田平峯氏の里城，室町時代の志佐氏の陣内城ならびに直谷城，他にも室町時代には田平町の籠手田城，江迎町の深江城，平戸の勝尾岳城，箕坪城，小佐々町の沖田城，佐々町の鳥屋城，東光寺山城など旧佐世保市以北にも松浦党に関係する城が，海岸沿いや内陸部の交通の要所に築かれている。佐世保市域の城では，室町時代に相浦川流域に飯盛城，武辺城跡，大智庵城が築かれ，その南に佐世保城が存在している。それより南部になると室町時代後期から安土桃山時代にかけての大村氏に関係する山城が主要地に築かれるようになる。

武辺城は宗家松浦の第13代盛が，宗家松浦の本拠地を松浦から相神浦へ移し，築いたとされる。移転の理由は，佐世保市教育委員会『武辺城跡発掘調査報告書（第２次)』によると「その第一の理由は消極的理由で，平戸松浦氏による圧迫である。南北朝・室町時代，五島の小値賀平戸島北部，田平という海上航路を押さえられていた平戸松浦氏及び同じ峰一族の田平氏が勢力を拡大したことによって南下を余儀なくされた。第二の理由は積極的理由で，朝鮮・中国との貿易のための港を求めて相神浦へ進出したという，二つの理由が考えられる(註5)。」とある。平戸松浦氏との力関係，貿易による利益獲得等から松浦に居残るより相神浦への移転を最善としたと考えられる。



①	武辺城跡	⑧	大門洞穴遺跡
②	竹辺Ｄ遺跡	⑨	大智庵城跡
③	竹辺Ｃ遺跡	⑩	泉福寺洞窟遺跡
④	門前遺跡	⑪	岩下洞穴遺跡
⑤	四反田遺跡	⑫	杉の尾洞穴遺跡
⑥	下本山岩陰遺跡	⑬	上炭床岩陰遺跡
⑦	菰田洞穴遺跡		

第３図　相浦川流域の主な遺跡

出土遺物を見てみると，平成８年度の同市教育委員会の発掘調査において主曲輪から14世紀～16世紀にかけての貿易陶磁器が多数出土している。『佐世保市史』には「『海東諸国紀』によると源盛は，『丁丑年』（1457，長禄元），『肥前州上松浦丹後守太守源盛』と名乗る書を携えて朝鮮へ使者を派遣したことがわかる。また，朝鮮王朝より図書を授けられ，年に一艘の遣使が認められている。さらに同書には，『源盛』が少弐氏の麾下であり，兵を保持していることを簡潔に記している。[註6]」と記述されている。東漸寺墓地の石塔群の中には応仁元年（1467）銘の盛の宝篋印塔がある。以上のことより，15世紀半ば頃より武辺城が機能していたと考えられる。また，武辺城跡周辺の門前遺跡からは古代の土師器や緑釉陶器，黒色土器，中世の瓦器や貿易陶磁器が多数出土している。竹辺Ｃ・Ｄ遺跡からも中世の貿易陶磁器の出土がみられる。宗家松浦氏が移転してくる以前から在地領主の存在があり対外との交流が行われていたことが窺える。周辺には石塔類も多く見られる。14世紀から建塔された竹辺町の阿弥陀堂跡石塔群をはじめ，15世紀造立の中里町の庄屋前石塔群，中里・阿弥陀寺跡石塔群，キンナギ石塔群，下本山町の新豊寺跡石塔群，牧地町の妙観寺跡石塔群等が列挙できる。このことからも周辺地区に有力者の存在を推察できる。

13代盛の後，『松浦家世伝』によると，延徳２年（1490）相神浦の領主松浦定が大智庵城を築城したという記述がみえる[註4]。大智庵城が築かれた瀬戸越は南の有馬氏，北の平戸松浦氏に対抗する場所として重要であり，かつ地形的条件に恵まれていたと考えられる。明応７年（1498），松浦政の時に平戸松浦氏の弘定に襲われ大智庵城は落城している。政は戦死し，その子，親は平戸の人質となるが，同市教育委員会の武辺城跡発掘報告書では「輸入陶磁器が発掘されており，中でも15世紀後半から16世紀前半に編年されるグループが火を受け釉薬が溶けたものもあることから，武辺城跡が15代政の時代まで宗家松浦氏の本城として存続し，大智庵城落城のとき同時に攻撃された可能性がある[註5]。」と記述されている。その後，平戸松浦氏の人質になっていた松浦親により飯盛城が築かれるが，平戸松浦に２度にわたり攻撃された後，和睦によって長年の戦いが集結し，相神浦は平戸方の支配下に置かれていく。攻撃された飯盛城とその時の武辺城の関係の記載は，『日本城郭大系』にみえる。それによると，「永禄の飯盛城の戦いでは平戸松浦勢が武辺を攻めているのである。恐らく本拠を大智庵城に移し，さらにまた飯盛城においた間も，ここに支城ないし砦があったものと思われる。[註7]」とある。武辺城は常に平戸松浦氏の標的に置かれ攻撃の対象になっていたことが窺える。

平戸松浦氏の支配下になった後，安土桃山時代から江戸時代にかけて平戸藩の所領として確定していった。川下新田や大潟新田の開発も進められ，平戸藩にとって重要な穀倉地帯となっていく。また，武辺城跡の北側に位置する中里の町は，江戸時代に平戸往還の宿場として栄え，本陣や脇本陣があった。武辺城跡周辺の相浦川下流域は，好条件の環境と地形を利用して縄文時代から近世に至るまで人々の生活が連綿と続けられていた重要な地域であったといえる。　（今里順一郎）

【註】

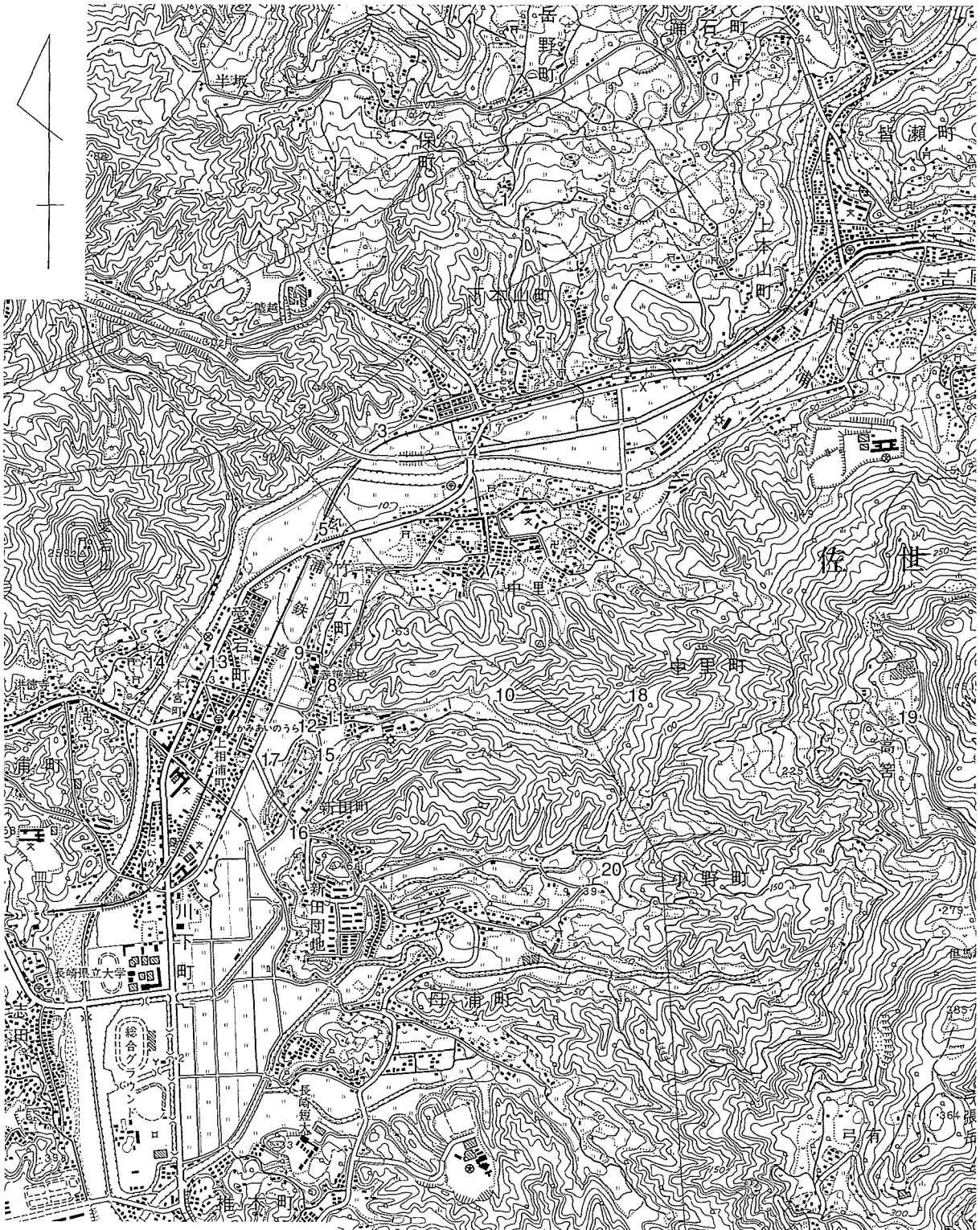
（註３）瀬野精一朗　2002「第３編　中世編　第１章　鎌倉時代」『佐世保市史　通史編　上巻』佐世保市史編さん委員会

（註４）『松浦家世伝』

（註５）池田和博　1996「第７章　宗家松浦氏の歴史」『武辺城跡発掘調査報告書（第２次）』平成７年度佐世保市埋蔵文化財発掘調査報告書　佐世保市教育委員会

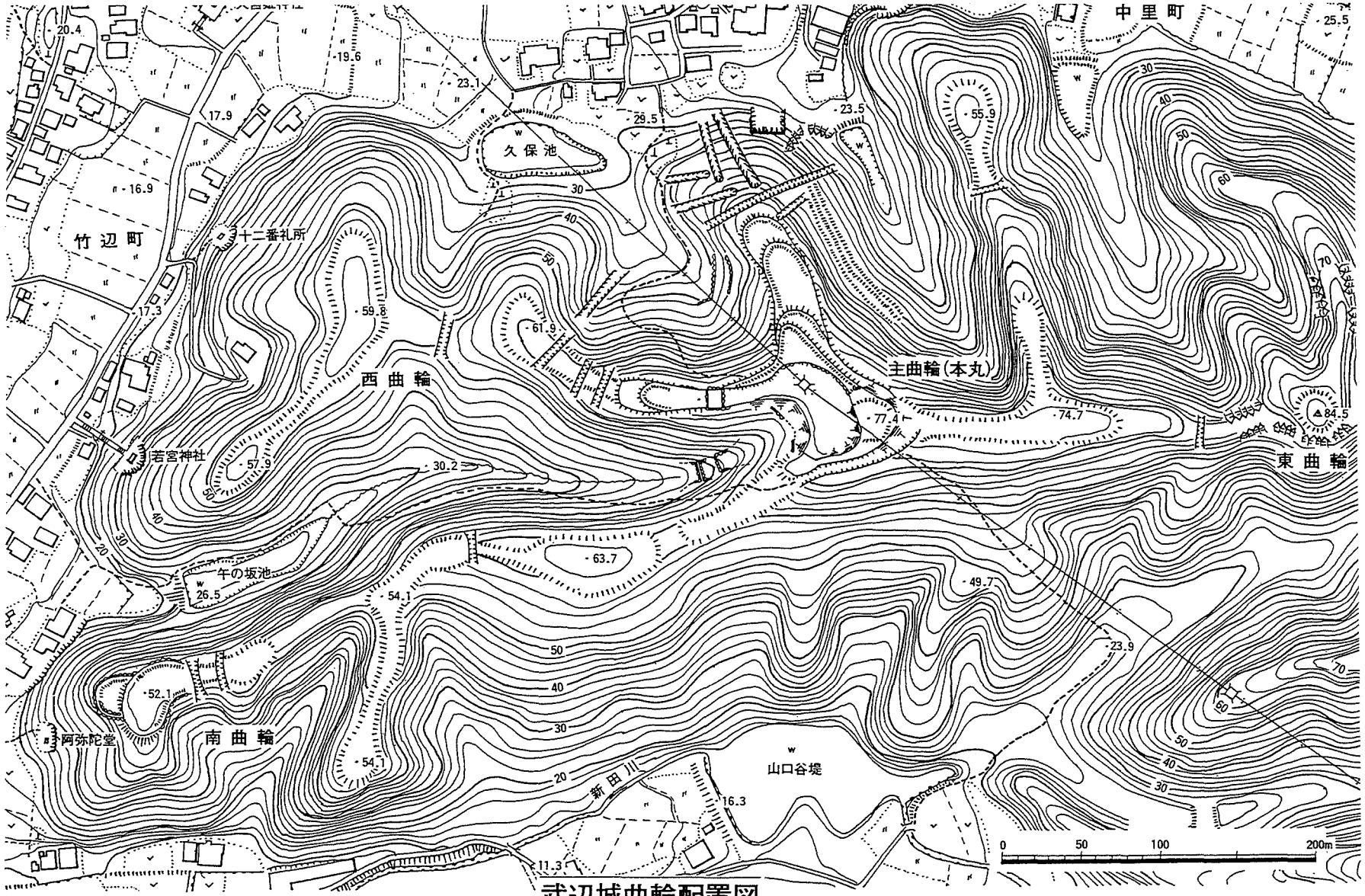
（註６）徳永健太郎　2002「第３編　中世編　第３章　室町時代」『佐世保市史　通史編　上巻』佐世保市史編さん委員会

（註７）外山幹夫他　1980『日本城郭大系』17　新人物往来社



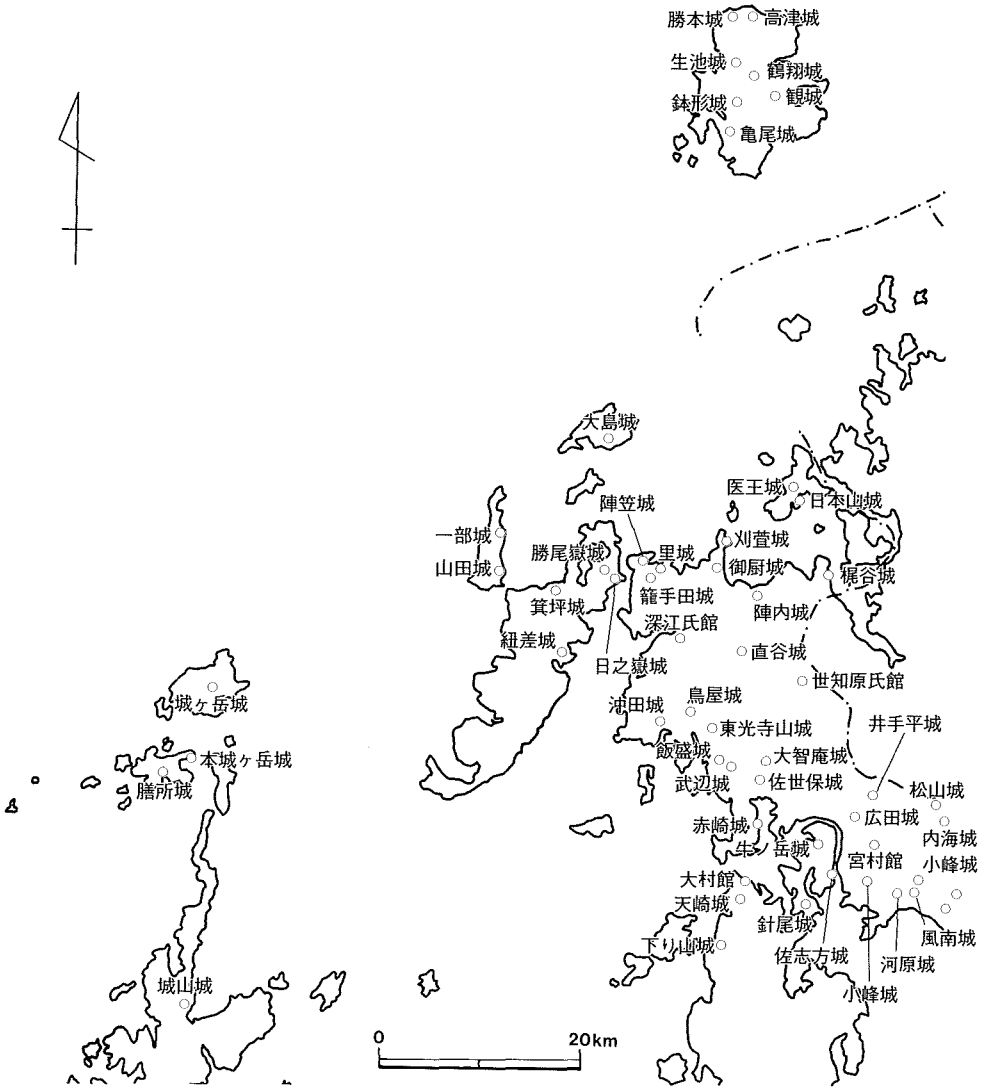
1	一本松砦跡	2	三丸館跡	3	下本山岩陰遺跡	4	四反田遺跡
5	門前遺跡	6	松浦丹州盛之墓	7	竹辺Ａ遺跡	8	竹辺Ｄ遺跡
9	竹辺Ｃ遺跡	10	武辺城跡	11	阿弥陀堂の石塔群	12	殿平遺跡
13	愛宕遺跡	14	飯盛神社経塚	15	新田板碑	16	新田遺跡
17	新田中世墓址群	18	陣ノ尾砦	19	高筈遺跡	20	小野Ｆ遺跡

第４図　武辺城跡周辺の遺跡（Ｓ＝１/25,000）

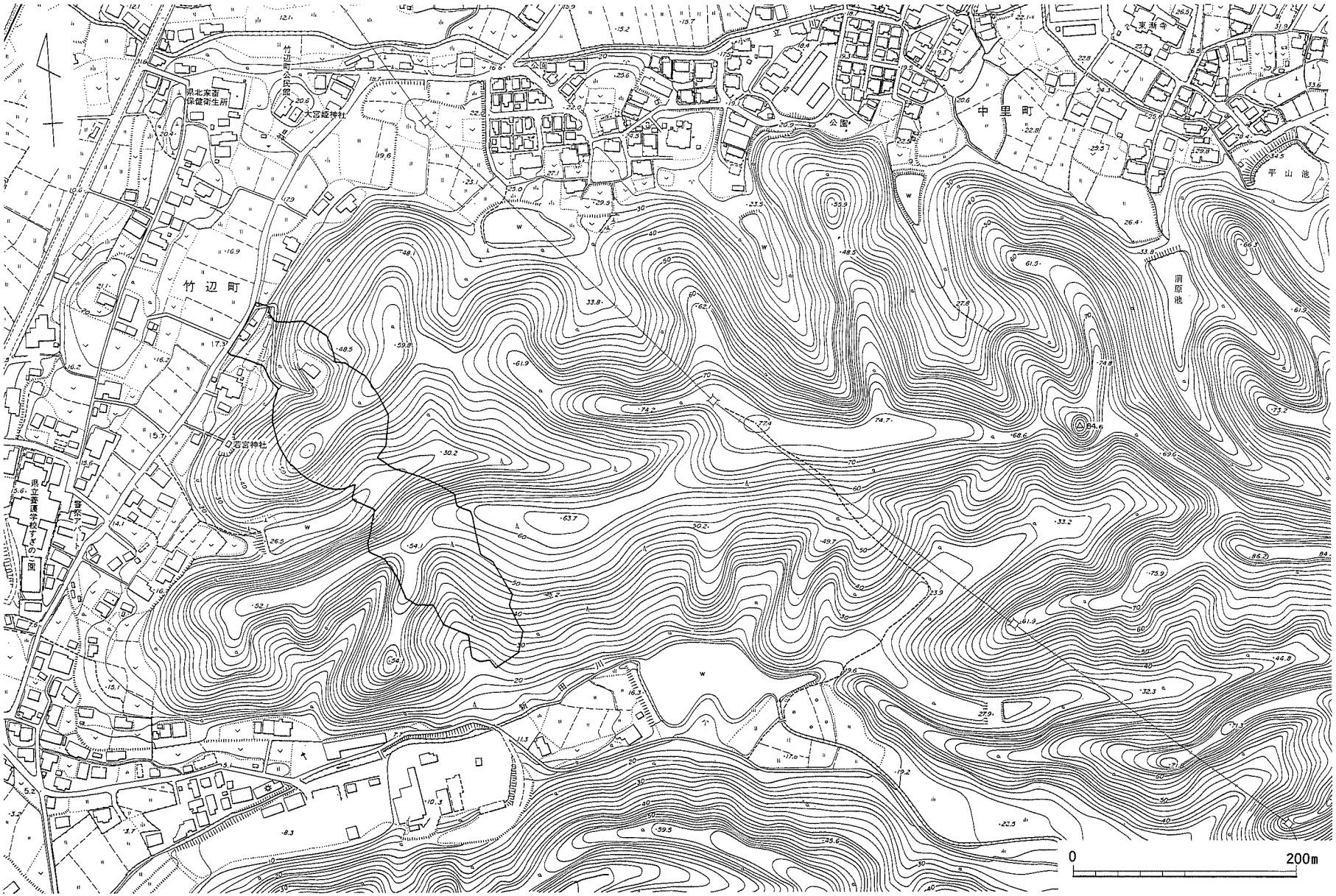


武辺城曲輪配置図

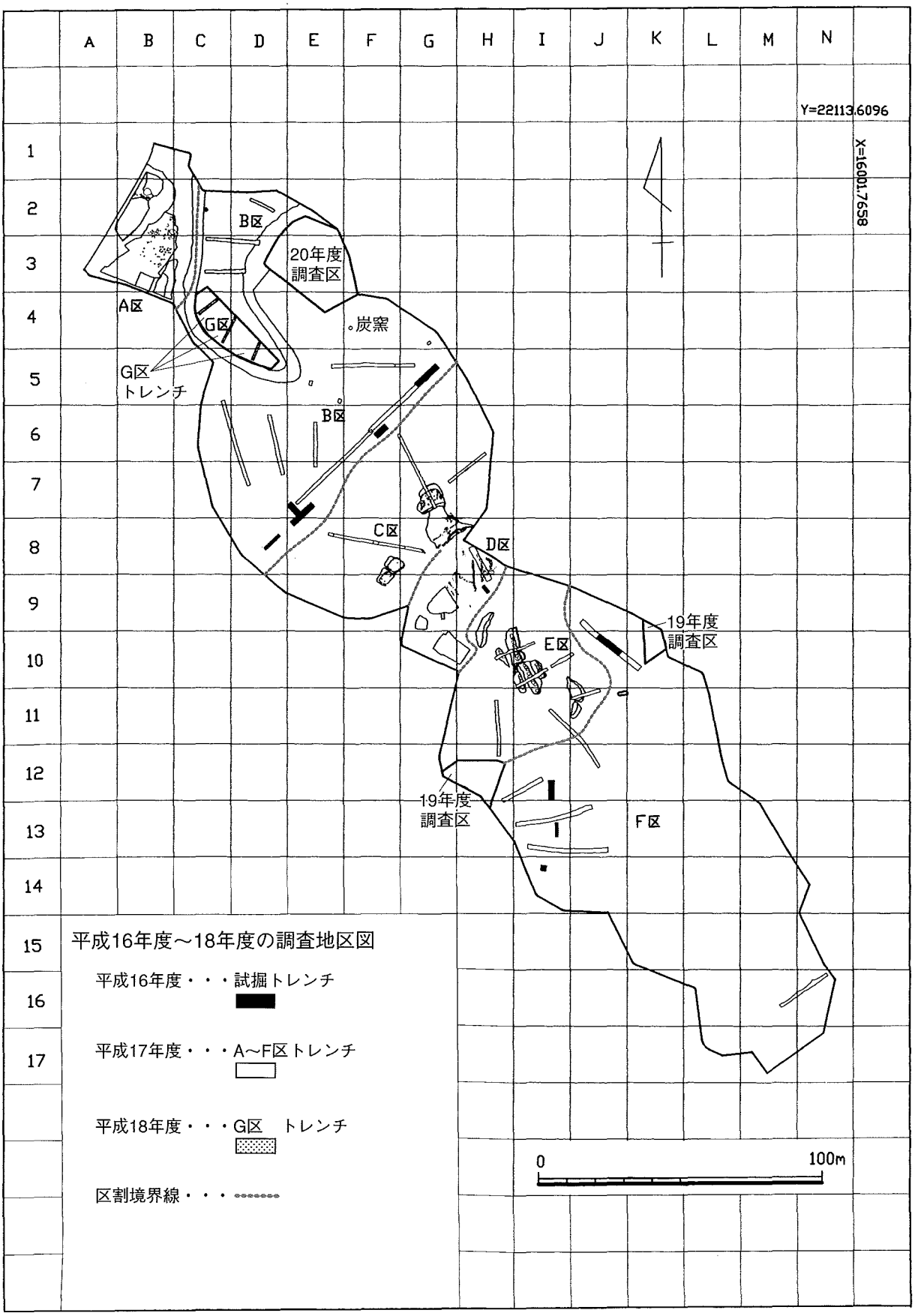
第５図　武辺城跡縄張り図（佐世保市教育委員会　1997『武辺城跡発掘調査報告書（第２次）』より抜粋）



第６図　県北部山城分布図



第７図　武辺城跡発掘調査範囲図（Ｓ＝１/5,000）



第８図　16年度～18年度の調査地区図（Ｓ＝１/2,000）

Ⅱ　平成16年度の範囲確認調査

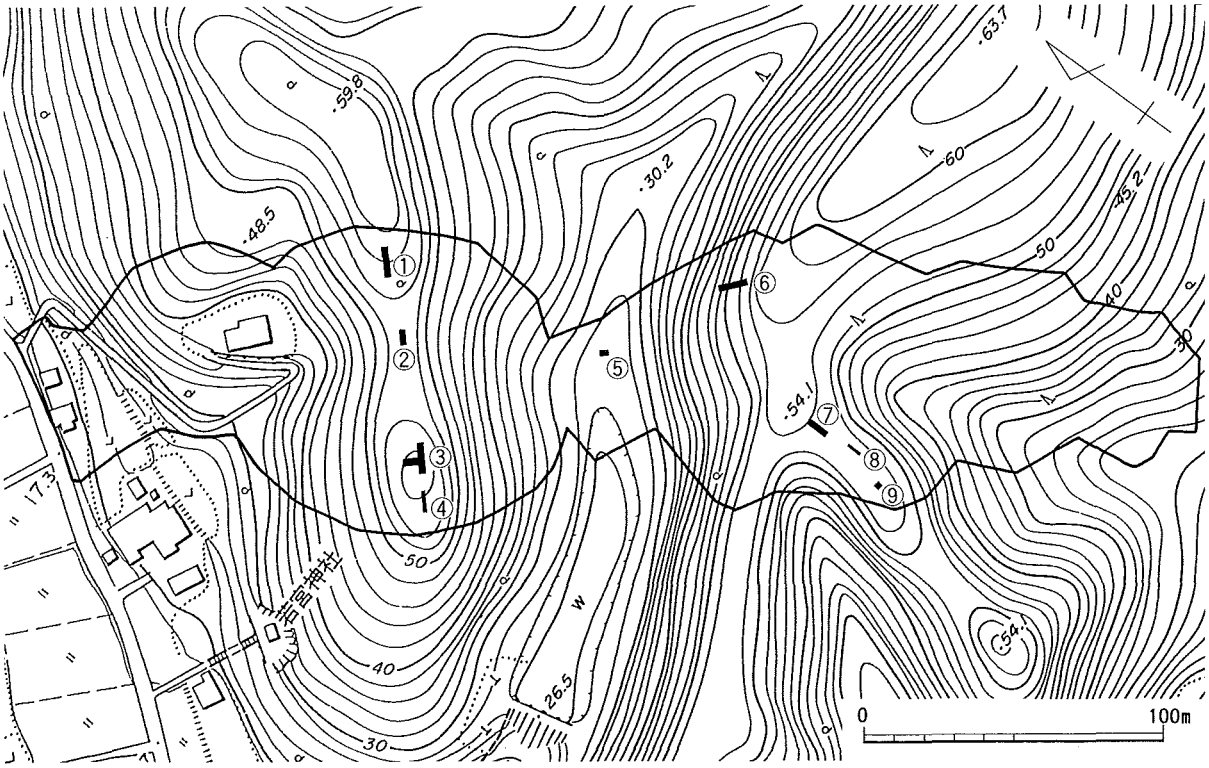
1　調査概要

武辺城跡は，昭和56年度に佐世保市教育委員会により，中世山城分布調査が実施され，縄張りの概要調査の結果が報告されている(註8)。また，相浦川流域の史跡保全を検討する構想の基礎調査の一環として，同市教育委員会により平成６年度に試掘調査が行われ，これを受け平成７年度に第１次調査，平成８年度に第２次調査が実施された。３年次にわたる調査の結果，城域が東西約800m，南北約500mの範囲に広がり，主曲輪を中心として東，西，南，北の出曲輪が確認された。武辺城の「出城」と伝えられる殿平城は，この調査によって南曲輪として考えられている。主曲輪からは，平場，天守台，犬走り，大手，石垣，土塁，７棟の建物跡，柱穴等が確認され，各曲輪周辺から土塁，空堀などが報告されている。遺物は15世紀頃の国産陶磁器，輸入陶磁器，土器，石製品，鉄製品等が報告されている。

長崎県教育委員会は，平成９年に西九州自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財について，「佐世保道路」「佐々佐世保道路」建設計画の路線内の現地踏査を実施した。結果，武辺城跡も発掘調査が必要として周知された。

調査区	地　　区	面積(m²)
TP. 1	西曲輪部　東側丘陵部	30
TP. 2	西曲輪部　鞍部	10
TP. 3	西曲輪部　西側丘陵部	30
TP. 4	〃	7
TP. 5	谷部	8
TP. 6	南曲輪部　東側丘陵部	30
TP. 7	南曲輪部　西側丘陵部	14
TP. 8	〃	5
TP. 9	〃	10

第１表　試掘坑配置表



第９図　試掘坑配置図

県教育庁佐世保教育事務所は，平成17年１月11日～３月１日まで工事区域にかかる21,000㎡の範囲確認調査を実施した。工事区域は佐世保市教育委員会で報告された，西曲輪(註9)から南西へ続く尾根と，主曲輪から南曲輪に至る尾根の一部が含まれた。試掘坑（TP.と略す）は同市教育委員会により調査報告されている縄張りの位置関係を考慮し，西曲輪から西にのびる尾根に４箇所（TP.１～４），南曲輪へ至る尾根に４箇所（TP.６～９），その両尾根間の大手と考えられている谷部に１箇所（TP.５）合計９箇所設定した。

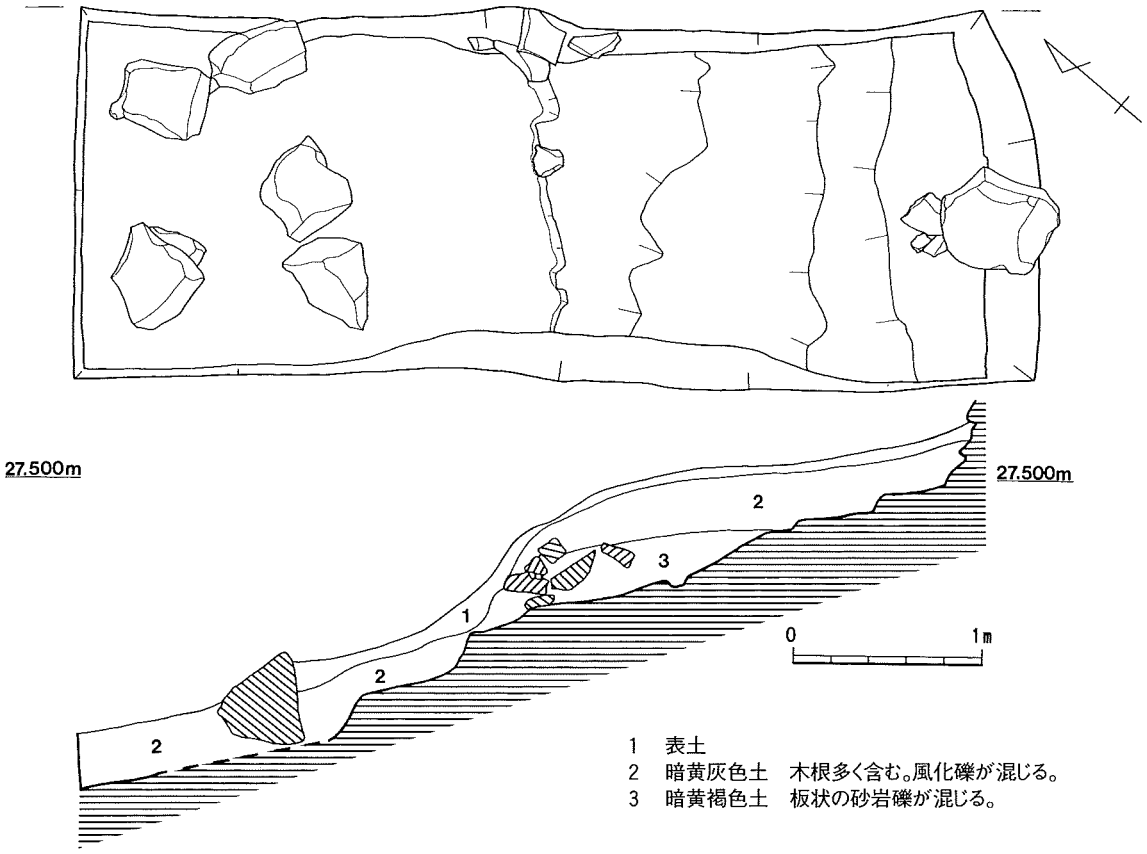
試掘坑からは遺構は検出されなかったが，調査区内において調査区の北西端横を通る市道傍に，砂岩製の板碑が確認された。「明治廿三年二月一日　新四国第七十番東漸寺奥のいん」などの銘が見られる。大手とされる谷部を挟む，両斜面には平場が確認され，平場内から近世墓，集石がみられた。南曲輪へ至る尾根はボタ山の堆積が厚く旧地形が確認できなかった。遺物はTP.３の２層から弥生土器小片が出土したが，武辺城跡に関連する遺物は出土していない。　（柴田妃三光）

【註】

（註８）久村貞男　1981『中世山城分布調査報告書』佐世保市埋蔵文化財調査報告書

（註９）久村貞男　1996『武辺城跡発掘調査報告書（第１次）』佐世保市埋蔵文化財調査報告書の記載に合わせ曲輪と表記する。

２　土　　層（第10図　図版１）



第10図　TP.５平面図及び土層断面図（S＝1/40）

Ⅲ　平成17年度の本調査

1　調査概要

当初，18,200㎡について発掘調査を実施したが，新たに９月から道路建設用地取得の進展に伴い，1,500㎡の追加と調査区内の樹木の伐採木の処置のために，19,700㎡について計画変更を行った。

調査は，調査区を国土座標系に合わせ，南北を主軸とする20m方眼のグリッドを設定し，南北に１～18，東西にＡ～Ｎの番号を付した。全体で24本のトレンチを設定した。調査区域が広範囲であるため，丘陵の尾根部分や谷部分を基準にＡ～Ｆの６地区に分け，地区ごとに調査を行った。大部分の地区において重機が搬入できず，表土から人力により掘削を行った。搬入可能な箇所は，重機で表土掘削を行った。しかし，伐採木の搬出のため索道の設置工事や処理作業等も行い，表土掘削に至るまでに時間を費やした。急傾斜を呈する場所が数カ所存在したため，安全に配慮し調査作業を実施した。各区の状況は以下の通りである。

Ａ区は，武辺城跡の北西地区で標高が低く，河岸段丘との接点に位置する。平場が３段造成され，数年前まで宅地として利用されていた。明治時代に建立された東漸寺奥の院への道標となる板碑があり，その通路としても利用されてきたようである。最下段の平場の斜面直下からは湧水が認められた。

Ｂ区は，西曲輪から派生する尾根筋と平地及びその北西側斜面である。Ａ区の南東側に位置し，調査区内では標高が最も高い。雑木林がない状態では相浦川下流域周辺を一望することができる。

Ｃ区は，西曲輪から伝大手とされる谷部にかけての斜面地にあたり，Ｂ区の南東側に位置する。斜面下部には平場が２段造成されている。また，西側斜面の中腹にも段違いの小平場が検出された。

Ｄ区は，伝大手とされる谷筋で谷を北東に遡ると主曲輪に達する。Ｃ区の最下部の平場とは，約４ｍの段差がある。Ｄ区の南西側には隣接して「午の坂池」と称される溜池が存在する。

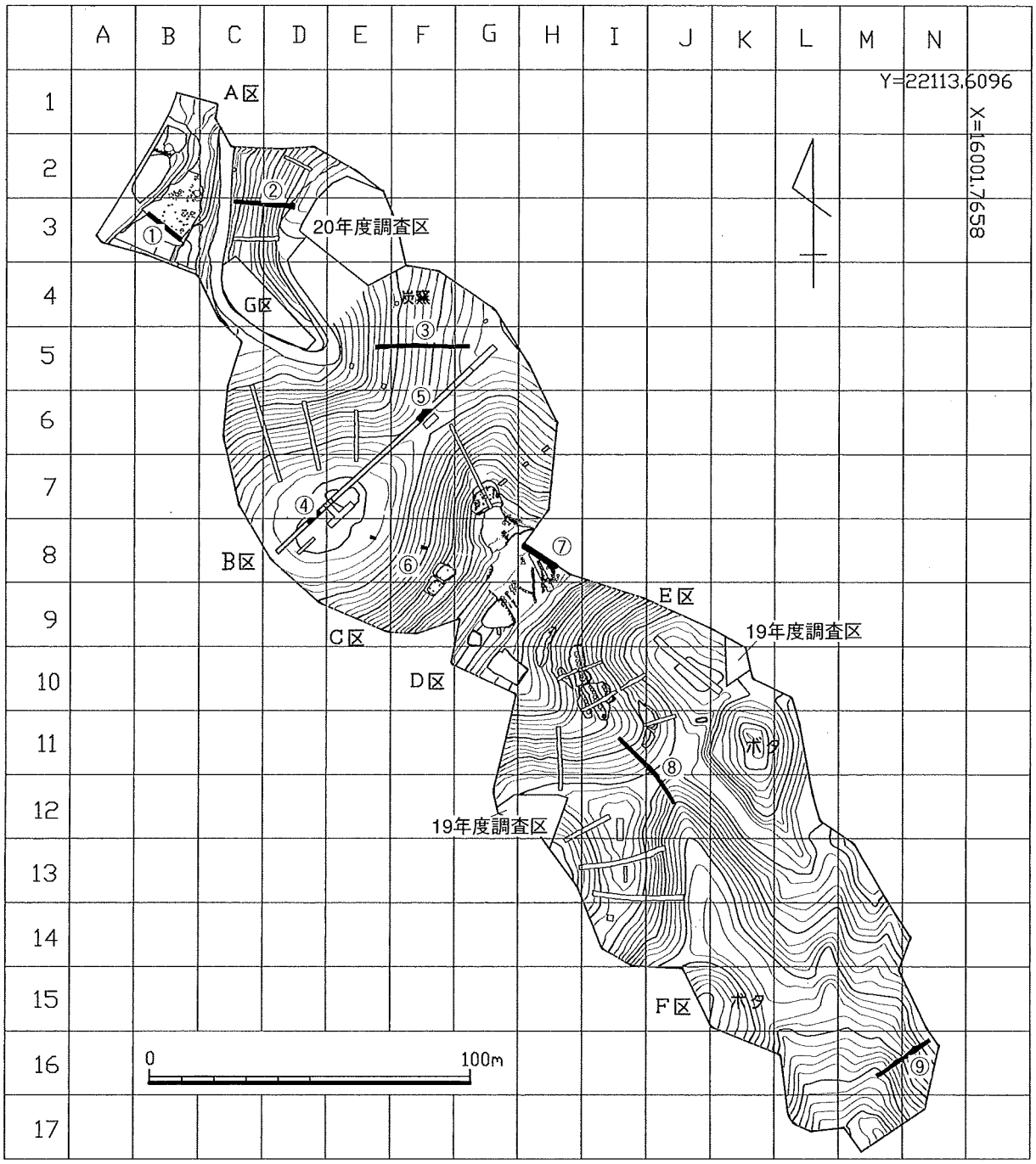
Ｅ区は，Ｄ区を挟みＣ区に対面する斜面地にあたる。武辺城全体では，南曲輪につながる尾根の西斜面に位置する。平場が６段造成されており，近世～現代の墓地として利用されていた。

Ｆ区は，南曲輪に至る尾根とその東側斜面である。武辺城全体では，南東部に位置する。昭和期の炭坑に関する遺構が確認され，ボタが大量に廃棄されていた。

結果，主にＡ・Ｃ・Ｅ区で中世から近現代にかけて土地利用が見られた。しかし，武辺城が機能していた時期の明確な遺構・遺物は確認できなかった。　（今里順一郎）

地区	位　置	標　高	トレンチ数
A	北西端	17m～30m	2
B	西側尾根とその西斜面	25m～58m	8
C	西側尾根の東斜面	31m～54m	3
D	西側尾根と東側尾根に挟まれた谷部	26m～31m	2
E	東側尾根とその西斜面	28m～50m	3
F	東側尾根の東斜面	24m～50m	6

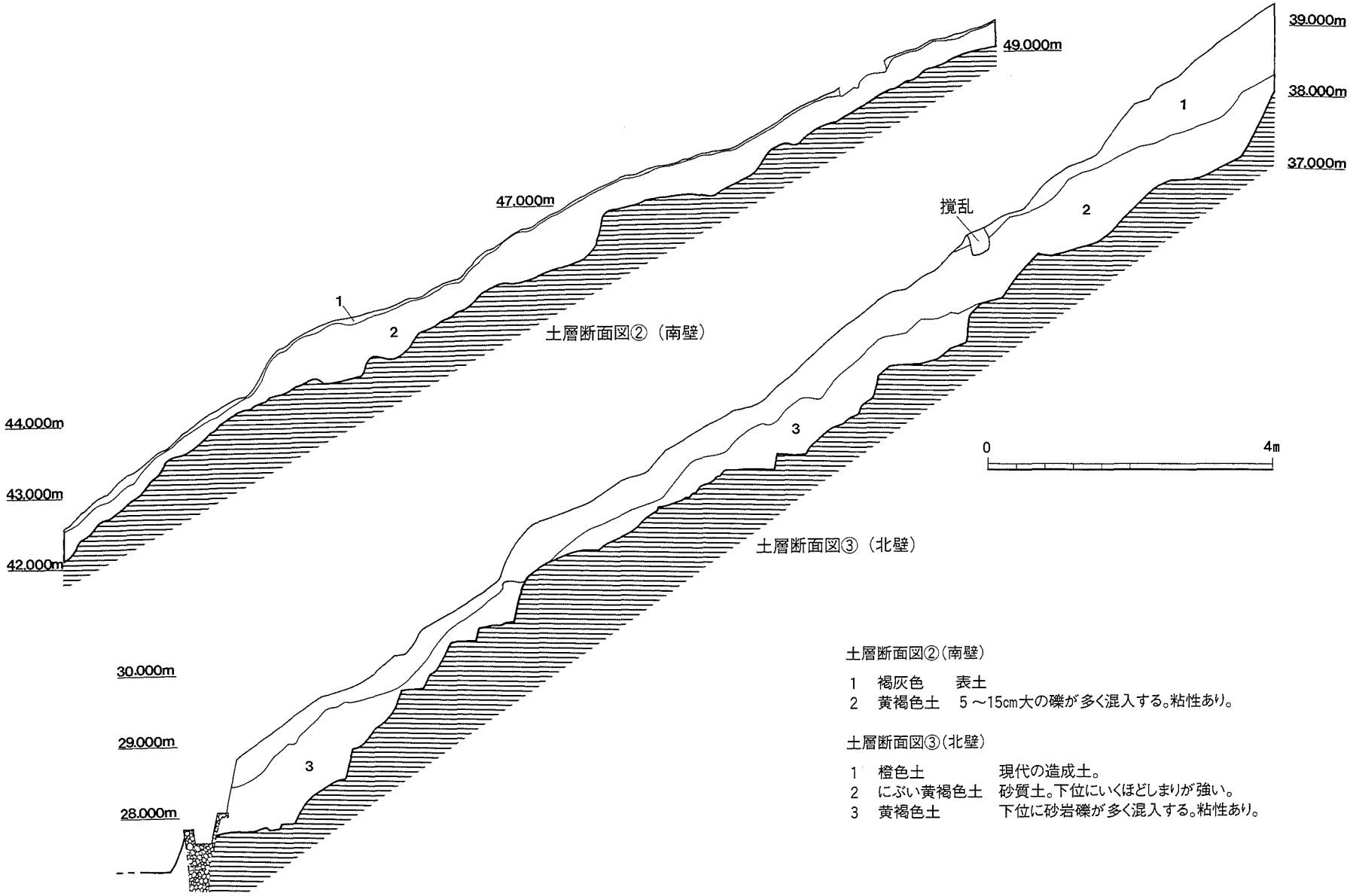
第２表　地区別説明表



第11図　調査区地形図及びトレンチ配置図（S＝1/2,000）

2　土　　層

斜面や尾根においての土層堆積は1.表土（腐葉土）2.褐色土（木根含む）3.黄褐色土（砂岩礫含む）4.赤褐色土・岩盤が確認された。D区は水の影響を受けた土層状況がみられ，各平場は盛土や削平を受けた痕跡が確認された。土層堆積状況については各平場において図示した。　　（柴田妃三光）



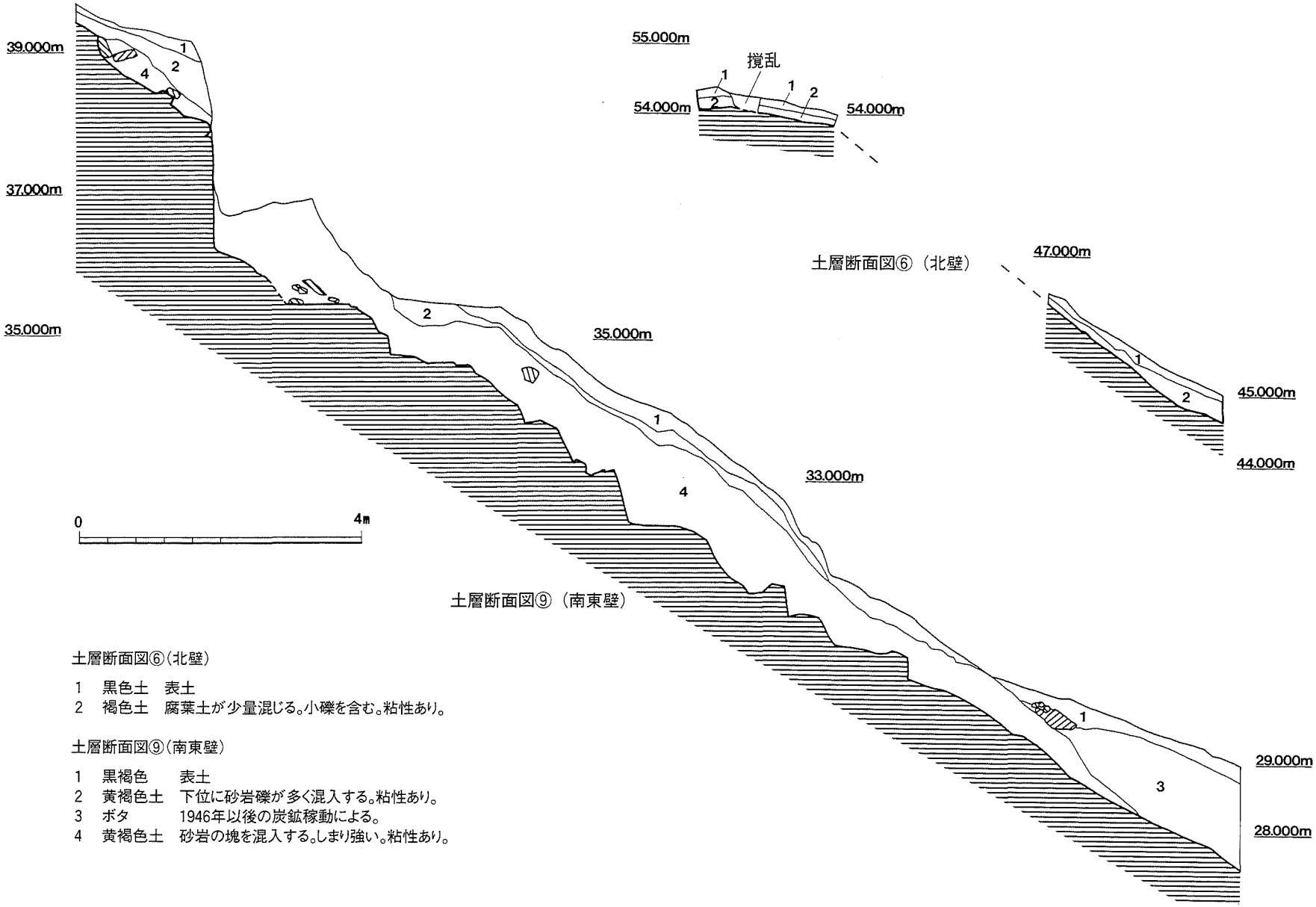
土層断面図②(南壁)

1　褐灰色　　表土
2　黄褐色土　5～15cm大の礫が多く混入する。粘性あり。

土層断面図③(北壁)

1　橙色土　　現代の造成土。
2　にぶい黄褐色土　砂質土。下位にいくほどしまりが強い。
3　黄褐色土　　下位に砂岩礫が多く混入する。粘性あり。

第12図　土層断面図②・③（S＝1/80）



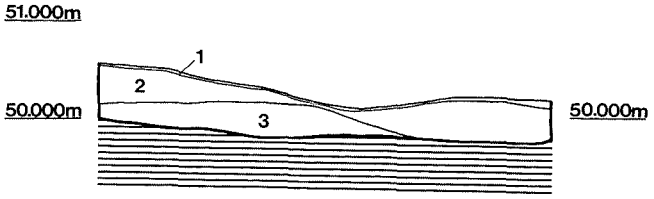
土層断面図⑥(北壁)

1　黒色土　表土
2　褐色土　腐葉土が少量混じる。小礫を含む。粘性あり。

土層断面図⑨(南東壁)

1　黒褐色　　表土
2　黄褐色土　下位に砂岩礫が多く混入する。粘性あり。
3　ボタ　　1946年以後の炭鉱稼動による。
4　黄褐色土　砂岩の塊を混入する。しまり強い。粘性あり。

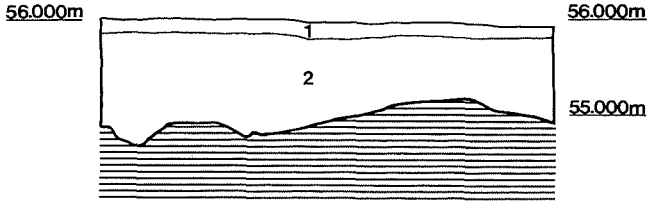
第13図　土層断面図⑥・⑨（S＝1/80）



土層断面図⑤

土層断面図⑤（東壁）

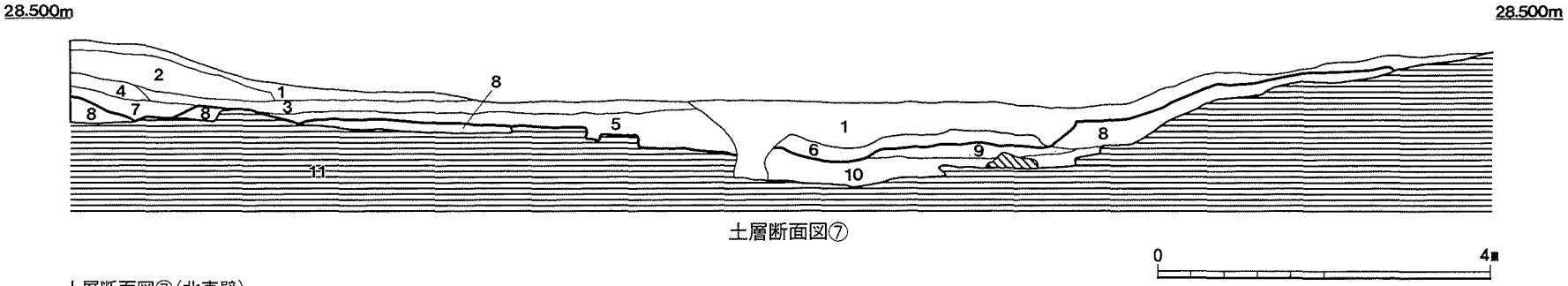
1　褐色土　　表土
2　黄褐色土　木の根が多い。5～10cm大の礫を少量含む。粘性あり。
3　黄褐色土　5～15cm大の礫を多量に含む。ややしまる。粘性あり。



土層断面図④

土層断面図④（東壁）

1　黒褐色土　　表土・撹乱
2　明黄褐色土　15cm大の砂岩が混じる。しまり弱い。
　　下位ほど粘性強い。

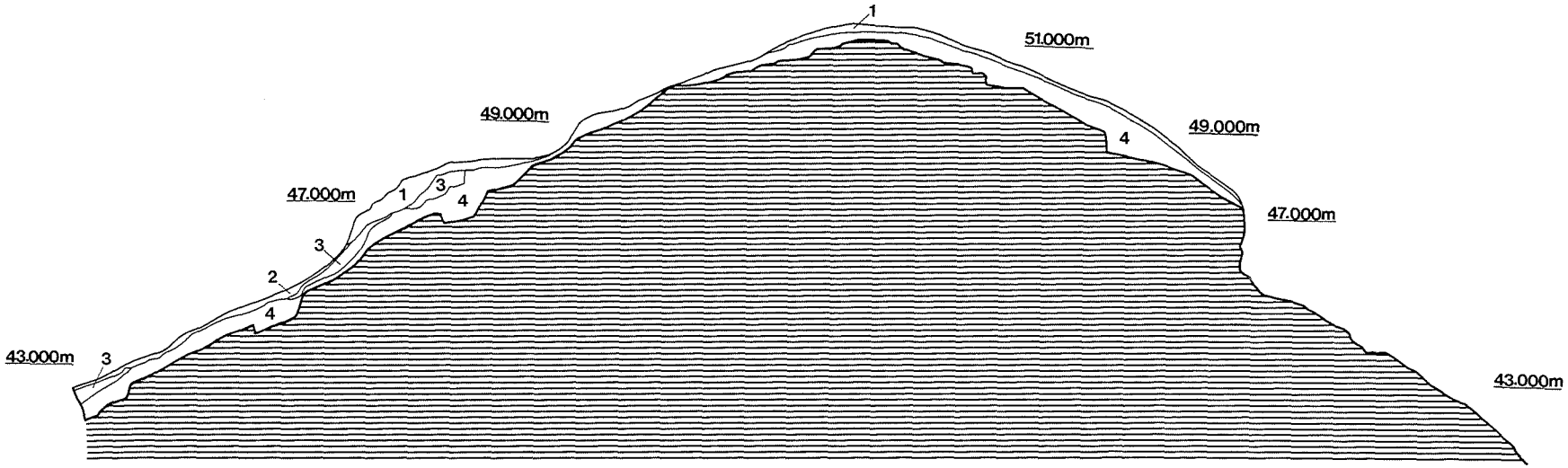


土層断面図⑦

土層断面図⑦（北東壁）

1　表土・撹乱
2　褐色シルト粒土　　5cm大の風化礫を若干含む。しまり弱い。粘性あり。
3　明褐色シルト粒土　上位に10cm大の礫を多く含む。
4　明褐色シルト粘土　黄褐色土が若干混じる。炭化物をわずかに含む。ややしまる。
5　灰黄褐色シルト粘土　炭化物をわずかに含む。ややしまる。
6　灰黄褐色土　　砂粒を含む。にぶい黄褐色土が少量混じる。炭化物をわずかに含む。しまり弱い。
7　褐色シルト粘土　　ややしまる。
8　明褐灰色　　表土を若干含む。
9　褐色土　　砂粒を含む。黄褐色土が若干混じる。炭化物をわずかに含む。
10　灰色土　　砂粒を含む。灰黄褐色土が少量混じる。しまり弱い。
11　岩盤

第14図　土層断面図⑤・④・⑦（S＝1/80）

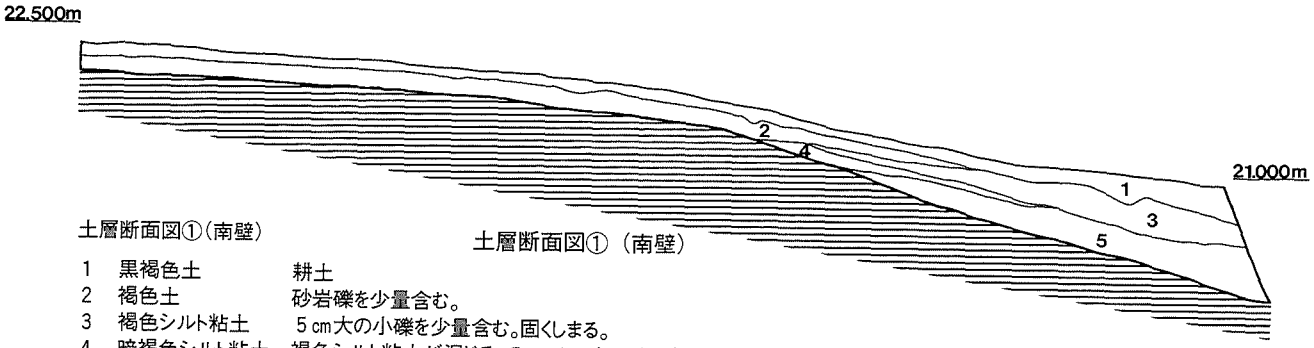


土層断面図⑧（北東壁）

土層断面図⑧(北東壁)

1　表土・撹乱
2　にぶい黄褐色のシルト粒　ボタを少量含む。しまり弱い。
3　黄褐色シルト粘土　上層が若干混じる。ボタを少量含む。しまり弱い。
4　橙色土　黄褐色土が若干混じる。しまり弱い。

0　8m



土層断面図①（南壁）

土層断面図①(南壁)

1　黒褐色土　耕土
2　褐色土　砂岩礫を少量含む。
3　褐色シルト粘土　5㎝大の小礫を少量含む。固くしまる。
4　暗褐色シルト粘土　褐色シルト粘土が混じる。5～10㎝大の礫を含む。固くしまる。
5　暗褐色シルト粘土　褐色シルト粘土が若干混じる。10㎝大の風化礫を少量含む。固くしまる。

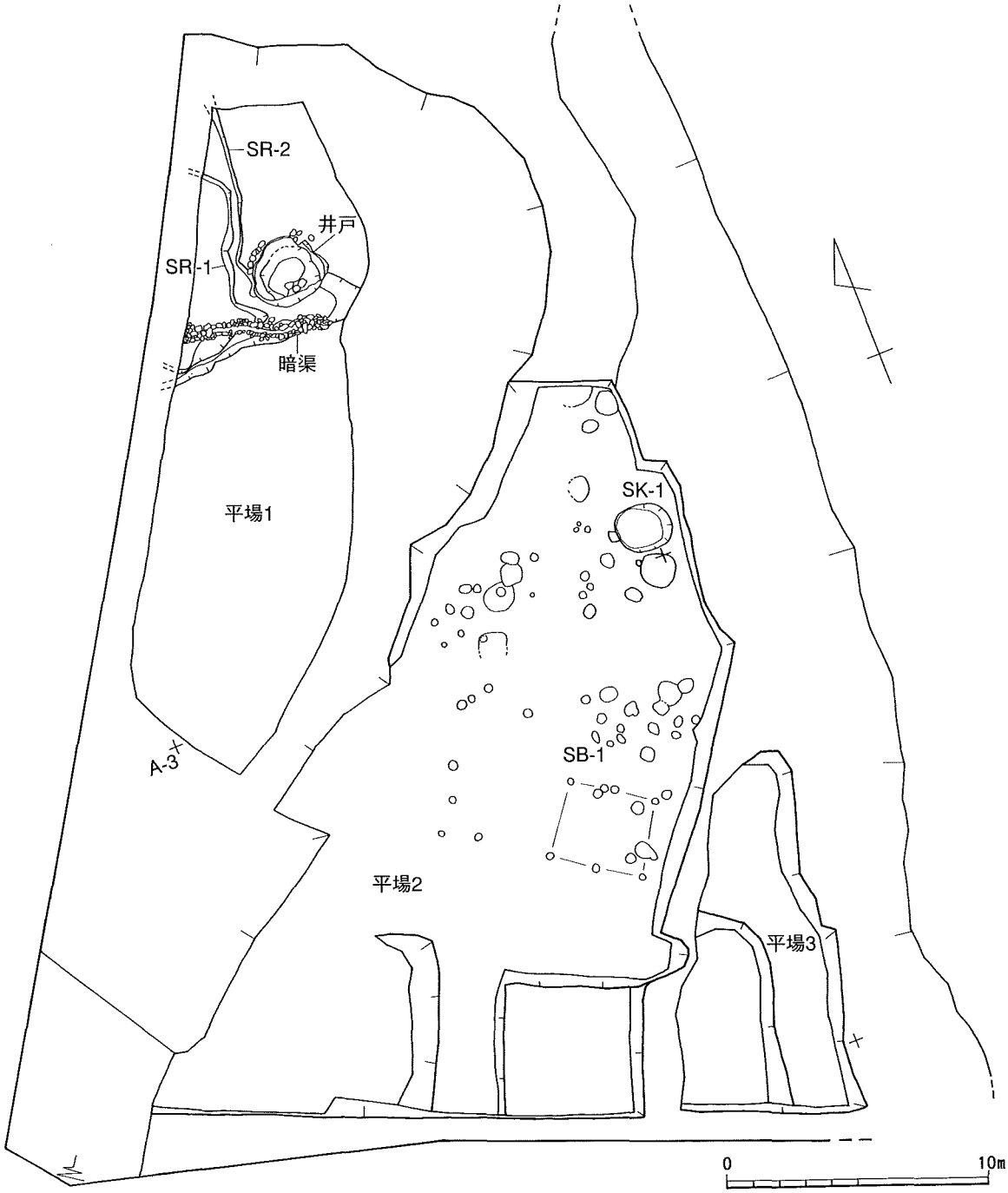
0　4m

第15図　土層断面図⑧・①（S＝1/160・1/80）

3　遺構・遺物

A区（第16図　図版２・８）

調査区北西端に位置する。３段の平場が造成されており，低標高から順に，平場１～３とした。市道沿いの平場１においては，河川跡２条と現代の井戸１基・暗渠１条が確認され，これらの遺構内からは土師器・擂鉢・陶磁器が出土した。平場２においては，掘立柱建物跡１棟・土壙７基・Pit55基が確認され，土師器片・青磁片・陶磁器が出土した。平場３は後世の削平を受けており，遺構は確認されなかった。いずれの平場も近世～現代まで削平を繰り返し受けており，武辺城に関する遺構は確認できなかった。

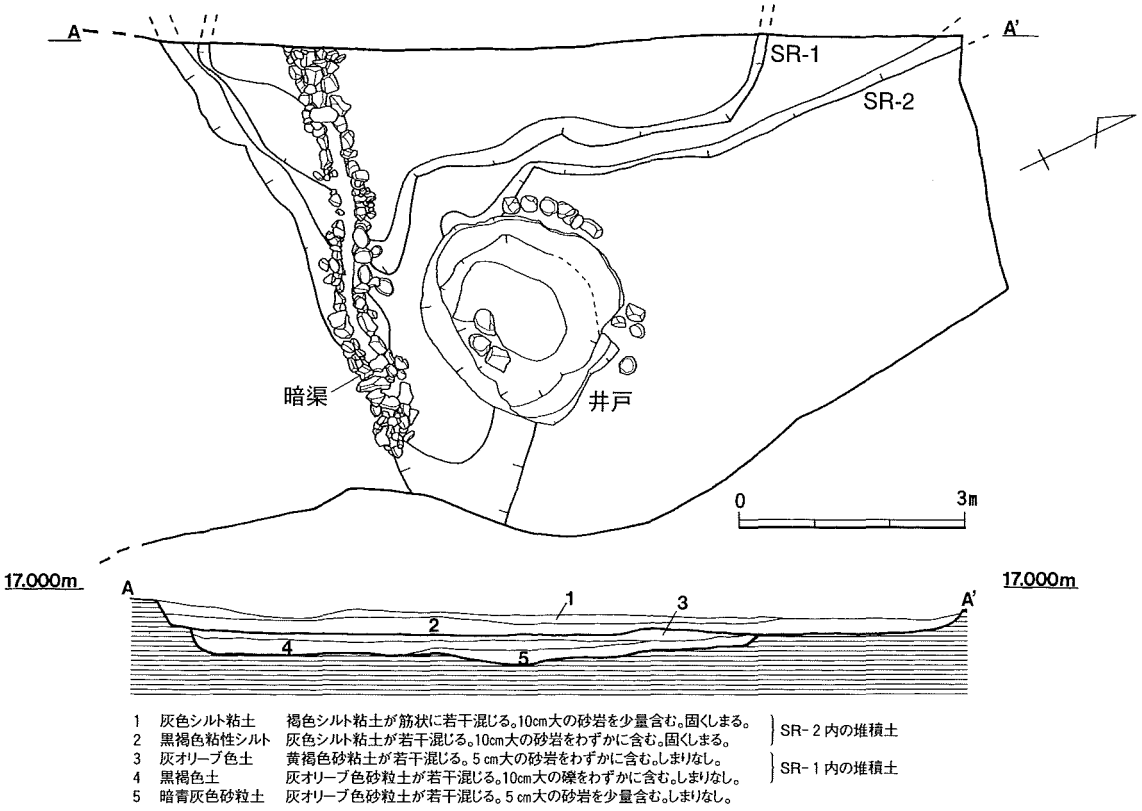


第16図　A区遺構配置図（S＝1/250）

(1) 遺構

①河川跡（SR-1・2）（第17図　図版8）

平場1の北部において検出された。SR-1は幅7.5m，深さ0.4mを測り，調査区外の西方向に延びている。3層からなり，最下層から古墳時代終末の須恵器小片が出土した。SR-2は幅13m，深さ0.3mを測り，SR-1と同じく調査区外の西方向に延びている。2層からなり，上層からは土師器・青磁，下層からは陶器・白磁が出土した。一部削平を受けている。　（秋山千尋）



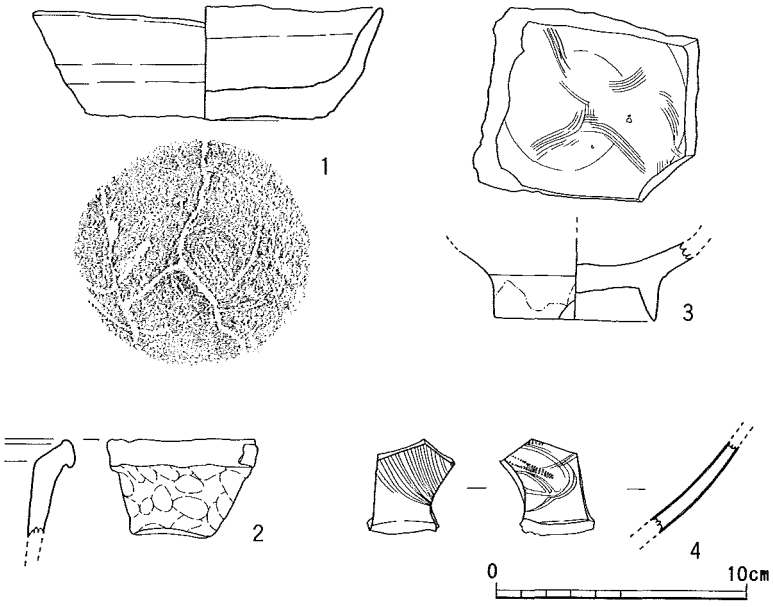
第17図　SR-1・2平面図及び土層断面図（S＝1/100）

SR-2　出土遺物

（第18図　第3表　図版12）

1は土師器坏である。底部から口縁部にかけ内湾気味に開き，口縁部はわずかに外反する。底部に板状圧痕が認められる。2は瓦質鉢である。体部上半から口縁部にかけ残存し，「く」の字状を呈する。3は白磁碗である。碗V-4b類に相当する。底部のみ残存する。見込みには櫛目で花文が施される。4は同安窯系青磁碗である。碗I-1b類に相当する。外面には櫛目文，内面には花文と点描文が施される。

（今里順一郎）



第18図　遺物実測図①（S＝1/3）

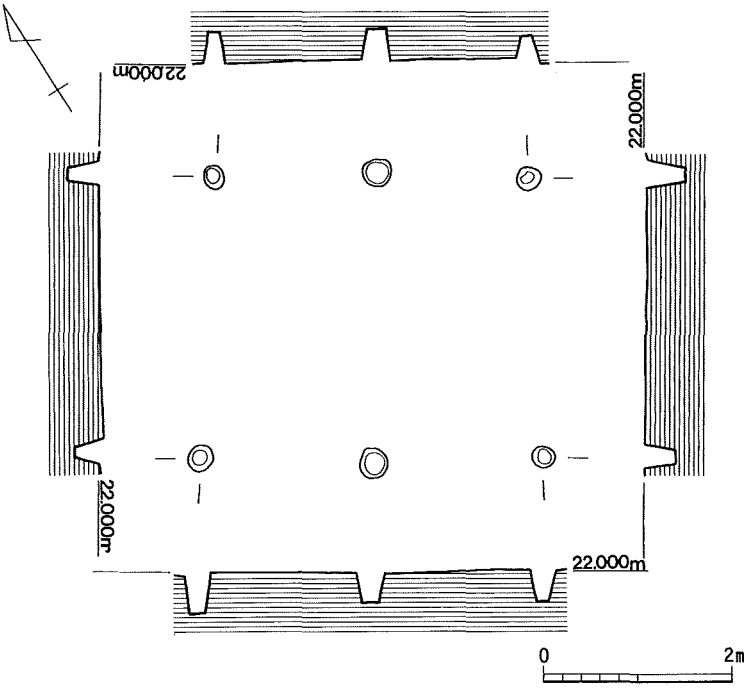
番号	遺物名称	法量(cm)			色調		胎土	技法・調整		備考
		口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面	
1	土師器坏	13.9	4.4	9.4	橙	橙	やや精緻 角閃石・石英・長石・赤色粒子	ケズリ/ナデ	ケズリ/ナデ	糸切り
2	瓦質鉢	—	—	—	灰白	灰白	やや精緻 石英・長石	ケズリ	ナデ	指頭圧痕
番号	遺物名称	法量(cm)			色調		胎土	施文		備考
		口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面	
3	白磁碗	—	6.4	—	灰白	灰白	やや精緻 黒色粒子	—	花文	
4	青磁碗	—	—	—	オリーブ灰	オリーブ灰	精緻	櫛目文	花文・点描文	同安窯

＊色調は，土師器・瓦質土器は胎土色を示し，陶磁器については釉薬色を示す。(以下の表も同様である)

第3表　遺物観察表①（SR-2）

②掘立柱建物跡（SB-1）（第19図）

平場2の東部において検出された。梁行1間，桁行2間の建物であり，梁行3.0m，桁行3.6mを測る。主軸の方位はN59°Wで，北西～西北西を示す。柱穴の掘り方は径約30cm，深さ約35cmを測る。礎石等は検出されず，南東隅の柱穴から，18世紀後半の小碗・19世紀初頭の端反碗が出土した。



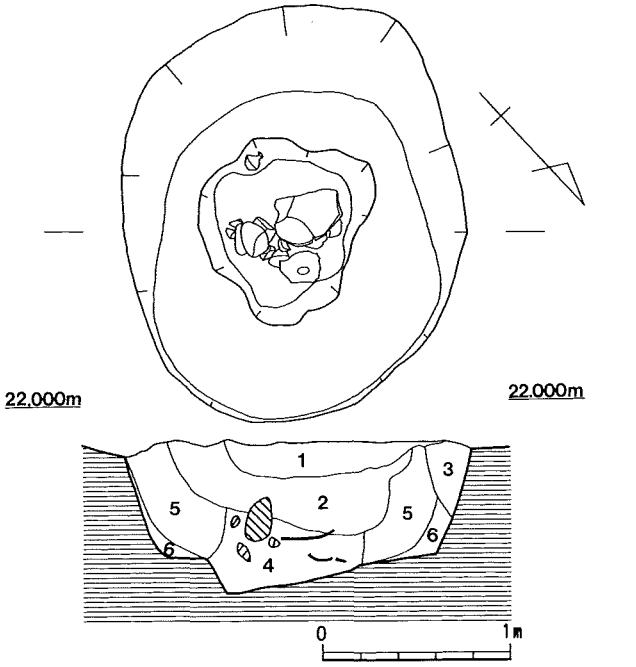
第19図　SB-1平面図及び断面図（S＝1/80）

③土壙（SK-1）（第20図　図版8）

平場2の北東部において検出された。長軸2.2m，短軸1.8m，深さ0.8mを測り，平面は楕円形を呈する。6層に分層され，4層から陶器皿・油壺・擂鉢・甕等が出土した。　　（秋山千尋）

SK-1　出土遺物（第21図　第4表　図版12）

5は陶器皿である。底部から口縁部にかけて内湾気味に開く。内面に白化粧土をかけた刷毛目，見込みは蛇の目釉はぎが施される。高台は深く削り込まれ，露胎し，断面形は台形を呈する。6は陶器擂鉢である。ロクロ成形で底部から体部上半が残存する。擂目の単位は12条を一単位とし，約3.5cm幅で隙間なく交差するように施される。7は陶器壺である。ロクロ成形により平底で，張り出した肩部まで，底部から頸部まで直線的に屈曲し「く」の字状を呈する。頸部から口縁部にかけてわずかに内湾する。一部貫入が確認され

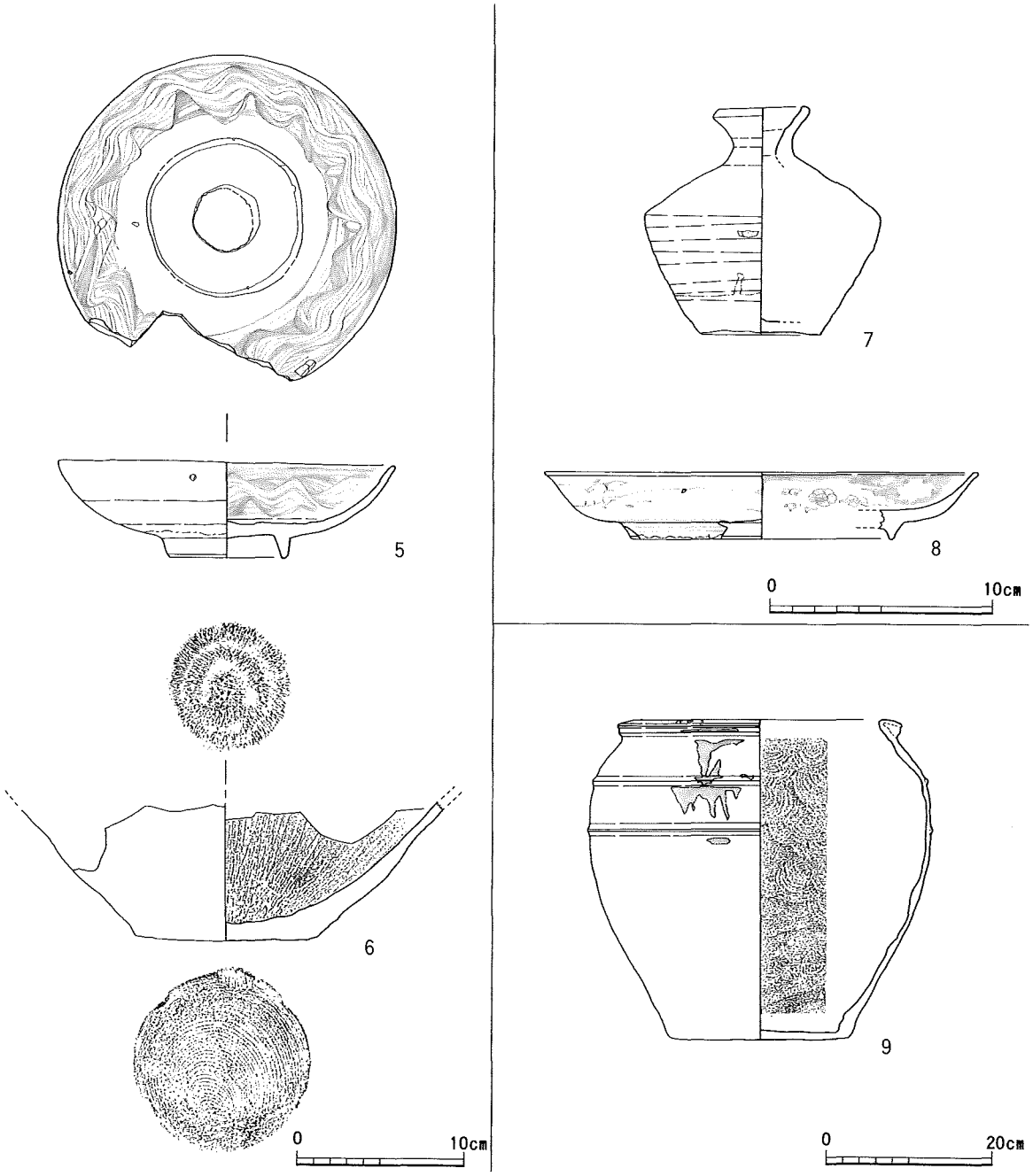


1　にぶい黄褐色シルト粘土　砂粒を含む。固くしまる。
2　暗褐色シルト粘土　1～3cm大の黄褐色の風化礫を含む。固くしまる。
3　褐色シルト粘土　1～5cm大の風化礫を少量含む。固くしまる。
4　暗褐色粘土シルト　10～30cm大の礫を含む。ややしまる。遺物を含む。
5　にぶい黄褐シルト粘土　ややしまる。
6　にぶい黄褐シルト粘土　1cm大の風化礫を含む。マンガンが若干入る。固くしまる。

第20図　SK-1平面図及び土層断面図（S＝1/40）

る。8は染付皿である。底部から口縁部にかけて緩やかに内湾気味に開き，口縁部はわずかに外反する。9は甕である。口縁部は肥厚し内外に突出する。成形技法は外面全体にタタキと斜め方向のヘラケズリが施され，内面全体に同心円状の当て具痕が認められる。頸部には粘土帯が貼り付けられ，低い突帯がケズリ出される。体部には貼り付けにより，突帯が2条巡らされる。口縁上面は貝目痕がみられ，外面上半には自然釉が掛かる。

（今里順一郎）



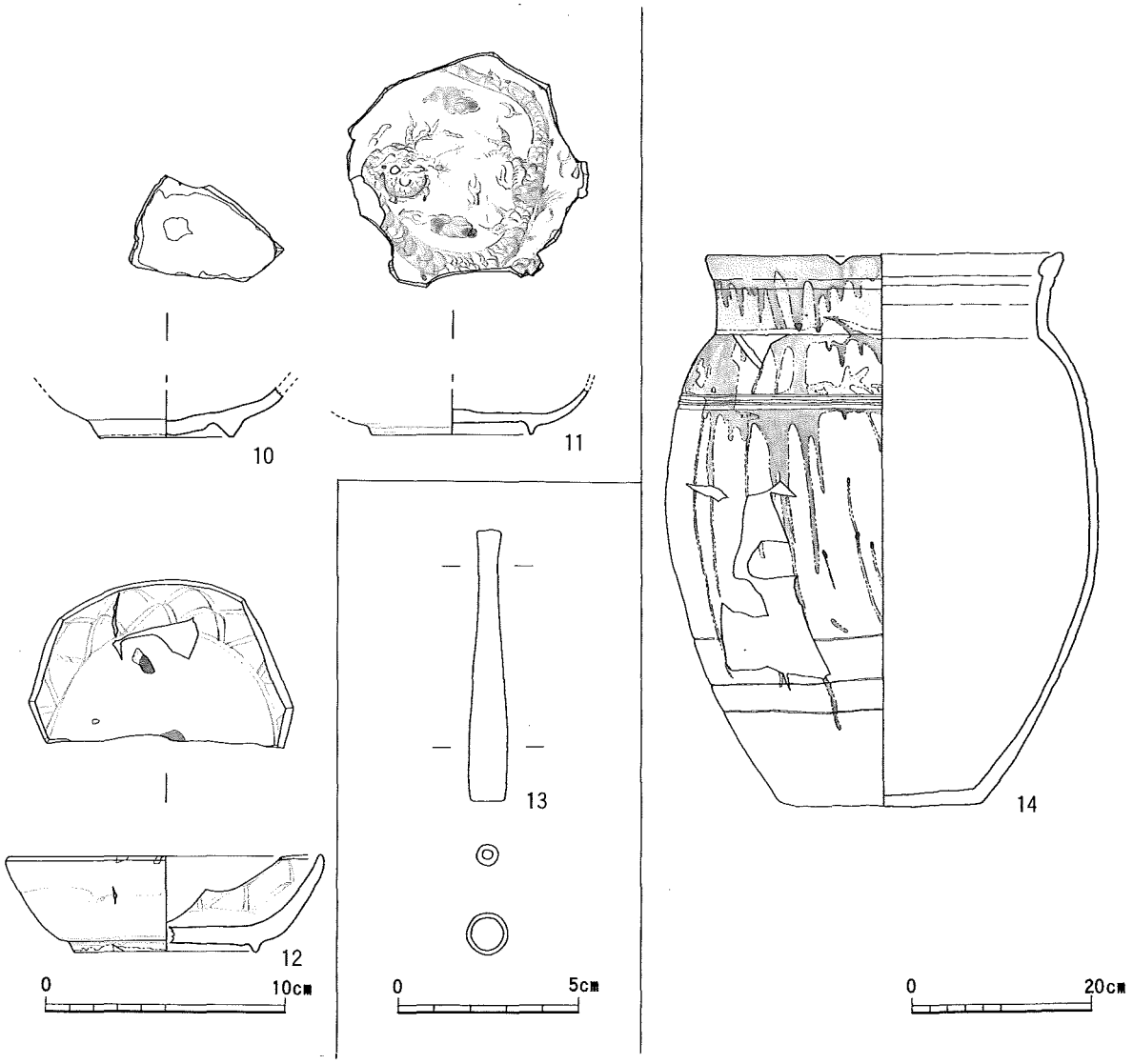
第21図　遺物実測図②（S＝1/3・1/4・1/8）

番号	遺物名称	法量(cm)　( )は復元			色調　( )は文様色を示す		胎土	備考
		口径	底径	器高	外面	内面		
5	陶器皿	20.2	7.0	5.6	灰黄褐	灰黄褐(灰白)	やや精緻 長石･黒色粒子	刷毛目 蛇の目釉はぎ
6	陶器擂鉢	—	11.0	—	にぶい赤褐	灰褐	精緻 黒色粒子	鉄釉 擂目一単位12条 肥前産
7	陶器壺	4.0	5.4	10.1	灰	灰	やや精緻 長石･黒色粒子	灰釉 肥前産
8	染付皿	(19.4)	(11.8)	3.0	明緑灰(コバルト)	明緑灰(コバルト)	精緻 黒色粒子	外面:唐草文 内面:梅花文 肥前産
9	陶器甕	(35.2)	(21.5)	38.5	灰白･浅黄	灰	やや精緻 石英	貝目痕 唐津系

第4表　遺物観察表②（SK-1）

(2) **遺物**（第22図　第５表　図版13）

10は陶胎染付皿である。底部のみ残存し底部から緩やかに立ち上がる。底部内・外面は灰釉が施釉される。11・12は染付皿である。**11**は底部から体部下半が残存し，内湾気味に開く。内面には団龍が施される。**12**は底部から口縁部にかけて直線的に開き，口縁部はわずかに内湾する。外面には唐草文，内面には二重網目文が施される。降灰の痕がみられる。畳付けには砂目積み痕が確認される。**13**は煙管の吸口部分である。**14**は陶器甕である。頸部から口縁部にかけ外反し開く。口縁部は内側に折られ玉縁状を呈し，内側に肥厚する。成形技法は外面全体に格子目の叩き＋ヨコナデ，底部内面は粗い格子目の当て具痕がみられる。口縁上面は釉はぎされ，貝目痕が８箇所確認される。　（今里順一郎）



第22図　遺物実測図③（S＝1/3・1/8・1/2）

番号	遺物名称	層位	法量(cm)（ ）は復元			色調（ ）は文様色を示す		胎土	生産地	備考
			口径	底径	器高	外面	内面			
10	陶胎染付皿	3	－	5.6	－	にぶい黄	浅黄	やや粗雑 長石・黒色粒子		貫入が入る
11	染付皿	2	－	6.6	－	灰白(コバルト)	灰白(コバルト)	精緻 黒色粒子	有田系	内面:雲竜文
12	染付皿	2	(13.2)	(7.8)	4.0	灰白(オリーブ灰)	灰白(オリーブ灰)	精緻 黒色粒子	肥前	外面:唐草文 内面:二重網目文 降灰

番号	遺物名称	層位	法量(cm)（ ）は復元			色調		胎土	技法		生産地	備考
			口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
14	陶器甕	1	39.5	23.0	61.3	暗赤褐	にぶい赤褐	精緻 長石	格子目タタキ/ナデ	底部:格子目当て具/ナデ	肥前	鉄釉 貝目痕８箇所

番号	遺物名称	層位	最大長(cm)	幅(cm)	重量(g)	材質	備考
13	煙管(吸口)	1	7.5	0.6~1.1	12.4	銅製	

第５表　遺物観察表③（Ａ区）

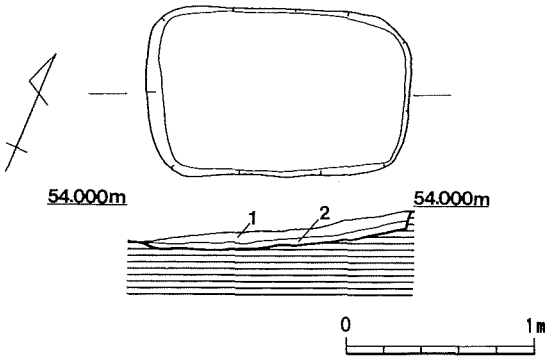
B区（図版８）

Ａ区の東側の標高約25m～50mに位置し，馬の背状の尾根に至る斜面地と尾根上の平地にあたる。北西側の斜面からは昭和期の炭窯が２基検出された。上部の西曲輪の南西から土壙（SK－２）が検出されたが遺物は確認できず，性格，時期とも不明である。南西側に張り出した尾根からは，表土層中から土器片・石器が出土した。（今里順一郎）

(1) 遺構

①土壙（SK－２）（第23図）

Ｂ区北端において検出された。長軸1.4m，短軸0.9m，深さ0.2mを測り，平面は楕円形を呈する。土層は２層に堆積し，２層目において炭層が確認された。遺物は出土していない。（秋山千尋）

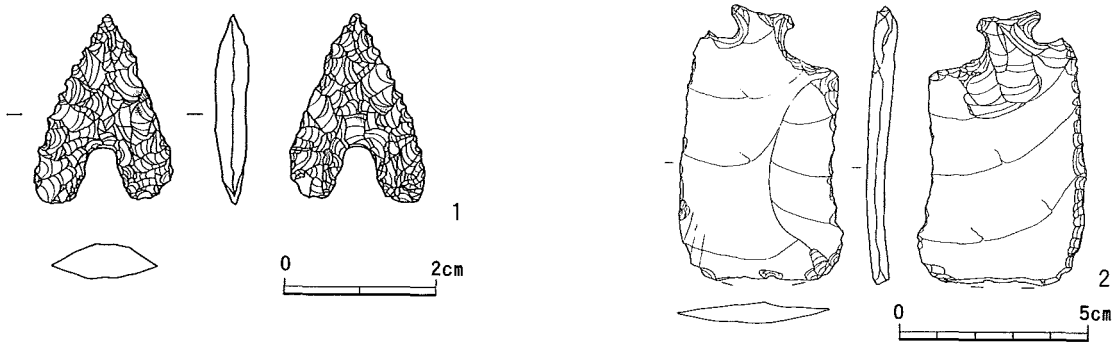


1　暗褐色土　炭化物細粒を含む。ややしまる。粘性あり。
2　炭化物層　炭化物細粒を多く含む。粘性あり。

第23図　SK－２平面図及び土層断面図（Ｓ＝１/40）

(2) 遺物（第24図　第６表　図版14）

１は漆黒色の黒曜石製の石鏃である。脚部が一部欠損する。丁寧に両面加工が施され，鍬形鏃を呈する。**２**は安山岩製の縦型石匙である。刃部が一部欠損する。縦長剥片の先端部分を折断し，刃部として使用した縁辺下部，及び最終剥離面の裏側右側縁辺部に調整が施され，つまみ部分の整形も認められる。（今里順一郎）



第24図　遺物実測図④（Ｓ＝１/１・１/２）

番号	遺物名称	層位	最大長(mm)	最大幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石種	備　考
1	石鏃	２層	20.5	10.7	0.5	1.6	漆黒色黒曜石	
2	石匙	表土	70.1	40.0	0.5	21.4	安山岩	

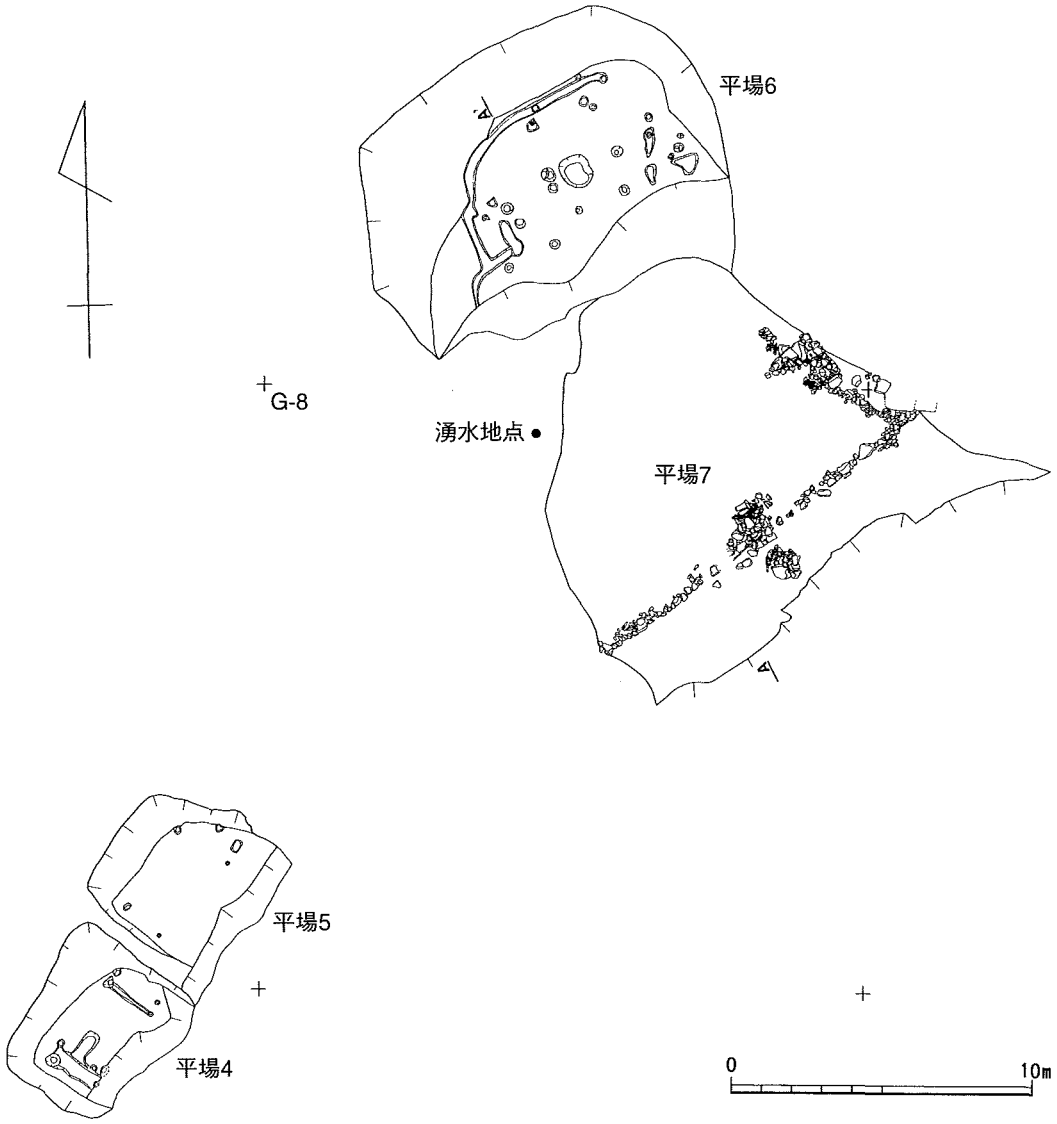
第６表　遺物観察表④（Ｂ区）

C区（第25図　図版３～５・９）

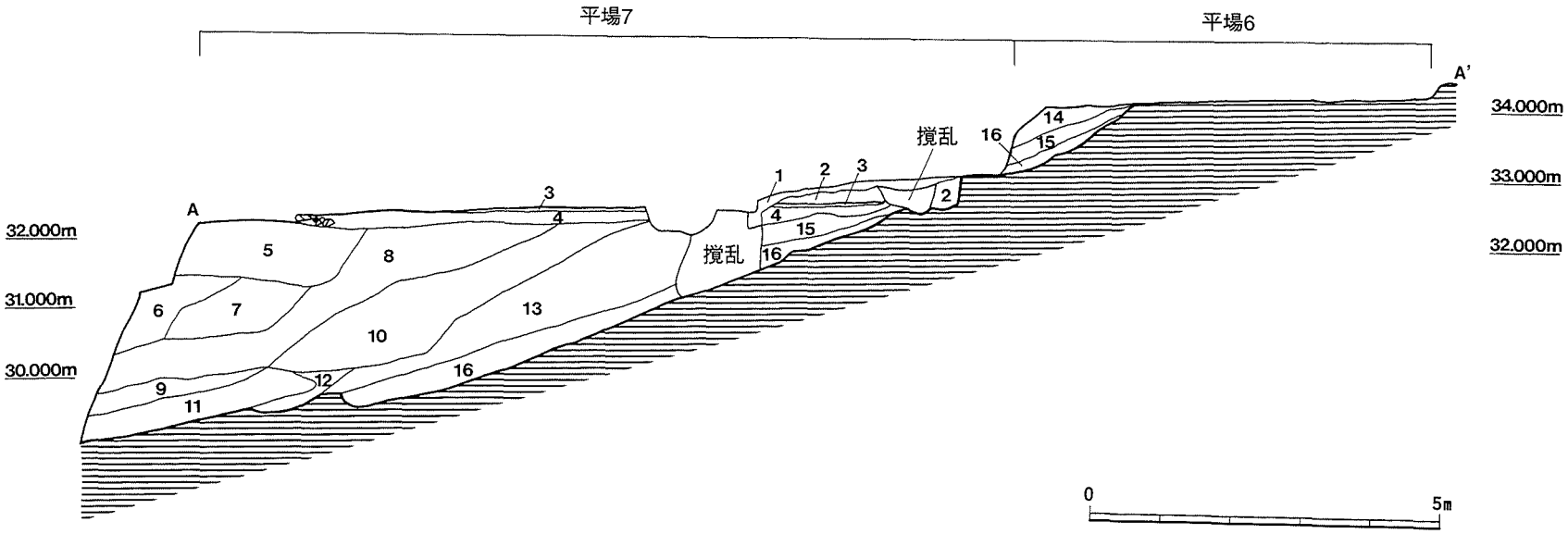
グリッドは（F・G－７・８・９，H－７・８区）である。標高約31～54mに位置し，南西の谷とその谷を挟む東西の斜面にあたる。当区では斜面と谷が削平された平場が４箇所確認され，その平場内から遺構が多く検出された。平場と遺構との検出の混同を避けるため，当区内においては平場を４～７と番号を付し，小地区として取り上げ，平場ごとに遺構・遺物の様相を報告する。

平場４・５　西側斜面の中腹は岩盤まで削平され，並列に高低差のある２段で検出された。平場４は標高約37mに位置し，面積約8.6m²，平場５は標高約38mに位置し，面積約12.6m²を測る。両平場とも北側は岩盤が露出した壁となり，南側に開ける。

平場６・７　東西の斜面に挟まれた東向きの谷部が削平され，南北に高低差のある２段で検出された。平場６は標高約34～35mに位置し，面積約47.5m²，平場７は標高約32mに位置し，面積約110.0m²を測る。平場６は一部盛土により平場が拡張され，平場７は全体が盛土により整地される。また平場７の南東端は急傾斜を呈し，南東に位置するD区との標高差は約４mを測る。



第25図　C区遺構配置図（S＝1/250）



1	黒色土	表土・撹乱
2	褐色土	砂質。
3	褐色土	砂質。上部に砂岩の小礫を多く含む。しまり強い。(整地層)
4	褐色土	砂質。3層と比べるとしまりが弱い。(整地層)
5	にぶい黄褐色土	砂岩礫を多く含む。しまりが強い。粘性強い。
6	にぶい黄褐色土	褐色土が多少混じる。小礫を多く含む。
7	褐色土	砂岩の小礫を含む。
8	褐色土	7層に類似する。炭化物をわずかに含む。
9	黄褐色土	褐色土が混じる。砂岩の小礫を含む。粘性あり。
10	黄褐色土	粘性あり。
11	明黄褐色土	褐色土をブロックで含む。しまり強い。粘性あり。
12	青灰色土	黄褐色土が少量混ざる。しまり強い。粘性あり。
13	褐色土	砂質。黄褐色土が少量混ざる。しまり強い。
14	褐色土	小礫を多量に含む。しまりあり。(整地層)
15	暗褐色土	腐植土を含む。旧表土層。砂利を含む。粘性あり。
16	褐色土	15層より腐植風化土を多く含む。

第26図　平場6・7土層断面図（S＝1/100）

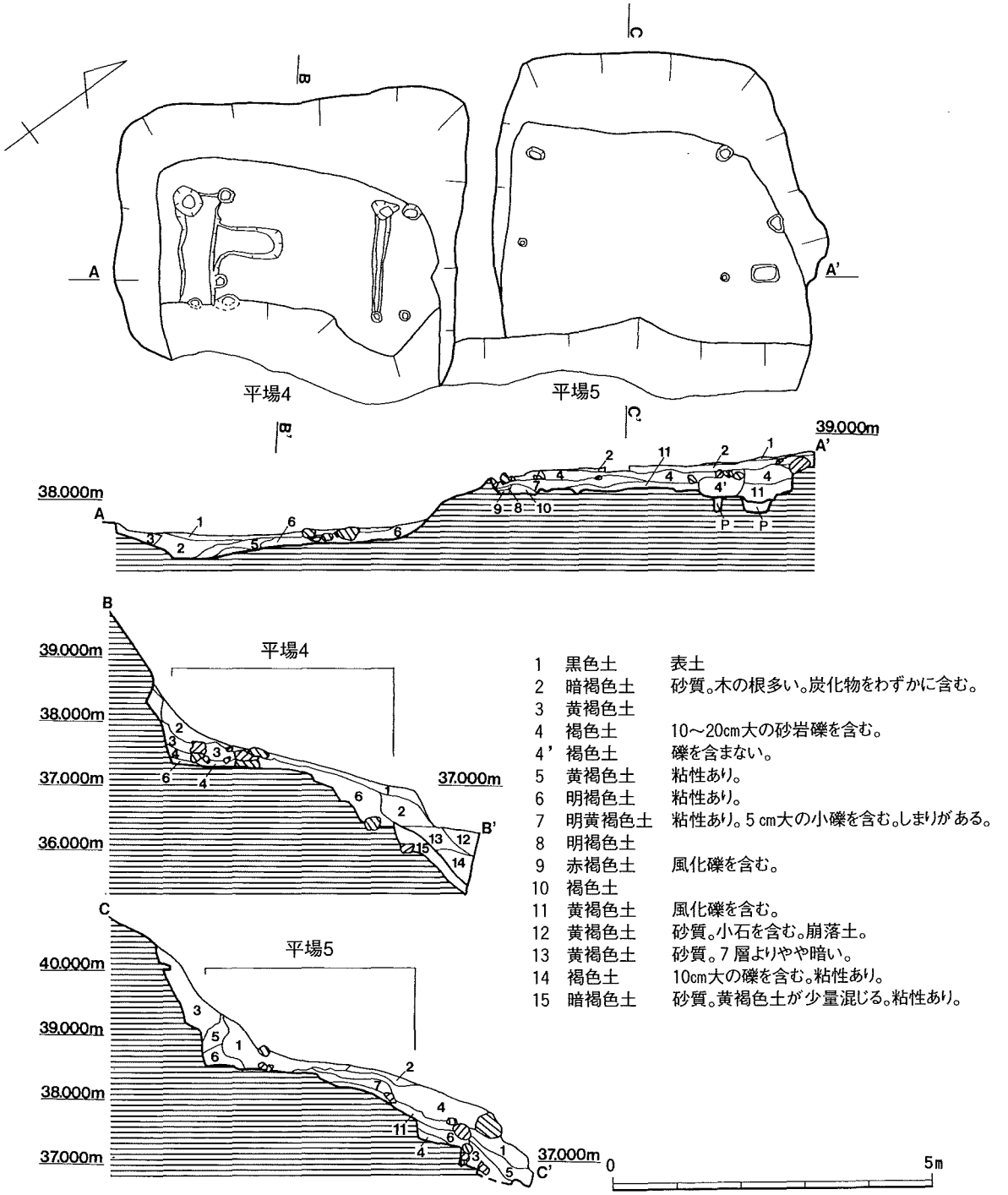
(1) 遺構

①平場４・５（第25・27図　図版４・５）

遺構は両平場においてPit３基・掘立柱建物跡２棟が検出された。遺物は出土していない。

・**掘立柱建物跡（SB-２）**は北西から南東を主軸に，桁行１間，梁行３間の建物である。桁行1.6m梁行2.5mを測り，東西の柱穴間が離れており，建物の構造は不明である。また，一部布掘りがみられ，柱穴は径約25cm，深さ約30cmを測る。

・**掘立柱建物跡（SB-３）**は北西から南東を主軸に，桁行１間，梁行１間の建物である。桁行1.4m梁行3.0mを測り，柱穴は径約20cm，深さ約15cmを測る。



第27図　平場４・５遺構配置図及び土層断面図（S＝1/100）

②**平場6**（第25・26・28図　図版3～5・10）

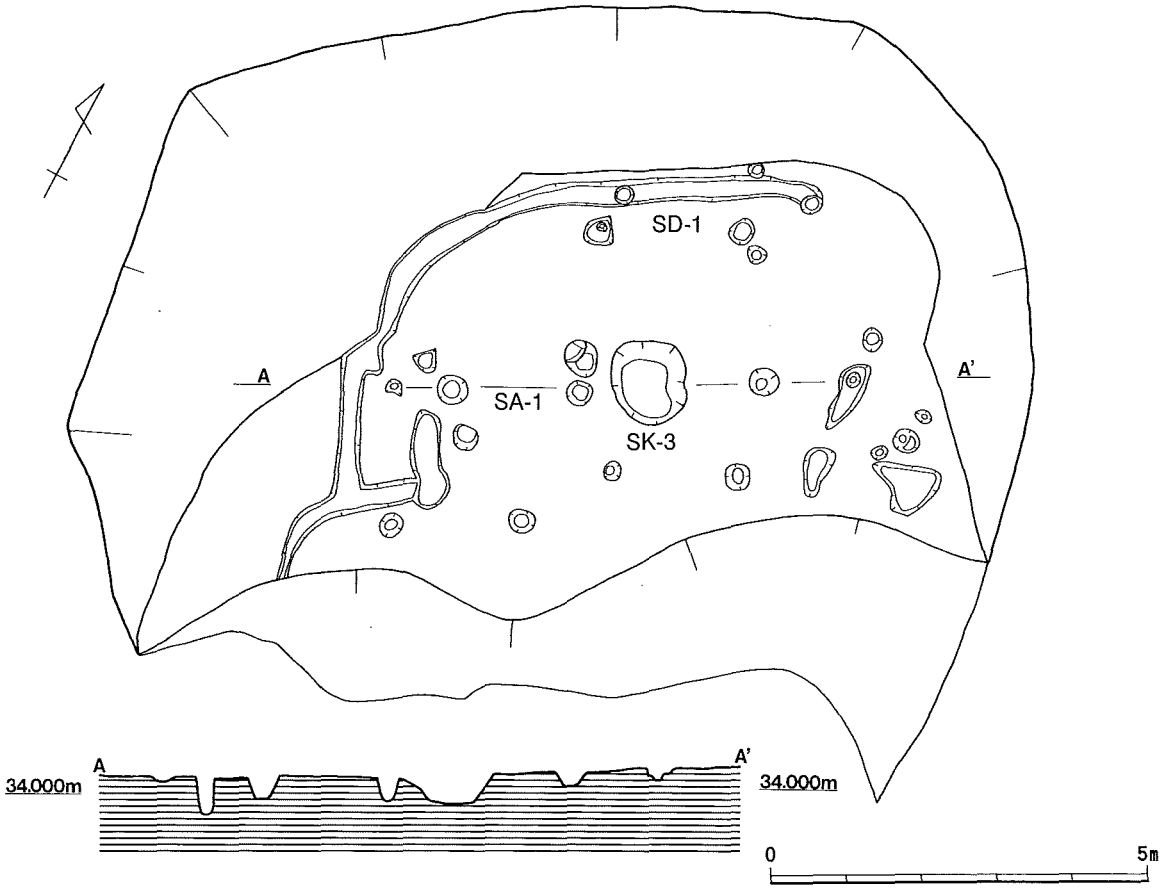
遺構はPit20基・柱穴列1列・溝状遺構1条・土壙1基が検出された。遺物は包含層から土師器（小皿・坏）・白磁皿・青磁碗・石鍋・石鏃が出土した。

・**柱穴列（SA-1）**は長さ5.3mを測る。4基の柱穴が確認され，柱穴間は約1.4～2.4mと一定でない。径約40cm，深さ約30cmを測る。

・**溝状遺構（SD-1）**は長さ約11.1m，幅約0.3mを測る。平面は当平場の北端に平行し，緩やかな「L」字状を呈する。断面は北側の上端は標高が高く，南側は平場との差があまりない。また床面は北東側が深く，南西は岩盤に浅く掘り込んでいる。遺物は遺構内より青磁碗が出土した。

・**土壙（SK-3）**は長軸1.1m，短軸1.0m，深さ約0.4mを測り，平面は楕円形を呈する。SA-1の列上に並んで検出され，列のほぼ中央に位置する。遺物は遺構内より完形の白磁皿，土師器坏が出土した。

（柴田妃三光）

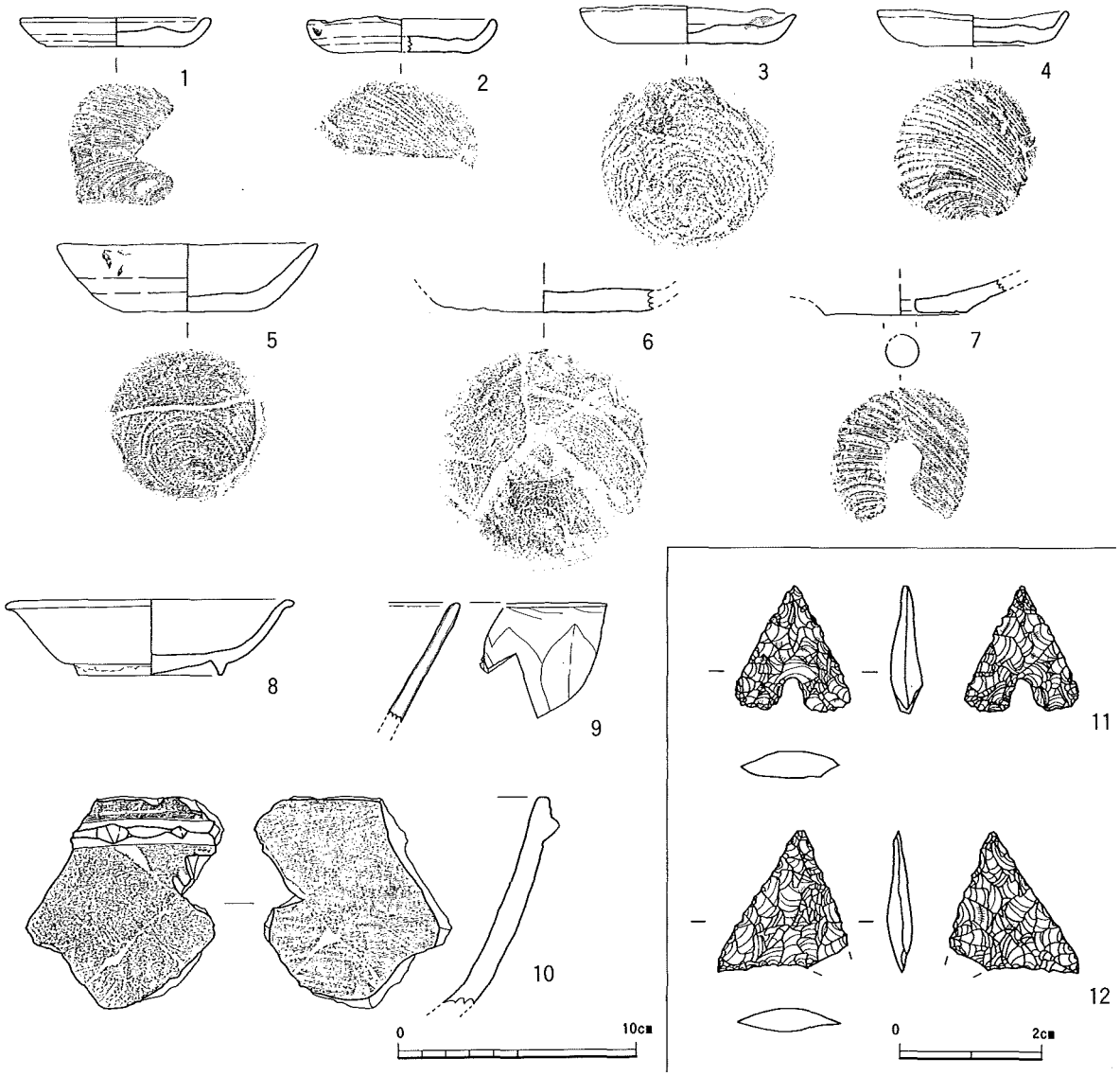


第28図　平場6遺構配置図及びSA-1断面図（S＝1/100）

・**平場6　出土遺物**（第29図　第7表　図版14）

1～7は土師器である。1～4は小皿，5～7は皿である。1・2は底部から口縁部にかけて内湾気味に開く。**1**は内・外面に回転ヘラケズリが確認される。**2**は外面に回転ヘラケズリ，ススの付着が認められる。**3**は底部から口縁部にかけ直線的に大きく開く。内・外面にススの付着が認められる。**4**は底部から口縁部にかけ直線的に開く。3・4ともに外面にヘラケズリ＋回転ナデ調整が認められる。**5**は底部から口縁部にかけ直線的に大きく開く。内・外面ともに回転ヘラケズリ＋回転ナデ調整が認められる。**6**は底部のみ残存する。内面は表面が焼成時に黒色化し，回転ケズリ調整が認められる。**7**は底部のみ残存し，直線的に立ち上がる。外面に回転ヘラケズリ＋ナデ調整が確認される。底部中央には焼成前からの穿孔が施される。**8**は白磁皿である。森田E群に相当する。底部から口縁部

にかけ内湾気味に開き，口縁は端反りを呈する。畳付けを除き全面に施釉され，高台内は二度掛けされている。**9**は龍泉窯系青磁碗である。碗Ⅱ－b類に相当する。体部上半から口縁部にかけ残存し，口縁部は直口する。鎬連弁文を有する，**10**は滑石製石鍋である。口縁部から体部上半が残存し，内湾気味に立ち上がる。調整は外面にはノミ痕→使用による擦過が，内面には使用による擦過痕が認められる。11・12は漆黒色の黒曜石製の石鏃である。**11**は両面加工の鍬形鏃を呈する。**12**は片脚が一部欠損する。丁寧な両面加工が施され，側縁部は緩やかな曲線を呈する。　（今里順一郎）



第29図　遺物実測図⑤（S＝1／3・1／1）

番号	遺物名称	遺構名	法量(cm)（ ）は復元			色調		胎土	技法・調整		スス		備考
		層位	口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面	外面	内面	
1	土師器小皿	Pit99	(7.9)	(5.8)	1.2	浅黄	浅黄	やや精緻 雲母・赤色粒子	ケズリ	ケズリ			糸切り
2	土師器小皿	3層	(7.8)	(5.4)	1.5	にぶい黄橙	浅黄橙	精緻 雲母・赤色粒子	ケズリ	ナデ	○		糸切り
3	土師器小皿	3層	9.0	6.1	1.6	橙	橙	やや粗雑 雲母・赤色粒子	ケズリ/ナデ	ケズリ/ナデ		○	回転糸切り
4	土師器小皿	3層	8	4.8	1.5	にぶい黄橙	にぶい橙	やや精緻 雲母・石英・赤色粒子	ケズリ/ナデ	ケズリ/ナデ			糸切り
5	土師器皿	SK-3	11	5.6	2.8	橙	橙	やや精緻 雲母・赤色粒子	ケズリ/ナデ	ケズリ/ナデ	○		回転糸切り
6	土師器皿	Pit107	－	9.3	－	橙	褐灰	精緻 雲母・赤色粒子	ナデ	ケズリ		○	回転糸切り
7	土師器皿	表土	－	5.6	－	浅黄橙	にぶい橙	やや精緻 雲母・石英・赤色粒子	ケズリ/ナデ	ナデ			糸切り 穿孔あり
10	石鍋	3層	－	－	－	灰オリーブ	オリーブ黒	－	ノミ痕/使用擦過	使用擦過	○	○	滑石製

番号	遺物名称	遺構名	法量(cm)			色調		胎土	備考
			口径	底径	器高	外面	内面		
8	白磁皿	SK-3	11.6	6.1	3.2	灰白	灰白	精緻 黒色粒子	景徳鎮窯
9	青磁碗	SD-1	－	－	－	オリーブ灰	緑灰	やや精緻 黒色粒子	龍泉窯系

番号	遺物名称	層位	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石種	備考
11	石鏃	2層	10.70	10.60	0.30	0.59	漆黒色黒曜石	
12	石鏃	2層	20.30	10.60	0.30	0.65	漆黒色黒曜石	

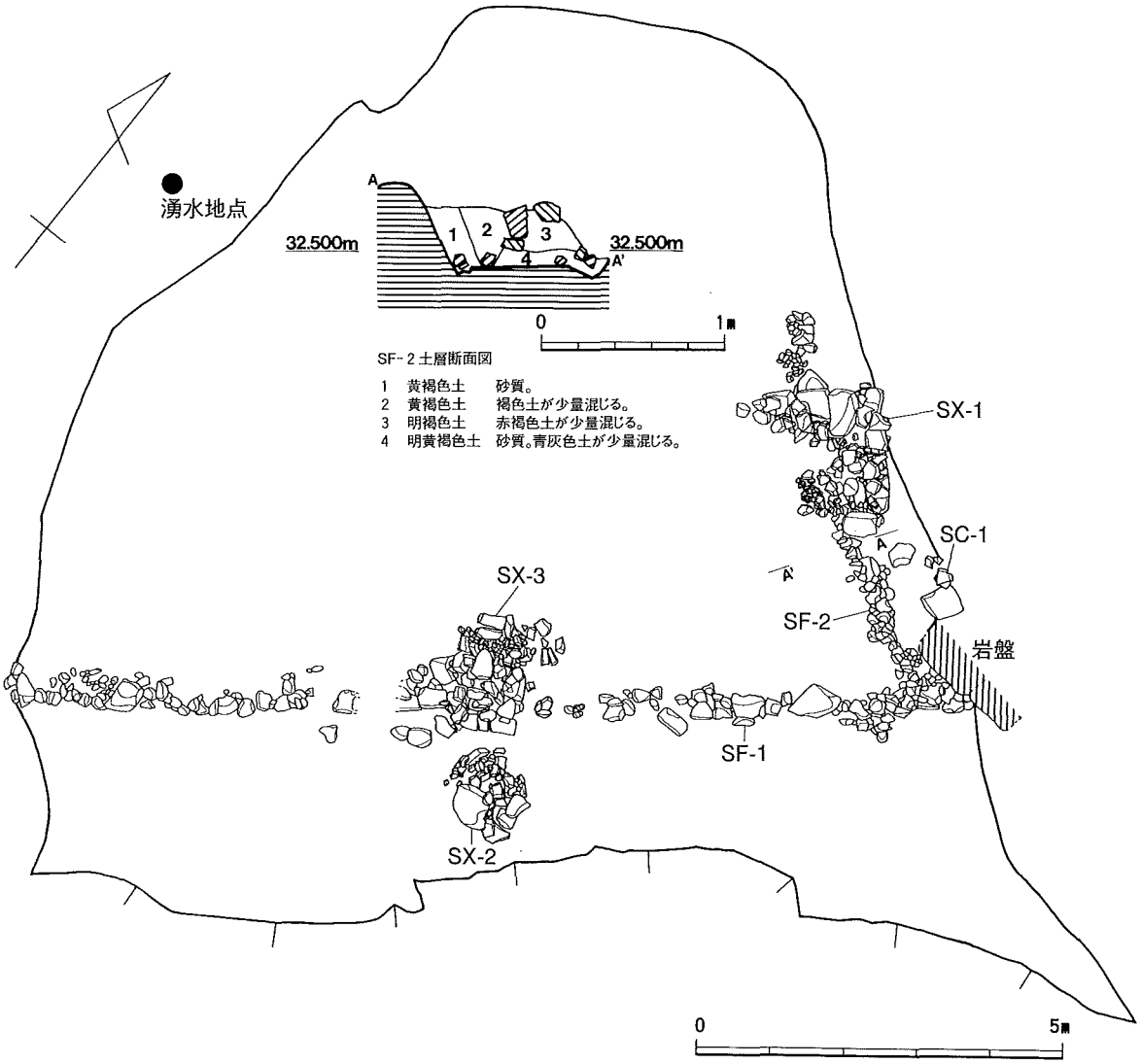
第７表　遺物観察表⑤（平場６）

③**平場７**（第25・26・30図　図版３・５・９・10）

遺構は石列２列・墓壙１基・不明遺構４基・炭化物集中範囲１基が検出された。また，当平場の西側には湧水地点がみられる。この湧水は伏流水となり，当平場を横断するように流れ，その影響で石列や不明遺構が陥没する箇所もみられる。東端の斜面においては露出した岩盤に矢穴跡がみられ，近年石切場などとして利用された可能性が高い。遺物は，整地面下層から陶器皿・青磁碗・箸，整地面上層からは陶器灯明皿・青花碗・近代磁器などが出土した。

・**石列（SF－１・２）**（第26・30図　図版10）

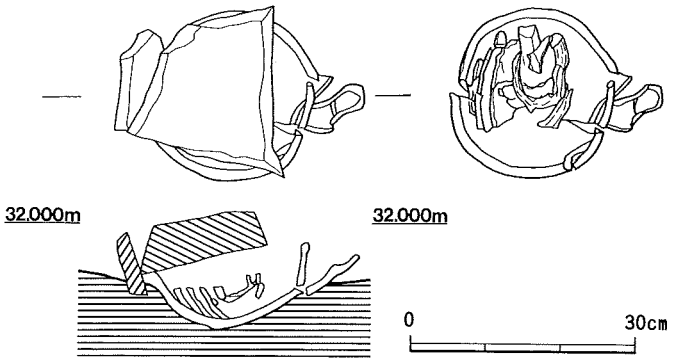
SF－１は南端，SF－２は東端から検出された。両遺構は整地面に構築され，南東側において接続し「L」字状を呈している。SF－１は長さ13.2m，幅は約0.3mを測る。大部分が１個の礫で列が構成され，石面は東側に揃えられる。一部径約60cmを測る礫が用いられ中央部にノミ痕がみられる。SF－２は長さ5.2m，幅は約0.3mを測る。SF－１と比較すると，数個の小礫で列が構築され，面も揃わない。



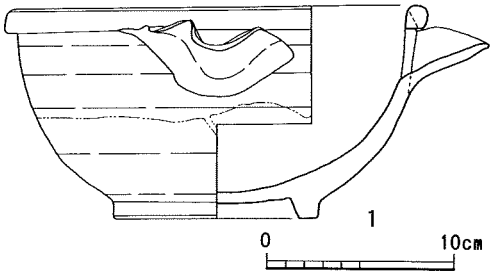
第30図　平場７遺構配置図（S＝1/100）及びSF－２土層断面図（S＝1/20）

・墓壙（SC-１）（第31・32図　第８表　図版３・９）

上部構造は検出されず，蔵骨器として片口鉢が用いられている。鉢上部に板状の砂岩が配され，鉢内から火葬人骨が確認された。副葬品は出土せず，墓標の有無については不明である。片口鉢は底部から体部まで丸みを持ち，口縁部にかけて直線的に立ち上がる。口縁部は外面に折られ玉縁状を呈し，口縁直下には注口が貼り付けられる。口径の１/２程度の低い高台が削りだされ断面四角形を呈する。



第31図　SC-１平面図及び断面図（Ｓ＝１/10）



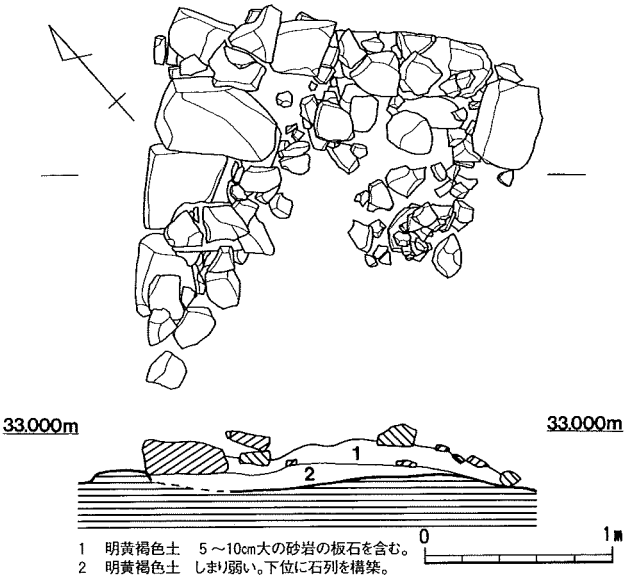
第32図　遺物実測図⑥（Ｓ＝１/４）

番号	遺物名称	遺構名(SC)	法量(cm)			色調		胎土	備考
			口径	底径	器高	外面	内面		
1	陶器片口鉢	SC-１	22.2	10.7	11.1	暗オリーブ褐	暗オリーブ褐	やや精緻 雲母・長石	鉄釉 肥前産

第８表　遺物観察表⑥（SC-１）

・不明遺構（SX-１）（第33図　図版３・９）

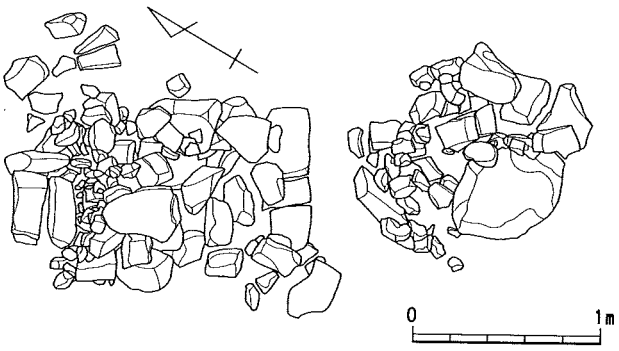
SX-１は集石である。SF-２の上位から検出され，長辺約2.0m，短辺約1.8mを測る。石面は北側と西側の２面がみられ，中央には約10cm大の礫が多く，縁辺には約30cmの礫が主体を占める。当遺構に伴う掘り込みは認められず，また樹木等の影響が著しいためSF-２との関係は不明である。



第33図　SX-１平面図及び土層断面図（Ｓ＝１/40）

・不明遺構（SX-２・３）（第34図　図版３・９）

SX-２・３は集石である。両遺構は少し距離があり，同一の集石であるか不明のため，個別に番号を付した。SX-２は長辺約1.2m，短辺約1.0mを測る。礫の大きさは不規則で，石面も揃えられていない。中央には高さ90cm，幅約20cmを測る砂岩製の石柱が配されるが，文字等の人為的痕跡は確認されない。SX-３はSF-１の上位から検出され，長辺約1.5m，短辺約1.0mを測る。礫の配石は不規則だが，上方に板状の石が多くみられる。樹木等の影響が著しいため，SF-１との関係は不明である。また両

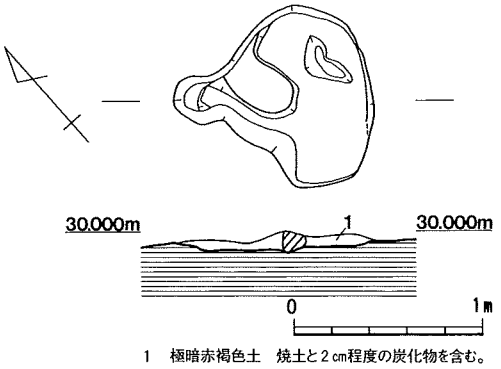


第34図　SX-２・３平面図（Ｓ＝１/40）

遺構に伴う掘り込みは認められない。遺物は集石間から青磁碗小片が出土した。

・不明遺構（SX-４）（第35図）

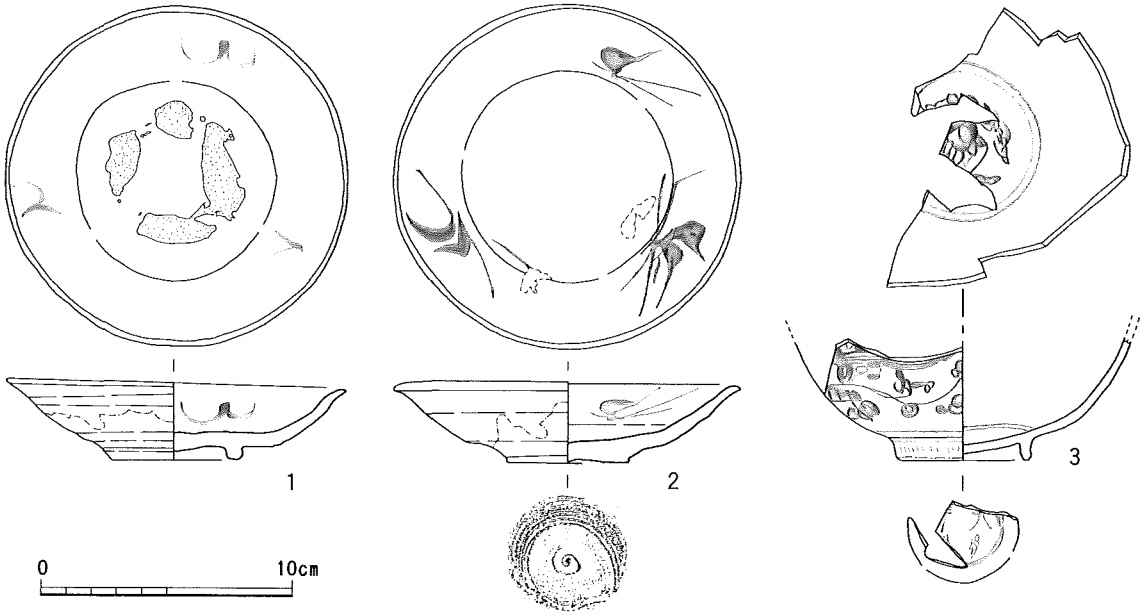
平場７の８層から検出された焼土である。長軸約1.1m，短軸約0.9mを測り，平面は不定形を呈する。埋土は，焼土と炭化物が混在する単層である。遺物は底部糸切りの土師器小片が出土した。　（柴田妃三光）



第35図　SX-４平面図及び土層断面図（Ｓ＝１/40）

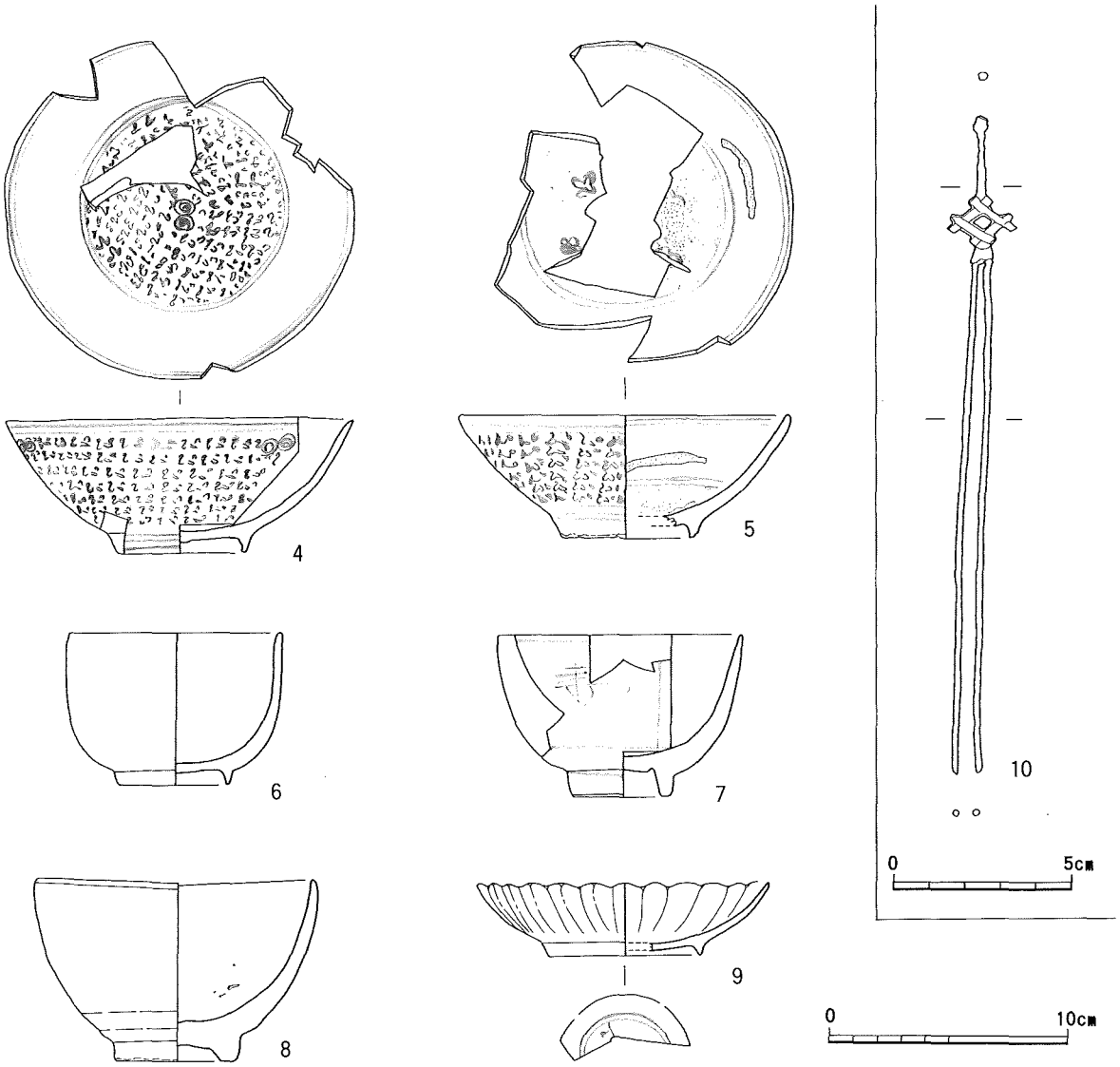
・平場７　出土遺物（第36・37図　第９表　図版15～17図）

１・２は陶器皿である。鉄釉にて草文が施された絵唐津である。**1**は底部から口縁部にかけ内湾気味に開き，口縁部がわずかに外反する。見込みには砂目積みの跡が４箇所認められ，高台内と畳付けには砂の付着がみられる。底部糸切り後に高台が削りだされ，雑な兜布状を呈する。**2**は底部から口縁部にかけ大きく開き，口縁部はわずかに外反する。見込みには目跡が２箇所認められる。底部糸切り後にわずかに削られるが，ほぼ平底を呈する。３～５は景徳鎮窯の青花碗である。**3**は底部から体部下半が残存し，内湾気味に開く。見込みの中心部が丸く窪む。高台内は円圏内に「大明年造」の銘が入り，外面には花唐草文，内面には花文が施される。**4**は底部から口縁部にかけて内湾気味に大きく開き，口縁部はわずかに外反する。見込みの中心部が丸く窪み，高台は畳付けが露胎し内傾を呈する。外面と見込みに小花文と思われる文様が密に施される。**5**は底部から口縁部にかけて内湾気味に大きく開く。高台は畳付けが露胎し内傾を呈する。内面に癒着跡がみられる。外面と見込みに小花文と思われる文様が施される。**6**は白磁碗である。底部から口縁部にかけ直線的に立ち上がる。**7**は陶胎染付碗である。底部から口縁部にかけ直線的に立ち上がる。内・外面に貫入が確認される。**8**は青



第36図　遺物実測図⑦（Ｓ＝１/３）

磁碗である。底部から口縁部にかけ内湾気味に開く。平面形は楕円形を呈する。全体に施釉した後，高台畳付けの釉が拭き取られる。見込みに砂目痕，高台内側縁に砂の付着が確認される。**9**は染付皿である。底部から口縁部にかけて大きく開く。型打成形により，菊花形を呈する。見込みにはチャツ痕が認められる。高台内に二重の圏線が施される。**10**は簪である。長さ18.3cmを測る。耳掻きがつき，井桁状の装飾が施される。（今里順一郎）



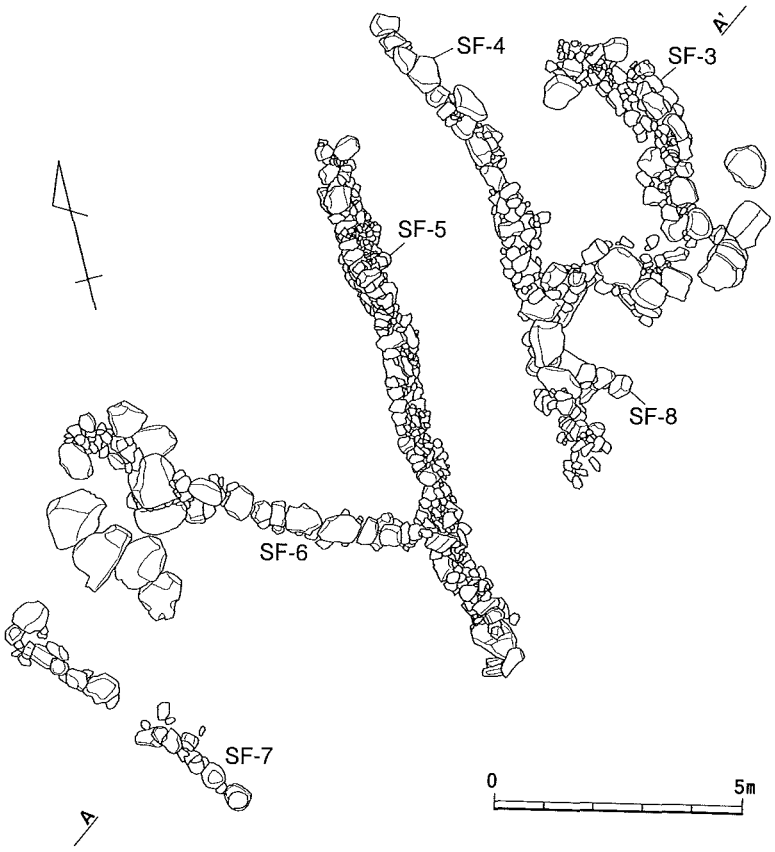
第37図　遺物実測図⑧（S＝1/3・1/2）

番号	遺物名称	層位	法量(cm)			色調（ ）は文様色を示す		胎土	生産地	備考
			口径	底径	器高	外面	内面			
1	陶器皿	5層	13.4	5.2	3.2	オリーブ	オリーブ(灰オリーブ)	精緻 長石・黒色粒子	肥前	絵唐津 高台内:兜布状
2	陶器皿	5層	13.6	4.8	3.2	灰オリーブ	灰オリーブ(暗オリーブ褐)	精緻 長石	肥前	絵唐津
3	青花碗	表土	—	5.2	—	明緑灰(コバルト)	明青灰(コバルト)	やや精緻 黒色粒子	景徳鎮窯	高台内:「大明年造(製)」
4	青花碗	2層	14.4	5.8	5.7	明青灰(コバルト)	明青灰(コバルト)	精緻 黒色粒子	景徳鎮窯	内・外面:小花紋?
5	青花碗	2層	13.8	5.5	5.1	明緑灰(明青灰)	明オリーブ(明青灰)	精緻	景徳鎮窯	外面:小花紋? 内面:花文
6	白磁碗	2層	8.9	4.6	6.3	灰白	灰白	精緻 黒色粒子		
7	陶胎染付碗	2層	10.2	4.0	6.7	灰白(緑灰)	灰白	やや精緻 黒色粒子		外面:寿文
8	青磁碗	4層	11.6	5.0	7.6	灰白・オリーブ黄・緑灰	緑灰	精緻 黒色粒子	肥前	やや楕円形
9	染付皿	表土	12.2	6.4	3.0	白(コバルト)	白	精緻 黒色粒子		菊花形
番号	遺物名称	層位	最大長(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	備考			
10	簪	8層	18.3	0.2	8.58	銅製				

第9表　遺物観察表⑦（平場7）

D区（第38・39図　図版６）

グリッドは（G－９，H－８・９区）である。標高26m～31mに位置し，北西と南東は斜面に挟まれ，大手とされる谷部にあたる。北西に位置する平場７からと，また谷部の東から伏流水が合流し，常に水が流れる。遺構は石列５列・石組み遺構１基が検出された。各石列の構築関係は不明である。



第38図　D区遺構配置図（S＝1/150）

(1)　遺構

①石列（SF-３～７）

（第38・39図　図版10）

SF-３は長さ約4.5m，幅約1.0m，高さ約0.4mを測る。主軸はほぼ南北を通り，弧状に配石される。岩盤直上に約30cmの礫，裏込めには拳大の礫が用いられ，石面は西と上面に揃えられる。一部崩落は見られるが，２～３段の石積みが構築される。

SF-４は長さ約6.4m，幅約0.5m，高さ約0.6mを測る。主軸は南北を通り，ほぼ直線的に配石される。北側は岩盤直上に約50cmの礫，南側には土と小礫が用いられている。石面は西に揃えられ，上面のレベルはほぼ一定に構築される。

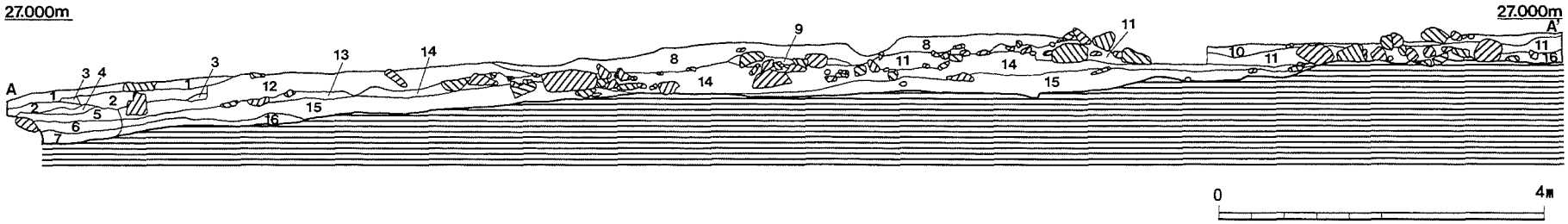
SF-５は長さ約11.0m，幅約0.7m，高さ約0.5mを測る。主軸は南北を通り，直線的に配石される。北端から約1.0mまでは岩盤直上に，南側には約30cmの礫が多く用いられ，上面のレベルはほぼ一定に構築される。石面は西に揃えられるが，他の石列と比較すると小礫で構成される。

SF-６は長さ約6.5m，幅約0.5m，高さ約0.5mを測る。主軸は北西～南東を通り，直線的に配石される。上段に約40cmの礫が，下段には小礫が詰められ，約２段の石積みが構築される。石面は上面に揃えられ，レベルはほぼ一定に構築される。南端はSF-５と鋭角に接続し，平面は「Y」の字状を呈している。また北端に約80～110cmの礫が円状に配石される。

SF-７は長さ約6.0m，幅0.4m，高さ約0.4mを測る。主軸は北西～南東を通り，直線的に配石される。灰色土の直上に約50cmの礫が配石され，１段で列をなし，裏込めもみられない。石面は西に揃えられるが，他の石列と比較すると礫の密度が低い。

②石組み遺構（SF-８）（第39・40図　図版10）

平面は南東に開く「コ」の字状を呈する。1.9×2.3×1.6mの３面からなり，高さ約0.6mを測る。石面は中心に向けられ，岩盤直上に約60cmの礫により，１～２段の石積みがされる。また当遺構の東側はSF-３，北側ではSF-４と接続している。



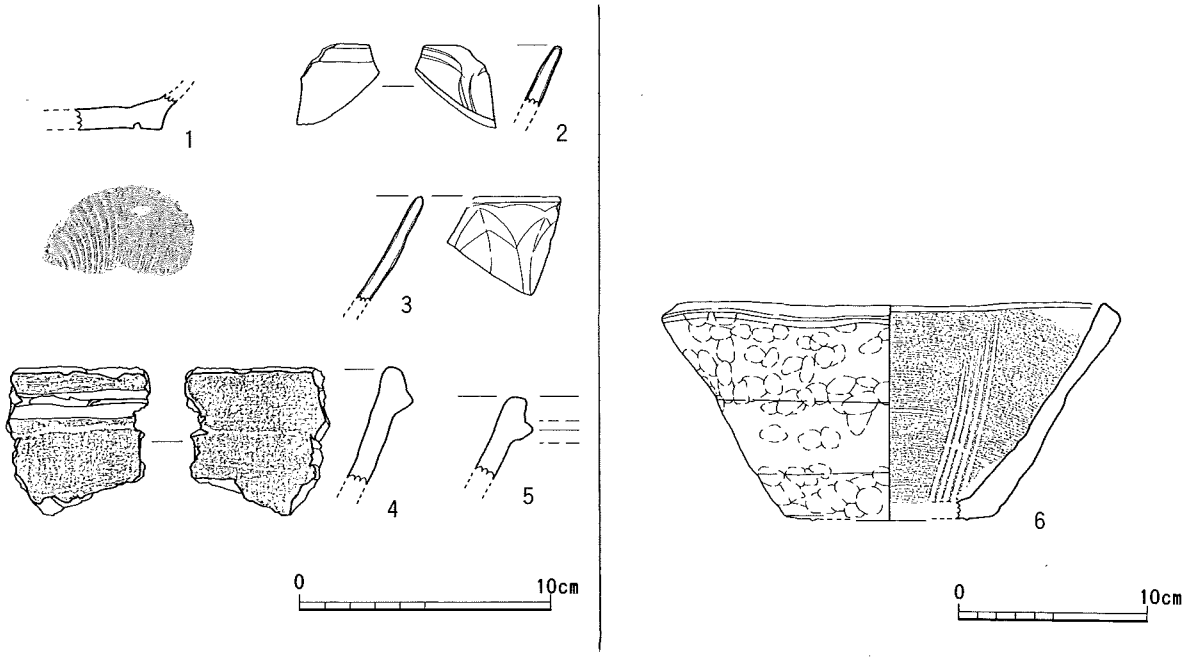
1	黄褐色土	砂粒を含む。灰色土が少量混じる。ややしまる。
2	褐灰色土	砂粒を含む。炭化物をわずかに含む。ややしまる。
3	灰色土	砂粒を含む。褐灰色が若干混じる。炭化物をわずかに含む。ややしまる。
4	灰色土	砂粒を含む。炭化物をわずかに含む。しまり弱い。
5	褐灰色土	砂粒を含む。炭化物をわずかに含む。しまり弱い。
6	褐灰色土	砂粒を含む。しまり弱い。
7	褐灰色土	砂岩の風化礫を多量に含む。粘性あり。
8	褐色土	砂粒を含む。黄褐色土が若干混じる。炭化物をわずかに含む。しまり強い
9	褐灰色土	砂粒を含む。黄褐土が若干混じる。ややしまる。
10	灰黄褐色土	砂粒を含む。にぶい黄褐土が少量混じる。炭化物をわずかに含む。
11	灰色土	砂粒を含む。灰黄褐色度が少量混じる。しまり弱い。
12	にぶい黄褐色土	砂粒を含む。黄褐色土が若干混じる。炭化物をわずかに含む。ややしまる。
13	灰黄褐色土	砂粒を含む。黄褐色土が若干混じる。炭化物をわずかに含む。ややしまる。
14	灰色土	砂粒を含む。灰色砂粒土が若干混じる。炭化物をわずかに含む。ややしまる。
15	灰色土	砂粒を含む。14層よりもしまりが強い。
16	灰色土	砂粒を含む。にぶい黄褐土が若干混じる。炭化物をわずかに含む。ややしまる。

第39図　D区土層断面図（S＝1/80）

当地区は，岩盤が露出し，北東から南西への傾斜と，北西から南東にかけての僅かな傾斜がみられ，南西が最も深くなる。石列はこの傾斜に沿って構築される。岩盤の位置が高いところは一個の礫を，深いところは土や小礫を用いて底場が上げられ，その上位には約40cmの礫が配石され，上面が水平を呈するように構築される。 (柴田妃三光)

(2) **遺物**（第40図　第10表　図版18）

1は土師器である。底部のみ残存する。器面調整は外面にケズリ，内面にナデ調整が施される。2・3は龍泉窯系青磁碗である。**2**はⅠ－4ｂ類に相当する。体部上半から口縁部のみ残存する。体部内面に輪花文が施される。**3**はⅡ－ａ類に相当する。体部上半から口縁部のみ残存し，口縁は直口する。体部外面に鎬蓮弁文が施される。4・5は滑石製石鍋である。**4**は体部上半から口縁部のみ残存し，内湾気味に立ち上がる。器面は内面に使用による擦過痕，外面にはノミ痕が確認されるが，使用による擦過のため不明瞭である。**5**は口縁部から体部上半が残存し，鍔が削り出される。体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり，鍔接続部から口縁部にかけてわずかに内傾する。内面に使用による擦過痕，外面にはノミ痕が確認されるが，使用による擦過のため不明瞭である。**6**は瓦質擂鉢である。平底の底部から口縁部にかけてわずかに内湾気味に立ち上がる。器面調整は外面には横走のハケ目＋多数の指頭圧痕，内面は横走のハケ目が施される。体部内面には，底部から口縁部の縦方向に１単位５条の擂目がおよそ６cm間隔で確認される。 (今里順一郎)



第40図　遺物実測図⑨（S＝1/3・1/4）

番号	遺物名称	層位	法量(cm)			色調		胎土	技法・調整		備考
			口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面	
1	土師器	2層	－	－	－	浅黄橙	浅黄橙	精緻 雲母･赤色粒子	ケズリ	ナデ	回転糸切り
6	瓦質擂鉢	表土	24.4	10.9	11.4	浅黄	灰黄	やや粗雑 長石･石英	ハケ目/指頭圧痕	ハケ目	擂目１単位５条
番号	遺物名称	層位	法量(cm)			色調		胎土	施文		備考
			口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面	
2	青磁碗	表土	－	－	－	緑灰	緑灰	精緻	－	輪花文	龍泉窯系
3	青磁碗	表土	－	－	－	オリーブ灰	オリーブ灰	精緻	鎬連弁文	－	龍泉窯系
番号	遺物名称	層位	法量(cm)			色調		スス		技法・調整		備考
			口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	外面	内面	
4	石鍋	トレンチ	－	－	－	褐灰	黒褐	○		ノミ痕/使用擦過	使用擦過	滑石製
5	石鍋	トレンチ	－	－	－	灰	黒褐			ノミ痕/使用擦過	使用擦過	滑石製

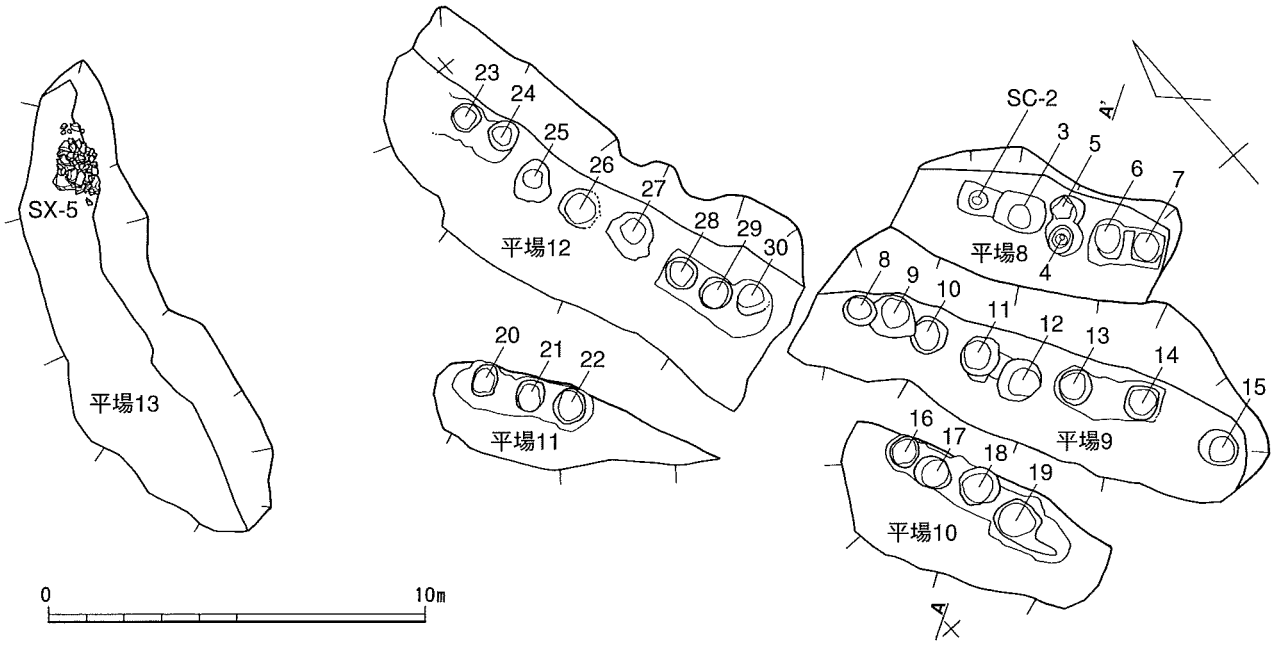
第10表　遺物観察表⑧（Ｄ区）

E区

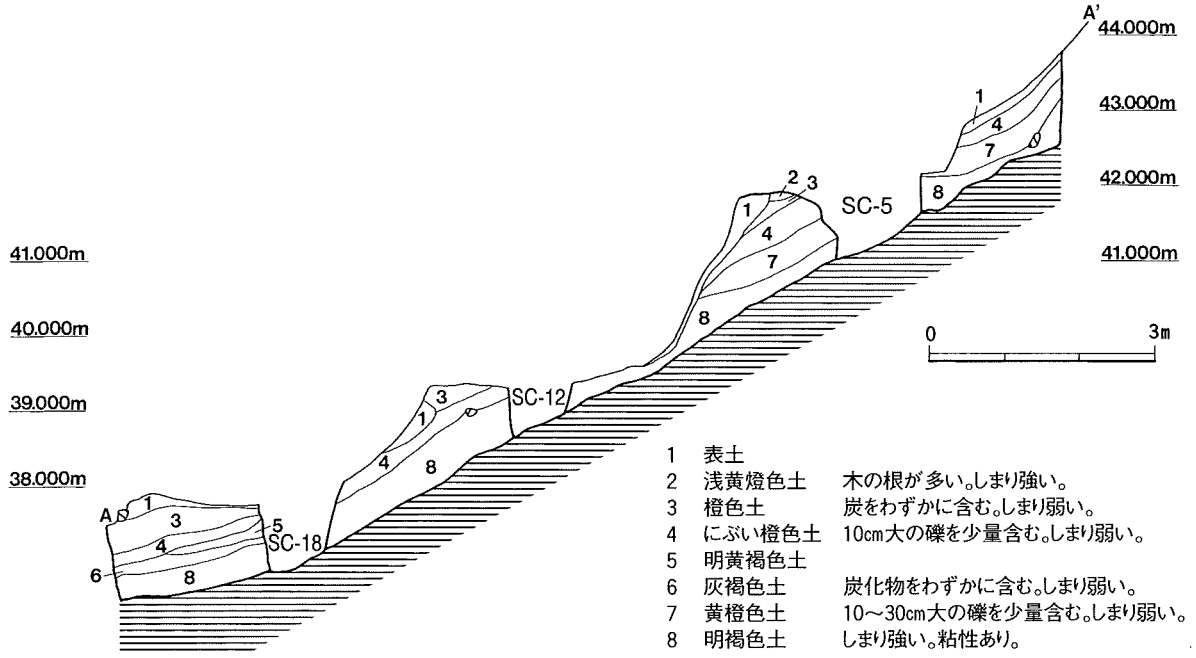
(1) 遺構

①墓壙（SC-2～30）（第41図　第11表　図版7・11）

D区の南東の斜面中腹付近に平場が6箇所（平場8～13）造成されており，平場8～12において墓壙が29基確認された。29基中23基の墓壙において，18世紀後半～19世紀の陶磁器が出土しており，近世から明治・大正にかけての墓壙群と考えられる。最上段の平場8に位置するSC-2・4・5は，甕棺で埋葬される。そのうち，SC-4の甕棺上部には蓋石が配されており，その内部からは人骨が確認された。その他数基の墓壙内には墓石が混入しており，掘り返しの跡が見られる。詳細は不明であるが改葬の可能性が高い。



第41図　E区遺構配置図（S＝1/200）



第42図　E区土層断面図（S＝1/100）

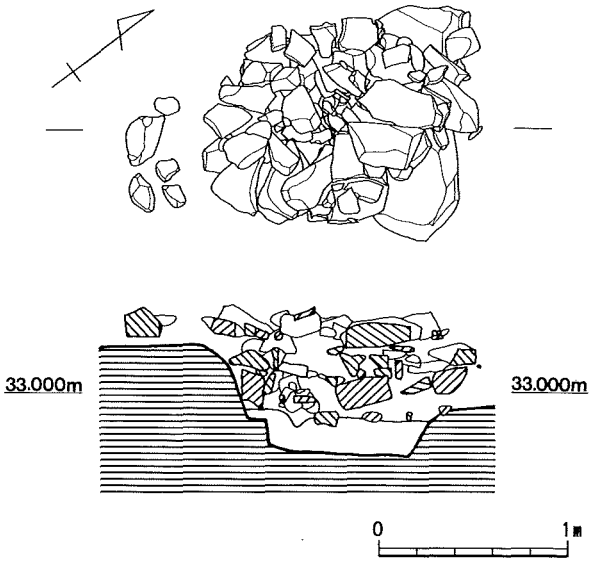
平場名	遺構番号	径(m)	深さ(m)	底形	出土遺物	備考
平場8	SC-2	0.8×0.8	1.6	円	磁器小碗・銭・簪	甕出土
	SC-3	0.8×1.0	1.5	円	甕片・陶器灯火具・染付碗・瓶	
	SC-4	0.7×0.7	0.9	円	なし	甕出土
	SC-5	0.9×0.9	0.9	円	蓋石	甕内人骨出土
	SC-6	1.0×0.9	1.8	円	なし	
	SC-7	0.8×0.8	0.9	円	染付小坏・銭・煙管	
平場9	SC-8	1.0×1.0	1.4	円	染付小坏・銭・煙管	
	SC-9	0.9×0.8	0.6	円	染付小坏・染付碗・瓶	
	SC-10	0.8×0.9	0.3	円	なし	
	SC-11	1.0×1.0	0.5	円	染付碗	
	SC-12	1.2×1.2	1.0	円	小坏	
	SC-13	0.9×0.9	1.4	円	なし	
	SC-14	0.9×1.0	1.1	円	染付碗	
	SC-15	1.0×1.0	1.4	円	なし	
平場10	SC-16	0.8×0.8	0.3	円	色絵碗・銭・ガラス製容器	墓石多数確認
	SC-17	0.8×0.9	0.4	円	染付小坏・陶胎染付小坏・銭	
	SC-18	1.1×1.1	1.3	円	陶器皿・染付碗	墓石多数確認
	SC-19	1.0×1.1	0.9	円	湯呑	
平場11	SC-20	0.9×0.7	0.5	方	陶胎灯火具・銭	
	SC-21	0.7×0.8	0.5	楕円	染付水注・銭	
	SC-22	1.0×0.9	0.7	楕円	染付瓶・銭	
平場12	SC-23	0.8×0.8	0.8	円	白磁椀・色絵碗	
	SC-24	0.9×0.8	1.3	円	染付皿・銭・ガラス小玉	
	SC-25	0.8×0.7	0.8	円	染付皿・染付碗・白磁紅皿・銭	
	SC-26	1.0×1.0	1.4	ほぼ円	陶器小碗・陶胎染付碗・染付碗蓋・青磁碗・銭・煙管	人骨出土
	SC-27	0.9×1.0	0.8	ほぼ円	染付青磁碗蓋・染付皿・銭	
	SC-28	0.8×0.9	0.8	円	なし	
	SC-29	0.8×0.8	0.6	円	なし	
	SC-30	0.8×0.7	0.7	円	陶胎染付碗	

第11表　墓壙観察表

②不明遺構（SX-５）（第43図）

墓壙群の北西部に位置する平場13において検出された。長辺1.5m，短辺1.1mを測り，不定形に配石されている。主に，20～30cm大の礫で構築されており，一部50～60cm大の礫も用いられている。下部からは当遺構に伴う，長軸1.2m，短軸0.7m，深さ0.2mの楕円形の掘り込みが確認された。埋土は単層で，砂岩小礫を含む。遺物は出土していない。

（秋山千尋）



第43図　SX-５平面図及び見通し断面図（S＝1/40）

SC　出土遺物

・甕（第44図　第12表　図版19）

１～３とも墓壙内から検出された。１は頸部から口縁部にかけ直線的に立ち上がり，口縁部は大きく外反する。口縁は内側に折られ肥厚し，玉縁状を呈する。成形技法は体部内面にヨコナデが認められ，底部内面には渦巻状にヘラケズリがみられる。全体に鉄釉がかけられ，一部横方向に釉垂れがみられる。口縁上面は釉はぎされ，貝目痕が14箇所，底部外面には，貝目痕が５箇所認められる。２は頸部から口縁部にかけわずかに外反し開く。口縁は内側が肥厚し，玉縁状を呈する。成形技法は体部内面下半に粗い格子目当て具痕が認められる。鉄釉がかけられ，口縁上面はほとんど釉はぎされず，貝目痕が13～15箇所確認できる。このために口縁部は広く剥がれ欠損している。また，体部には釉薬が丸く膨らみ，割れている箇所も多くみられる。底部内面に砂目痕が広い範囲に認められる。底部には焼成後に穿孔されている。３は頸部が短く口縁部は内側に突出し，口縁部外面がやや下がる。成形技法は頸部内面には平行タタキ＋ナデ，体部外面は格子目タタキ＋ナデ，体部内面には格子目当て具痕がみられる。口縁上面は一部が釉はぎされ貝目痕が８箇所認められる。鉄釉が体部にかけられ底部内面には砂と釉薬が多く付着する。底部は施釉されておらず，布目がみられる。また，底部には貫通してはいないが穿孔痕が認められる。

・陶磁器（第45・46図　第13表　図版20～22）

１は灯火具である。受け皿部の接合部から口縁部にかけ直線的に立ち上がる。２は染付碗である。底部から口縁部にかけ内湾気味に開く。高台には砂目積みの痕が認められる。３・４・５は染付小坏である。３は底部から口縁部にかけ外反し開く。４は底部から口縁部にかけ内湾し，口縁部はわずかに外反する。外面にはススキ文が施される。５は底部から口縁部にかけ内湾気味に開き，口縁部のみ外反する。６は染付碗である。底部から口縁部にかけ内湾気味に開く。外面には「平戸城下桜紅」と文字文が描かれる。口縁部・高台には指跡が認められる。７は染付碗である。底部から口縁部にかけ内湾気味に立ち上がる。高台は「ハ」の字状を呈する。８は磁器小坏である。底部から口縁部にかけ外反気味に大きく開く。９は色絵碗である。底部から口縁部にかけ直線的に立ち上がり，口縁部のみ外反する。高台内に「有田焼」の銘が施される。10は陶胎染付小坏である。底部から口縁部にかけ内湾気味に開く。11は染付小坏である。底部から口縁部にかけ大きく開く。12は染付碗である。底部か

ら口縁部にかけ内湾気味に立ち上がる。畳付け内側には砂目積みの痕が認められる。13は磁器皿である。底部から口縁部にかけ内湾気味に開きく。型打成形により菊花形を呈する。14は白磁碗である。底部から口縁部にかけ直線的に立ち上がる。内面には降灰痕が認められる。15は色絵碗である。底部から口縁部にかけ直線的に立ち上がり，口縁部のみ外反する。16は色絵碗である。底部から口縁部にかけ直線的に開く。高台は「ハ」の字状を呈する。高台内に「有田焼」の銘，口縁には鉄釉が口縁に巡らされる。17は陶胎染付碗である。底部から口縁部にかけ内湾気味に開き，口縁部はわずかに外反する。18は陶胎灯火具である。脚付きの受け皿と下皿部からなり，上下の皿ともに底部から口縁部にかけ直線的に大きく開く。脚部と下皿部に接合部分が認められる。19は染付水注である。底部から体部，頸部から口縁部にかけ内湾気味に開く。注口は直線的に開く。底部は釉はぎがされる。20は染付瓶である。頸部から口縁部にかけ直線的に立ち上がる鶴首を呈し，高台は刳り底である。21は染付皿である。底部から口縁部にかけ内湾気味に開く。22は染付碗である。底部から口縁部にかけ内湾気味に開く。23は白磁紅皿である。底部から口縁部にかけ内湾気味に開き，口唇部は平坦を呈する。24は染付皿である。底部から口縁部にかけ内湾気味に開く。型打成形により輪花形を呈し，口縁には鉄釉が口縁に巡らされる。25は染付碗蓋である。高台から口縁部にかけ「く」の字状に開く。26は陶器小碗である。高台から体部の接続部は直角に削られる。口縁部にかけ内湾気味に開き，口縁部はわずかに外反する。藁灰釉が施される。27は陶胎染付碗である。底部から口縁部にかけ内湾気味に開く。28は青磁碗である。底部から口縁部にかけ内湾気味に開く。見込みは蛇の目釉剥ぎが施される。29は染付青磁碗蓋である。高台から口縁部にかけ内湾に開く。外面には青磁釉が施される。30は染付皿である。見込みには小さな気泡が多く見られる。31は染付皿である。底部から口縁部かけ直線的に開き，口縁部は大きく外反する。型打成形により輪花形を呈する。

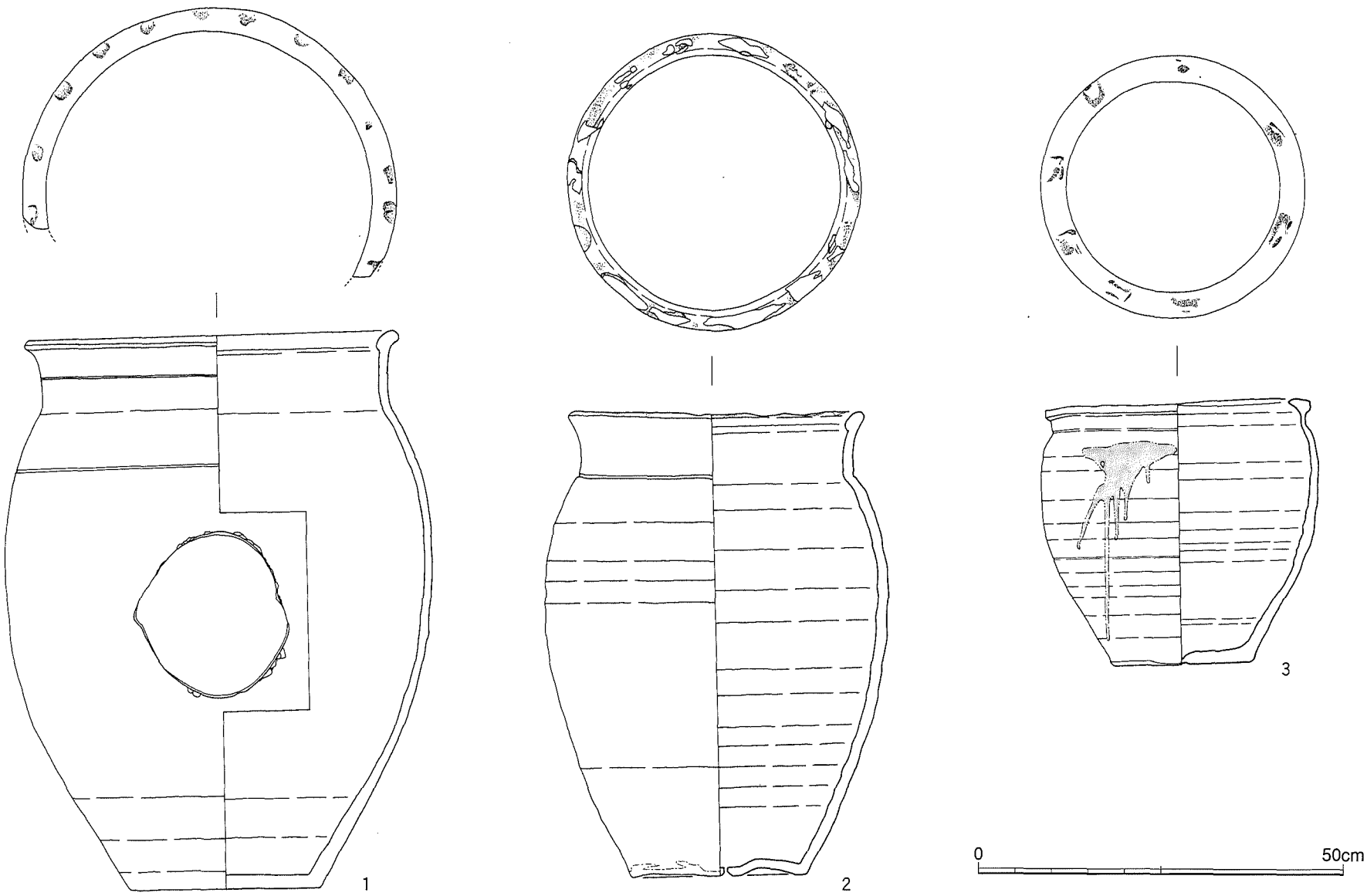
・金属製品（第47図　第14表　図版22）

1～3は煙管である。1は雁首部分で肩はなく，首部の口から1.7cm～3.2cmにかけては，8条の圏帯が刻まれる。首部の湾曲はなく直接火皿に接合し，火皿断面は逆台形状を呈する。2は雁首部で肩はない。割れているが，羅宇部分の竹材が残存している。表面には首部に多くの磨き痕が認められる。首部の湾曲はなく直接火皿に接合し，火皿断面は逆台形状を呈する。3は吸口部で羅宇が1cm残存している。吸口から2.4cm～4.3cmにかけて圏帯が7条入り，区内には細かい圏線が3条ずつ刻まれる。吸口の中心部に羅宇を固定する鉄心のようなものが見られる。4は簪である。耳掻きが付く。

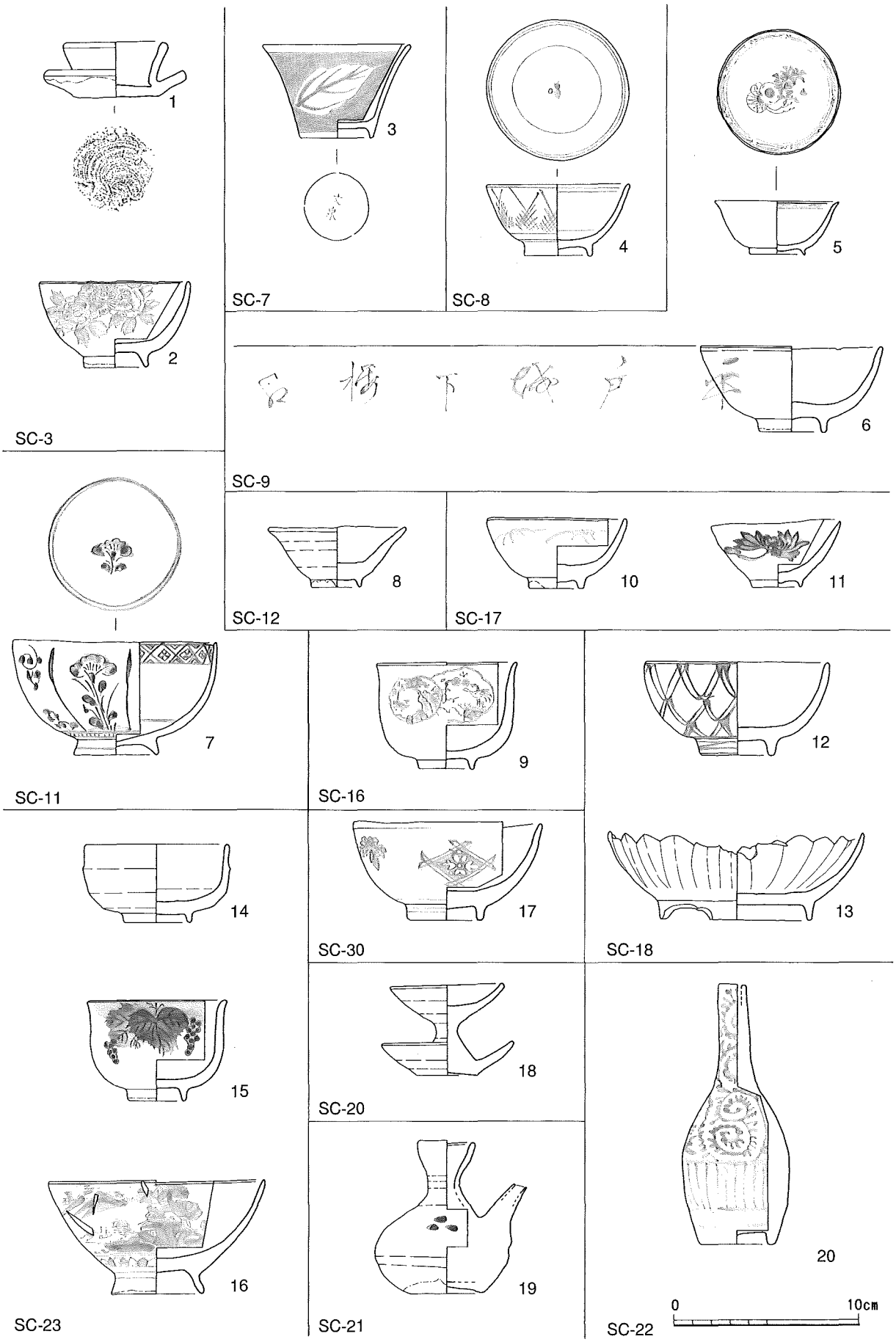
（今里順一郎）

番号	遺構名	法量(cm)			色調		胎土	技法・調整		備考
		口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面	
1	SC-2	41.2	26.2	71.7	黒褐	暗赤褐	精緻		体部:ヨコナデ 底部:渦巻状のヘラケズリ	口縁上面:貝目痕14箇所 底部外面:貝目痕5箇所
2	SC-5	40.5	24.0	64.4	暗灰黄 極赤褐	灰褐	やや精緻 雲母・長石		体部下半—粗い格子目当て具痕	口縁上面:貝目痕13～15箇所 欠損著しい 底部:焼成後に穿孔 底部内面:砂目痕
3	SC-4	34.3	18.8	36.7	暗赤褐	黒	やや精緻 長石・砂粒	体部—格子目タタキ/ナデ	頸部—平行タタキ/ナデ 体部—格子目当て具痕	口縁上面:貝目痕8箇所 砂付着 体部外面:釉着有 底部:穿孔痕あり(未貫通) 底部外面:無釉

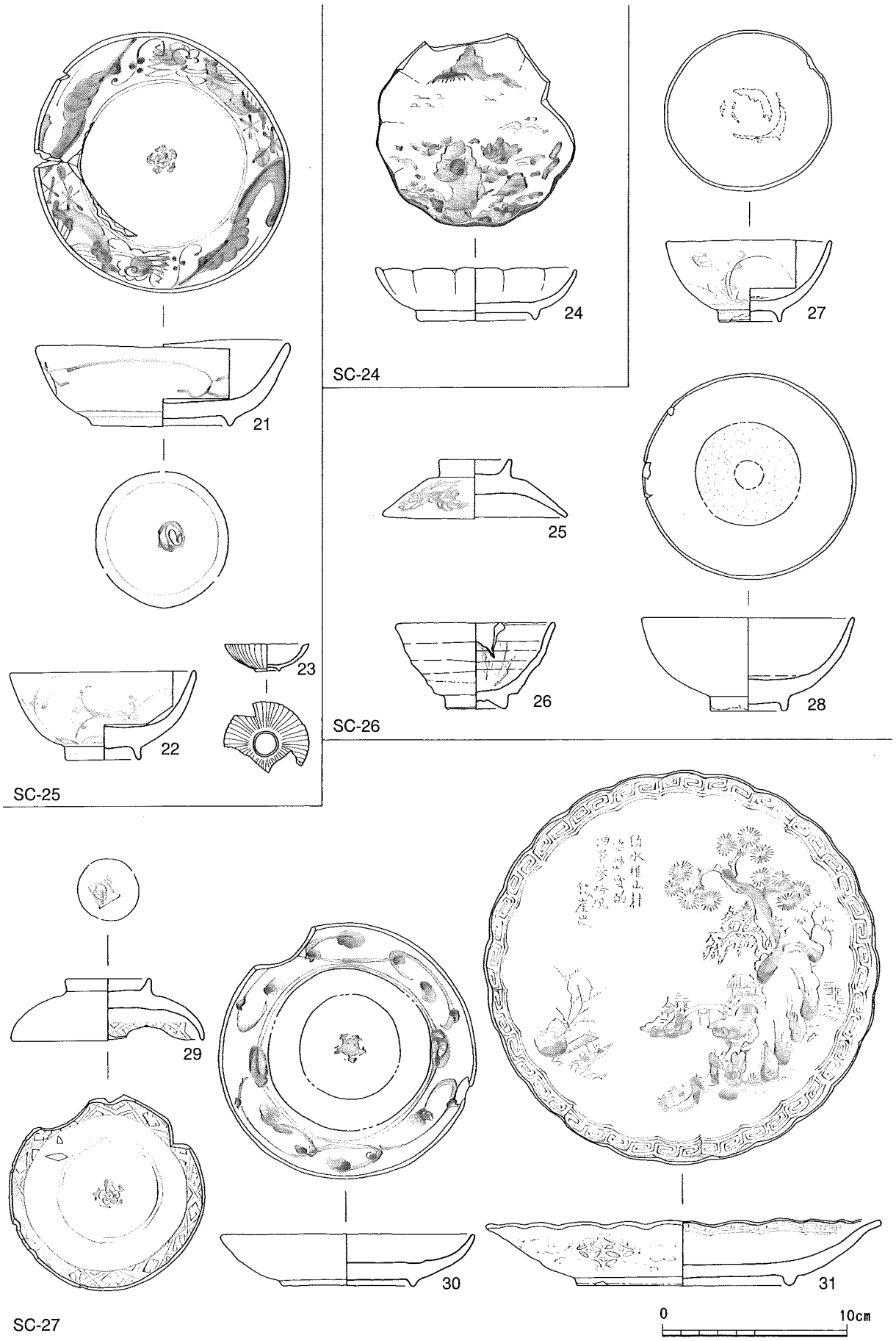
第12表　遺物観察表⑨（SC・甕）



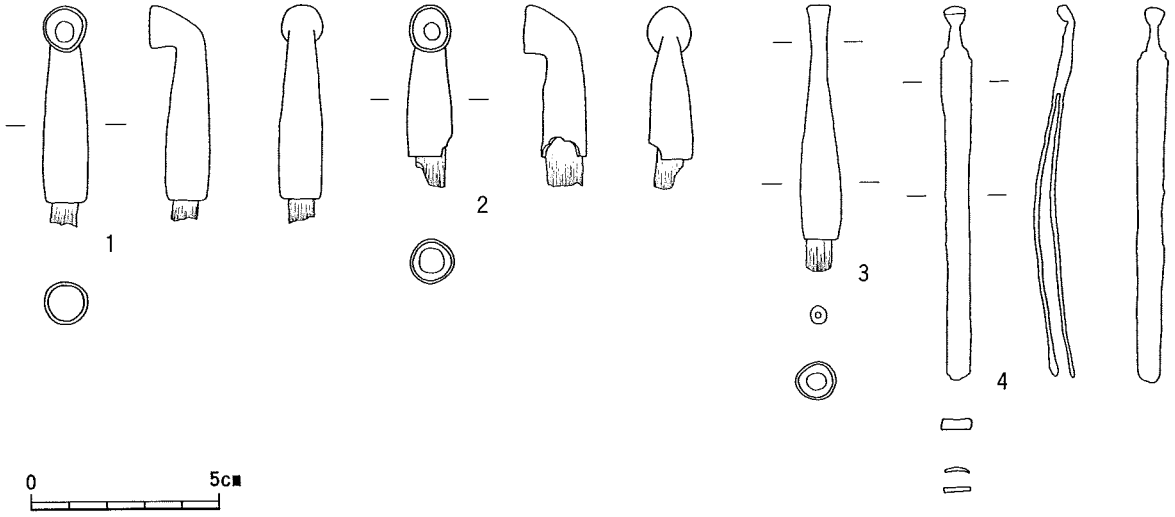
第44図　遺物実測図⑩（S＝1／8）



第45図　遺物実測図⑪（S＝1／3）



第46図　遺物実測図⑫（S＝1／3）



第47図　遺物実測図⑬（S＝1／2）

番号	遺物名称	遺構名(SC)	法量（cm）			色調（ ）は文様色を示す		胎土	備考
			口径	底径	器高	外面	内面		
1	陶器灯火具	3	5.2	4.6	3.0	橙	明褐	やや精緻 雲母	内・外面:刷毛目
2	染付碗	3	8.2	3.4	4.5	灰白(青・灰赤)	灰白	精緻	外面:花文 高台:砂目痕
3	染付小坏	7	7.9	3.8	5.0	灰白(藍・黒)	灰白	精緻	外面:葉文 高台内:「文泉」銘
4	染付小坏	8	7.7	3.6	3.9	灰泊(暗青灰)	灰白(青灰)	精緻	外面:ススキ文
5	染付小坏	9	6.7	3.0	2.8	灰白	明緑灰(明青)	精緻	内面:祝宝文
6	染付碗	9	9.7	3.6	4.5	灰白(暗青灰・青灰)	灰白	やや精緻	外面:文字文 口縁:高台指跡
7	染付碗	11	11.0	4.5	6.1	灰白(暗青灰・灰・緑灰)	灰白(青灰・緑灰)	精緻	外面:草花・鋸歯文 内面:四方襷文 望料碗
8	小坏	12	7.5	2.7	3.2	灰白	灰白	精緻	
9	色絵碗	16	7.6	3.0	5.7	明緑灰(赤褐・黄・金・黒・緑)	明緑灰	精緻	外面:花鳥・山水文 五彩手 肥前産
10	陶胎染付小坏	17	7.6	3.0	3.8	灰白(緑灰)	灰白	精緻 黒色粒子	外面:笹 肥前産
11	染付小坏	17	6.8	2.7	3.6	灰白(青灰)	灰白	精緻	外面:花文 印判手 肥前産
12	染付碗	18	10.0	4.1	5.0	灰白(暗緑灰)	灰白	精緻 黒色粒子	外面:二重網目文
13	磁器皿	18	13.6	8.2	4.7	淡黄	淡黄	やや精緻	型押し成形菊形皿
14	白磁碗	23	7.6	3.7	4.2	灰白	灰白	精緻	内面:降灰痕
15	色絵碗	23	7.4	3.2	5.4	灰白(暗赤・群青・明青灰・金)	灰白	精緻	外面:葡萄文
16	色絵碗	23	11.7	4.9	6.0	灰白(青黒・明青灰・赤褐・金)	灰白(明青灰・褐)	やや精緻 黒色粒子	外面:山水 内面:花文
17	陶胎染付碗	30	10.2	4.1	5.3	灰白(青灰・暗青灰)	灰泊	精緻	外面:井桁囲花文 印判手
18	陶胎灯火具	20	6.2	3.3	5.0	灰	灰	やや精緻	
19	染付水注	21	3.1	4.1	8.1	灰白(群青)	灰白	精緻	底部釉はぎ
20	染付瓶	22	1.5	4.1	14.0	明緑灰(暗緑灰・青灰)	明オリーブ	やや精緻 黒色粒子	外面:蛸唐草文 鶴首瓶
21	染付皿	25	13.9	7.5	4.7	灰白(青灰)	灰白(青灰)	精緻	外面:唐草文 内面:五弁花・草花文 肥前産
22	染付碗	25	10.0	4.0	4.8	明緑灰(緑灰・青灰)	明緑灰	やや精緻 黒色粒子	外面:雪葉散らし梅樹文 変形著しい
23	白磁紅皿	25	4.6	1.4	1.5	灰白	灰白	やや精緻 雲母・黒色粒子	型押し成形
24	染付皿	24	10.9	6.4	3.9	灰白	灰白(青灰・褐)	やや精緻	内面:山水文 輪花形 肥前産
25	染付碗蓋	26	9.9	3.9	3.2	灰白(青灰)	灰白	精緻	外面:蕪文 印判手
26	陶器小碗	26	8.4	3.2	4.6	灰黄 にぶい黄	灰黄色	やや精緻	藁灰釉 萩産
27	陶胎染付碗	26	8.9	3.4	4.3	灰白(オリーブ黒)	灰白	精緻 黒色粒子	外面:草花文 肥前産
28	青磁碗	26	11.4	4.0	5.0	明緑灰	灰白	精緻 黒色粒子	蛇の目釉はぎ 肥前産
29	染付青磁碗蓋	27	10.2	4.4	3.4	明緑灰(青灰・青)	明緑灰(暗青灰)	精緻	内面:五弁花・四方襷文 肥前産
30	染付皿	27	13.4	7.1	2.7	灰白	灰白(暗緑灰・緑灰)	精緻 黒色粒子	内面:五弁花・草文 蛇の目釉はぎ 肥前産
31	染付皿	27	21.2	11.4	3.5	灰白(暗青灰・青灰)	灰白(緑黒・青灰)	精緻	外面:七宝文 内面:山水・雷帯文 輪花形

第13表　遺物観察表⑩（SC・陶磁器）

番号	遺物名称	遺構名	法量(cm)		重量(g)	材質	備考
			最大長	幅			
1	煙管(雁首)	SC－8	5.2	0.8～1.2	13.8	銅	木製の羅宇残存
2	煙管(雁首)	SC－26	4.8	0.8～1.2	5.6	銅	木製の羅宇残存
3	煙管(吸口)	SC－7	6.2	0.4～1.1	10.7	銅	木製の羅宇残存
4	簪	SC－2	9.9	0.2～0.8	7.8		

第14表　遺物観測表⑪（SC・金属）

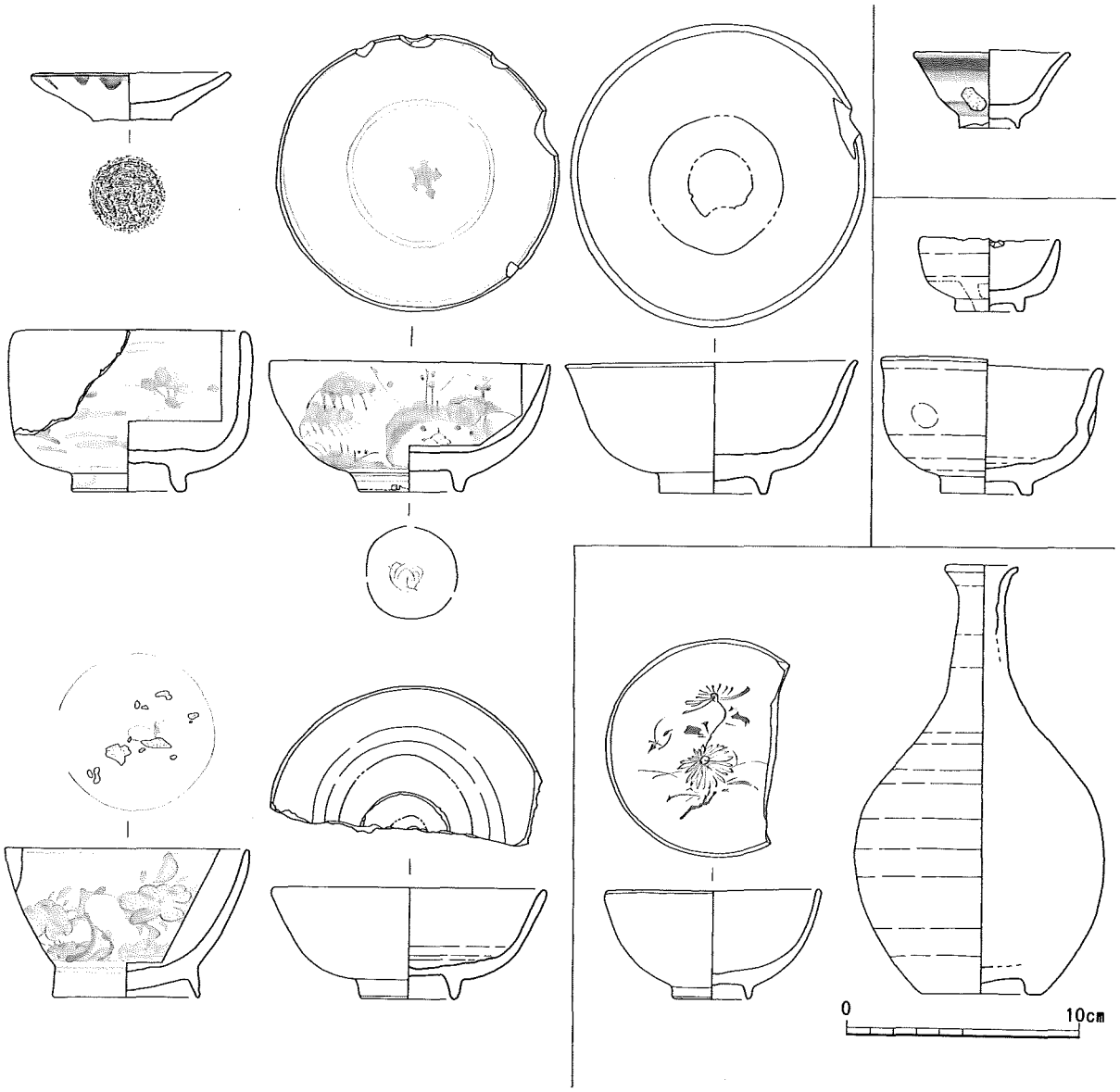
(2) **遺物**（第48図　第15表　図版23）

・陶磁器

1 は灯火皿である。底部から口縁部にかけ直線的に開き，口縁部はわずかに内湾する。見込みには輪状に目跡が認められる。内面には鉄釉が施され，外面には釉垂れが認められる。**2** は陶胎染付碗である。底部から口縁部にかけ直線的に立ち上がり，口縁部はわずかに内湾する。高台は外反し，砂目痕が認められる。外面には花文が施され，全体に貫入が見られる。**3** は染付碗である。底部から口縁部にかけ内湾気味に開く。高台はわずかに内傾する。見込みには２条の圏線と印判手の五弁花文，口縁部直下に１条の圏線が巡る。外面には全体的に草花文が施される。**4** は青白磁碗である。底部から口縁部にかけ内湾気味に開き，口縁部はわずかに外反する。見込みには蛇の目釉はぎが施され，降灰痕がみられる。**5** は染付碗である。底部から口縁部にかけ直線的に開き，広東碗形を呈する。丸底であり，高台は「ハ」の字状の高い高台を呈する。内面には降灰痕，不純物が多くみられる。見込みには１条の圏線が巡り，銘がみられる。外面の半面には花文が施される。高台脇には２条の圏線が巡る。**6** は陶器碗である。底部から口縁部にかけ内湾気味に開き，口縁部がわずかに外反する。高台内は深く削られ，高台はわずかに内湾する。全面に褐釉が施され，内面は蛇の目釉はぎが施される。**7** は染付小坏である。底部から口縁部にかけ外反し，大きく開く。高台は内湾気味に「ハ」の字状を呈する。外面には染付が帯状に施釉される。外面には癒着痕が１箇所残る。**8** は陶器小坏である。底部から口縁部にかけ直線的に立ち上がり，口縁部はわずかに内湾する。貼付高台で外反する。灰釉が施釉されるが，外面下半からは露胎し，一部釉垂れがみられる。**9** は白磁碗である。底部から口縁部にかけゆるやかな「Ｓ」字状を呈する。体部に指頭による窪みが３箇所施される。全体に貫入が見られ，ひび焼き白磁を呈している。同型体の碗が同地区から１点出土した。**10**は染付碗である。底部から口縁部にかけ内湾し開く。高台はわずかに外傾する。見込みには菊花文と蝶文が施される。染付の発色は黒味が強い。**11**は陶器瓶である。ロクロ成形により底部から体部にかけ球形，頸部から口縁部にかけ直線的に立ち上がり，口縁部が大きく外反する。底部は刳り底を呈する。釉薬は畳付けを除き施釉されるが，体部下半は発色が悪く変色がみられる。

（今里順一郎）

＊今回の出土遺物について長崎県教育庁学芸文化課の宮崎貴夫氏ならびに佐世保文化財調査事務所の副島和明氏，町田利幸氏，杉原敦史氏，江上正高氏，松尾秀昭氏よりご教授頂いた。ここに記して感謝を申し上げたい。



第48図　遺物実測図⑭（S＝1／3）

番号	遺物名称	出土地点 層位	法量(cm)			色調　( )は文様色を示す		胎土	備考
			口径	底径	器高	外面	内面		
1	灯火皿	平場10	8.6	3.2	2.0	にぶい赤褐	黒褐	やや精緻 黒色粒子	底部糸切り・鉄釉
2	陶胎染付碗	平場10	10.0	4.8	7.0	オリーブ灰(明緑灰・青灰)	オリーブ灰	精緻 黒色粒子	外面:花文 高台:砂目痕
3	染付碗	平場10	11.9	4.5	5.7	灰白色(明青灰・青灰)	灰白(明青灰)	精緻 黒色粒子	外面:雪輪草花文 見込み:五弁花文
4	青白磁碗	平場10	12.5	4.5	5.6	明緑灰	灰白	精緻 黒色粒子	蛇の目釉はぎ
5	染付椀	平場10	10.4	6.3	6.4	明緑灰(明青灰・青灰)	明緑灰(青灰)	精緻 黒色粒子	外面:草花文 降灰痕 広東碗 肥前産
6	陶器碗	平場10	11.6	4.0	4.9	褐色	褐色・にぶい赤褐色	やや精緻 長石	蛇の目釉はぎ 肥前産
7	染付小坏	平場11	6.5	2.6	3.3	灰白(暗青灰・青灰)	灰白	やや精緻 黒色粒子	融着痕
8	陶器小坏	平場9	6.0	3.0	3.1	灰白・にぶい黄	灰白	やや精緻 長石	瀬戸美濃
9	白磁碗	平場9	9.5	4.1	5.9	灰白	灰白	精緻 黒色粒子	ひび焼き白磁
10	染付碗	表採	9.0	3.2	4.6	灰白	灰白(暗青灰)	やや精緻 黒色粒子	内面:菊花文・蝶文
11	陶器瓶	表採	3.1	5.2	18.4	黄灰	灰白	精緻	刳り底

第15表　遺物観察表⑫（E区）

・**銭貨**（第49～51図　第16～18表　図版24・25）

近代・現代の銭貨を含め，全体で129枚が出土した。第16表にあるように，そのうちの124枚はＥ区の墓壙群からの出土である。

Ｅ区には29基の墓壙があり，うち12基の墓壙に六道銭が副葬されていた。墓壙ごとの出土数には偏りがあり，SC-21からの出土は41枚と突出している。平場ごとに見ると，平場11からの出土が54枚と最も多く，その東側の平場12と合わせると出土数は全体の約70％を占める。詳細は第49図・第17表の通りである。

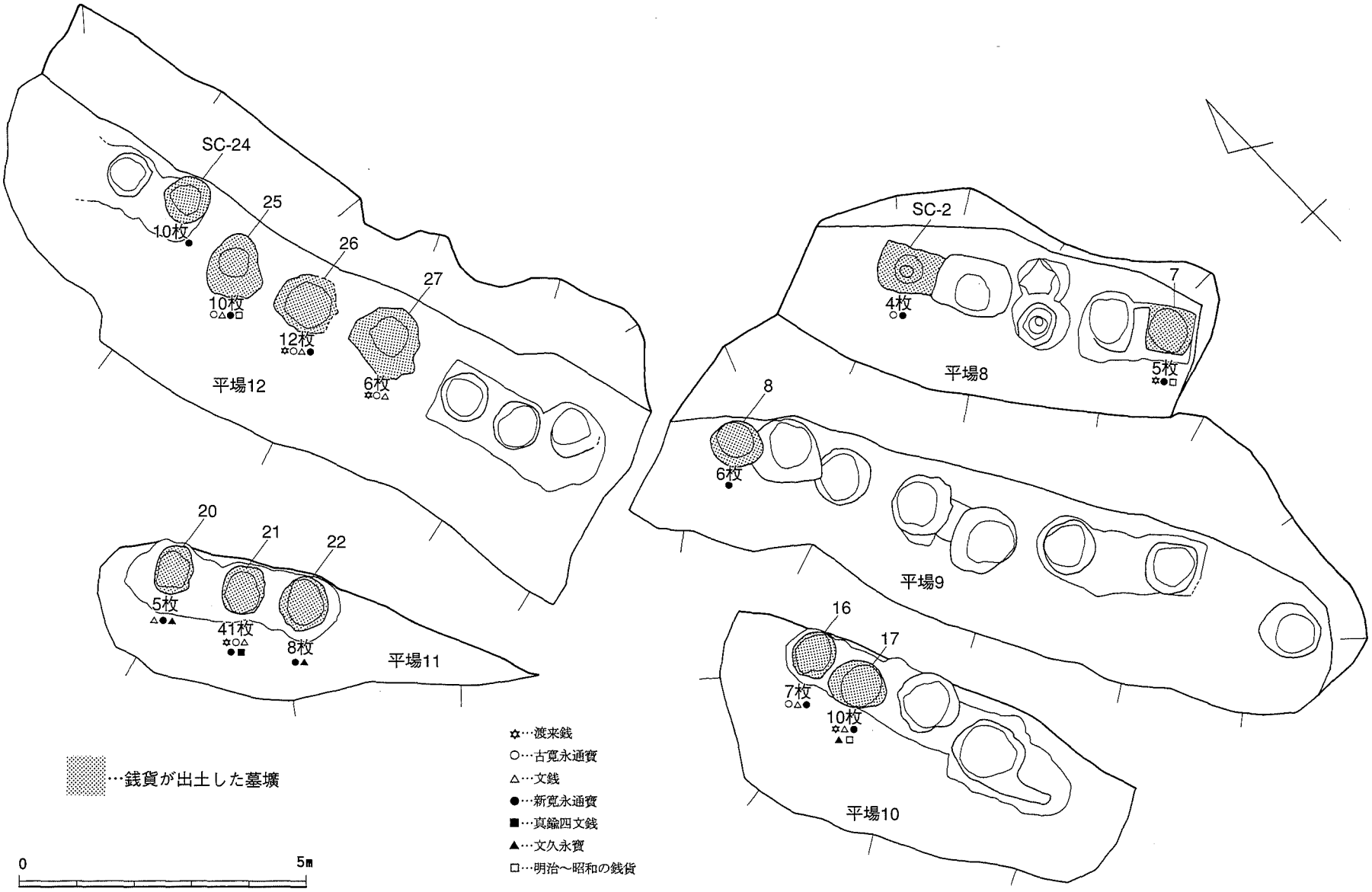
拓影図に関しては，ある程度判読可能な29枚を掲載した。　（秋山千尋）

Ｃ区（１枚）	表採	銭種	詳細		数
		渡来銭	淳化元寳	北宋	1

		銭種	詳細		数	小計
Ｅ区（128枚）	墓壙内（124枚）	渡来銭	開元通寳	唐	1	9
			至和元寳	北宋	1	
			康熙通寳	清	4	
			乾隆通寳	清	1	
			嘉慶通寳	清	2	
		寛永通宝	古寛永通寳		13	88
			文銭		9	
			新寛永通寳		64	
			真鍮四文銭		2	
		文久永寳	草文		3	8
			真文		5	
		近現代	明治		6	10
			大正		3	
			昭和		1	
		不明（註１）	（判読不能）		9	9
					合計	124
	墓壙外（４枚）	銭種	詳細		数	小計
		寛永通宝	古寛永通寳		1	2
			新寛永通寳		1	
		文久永宝	真文		1	2
			草文玉宝		1	
					合計	4

（註１）10枚が癒着した状態で出土したため，下の９枚は判読できなかった。
上の１枚のみは新寛永通寳と確認できた。（図版25）

第16表　銭貨総出土数



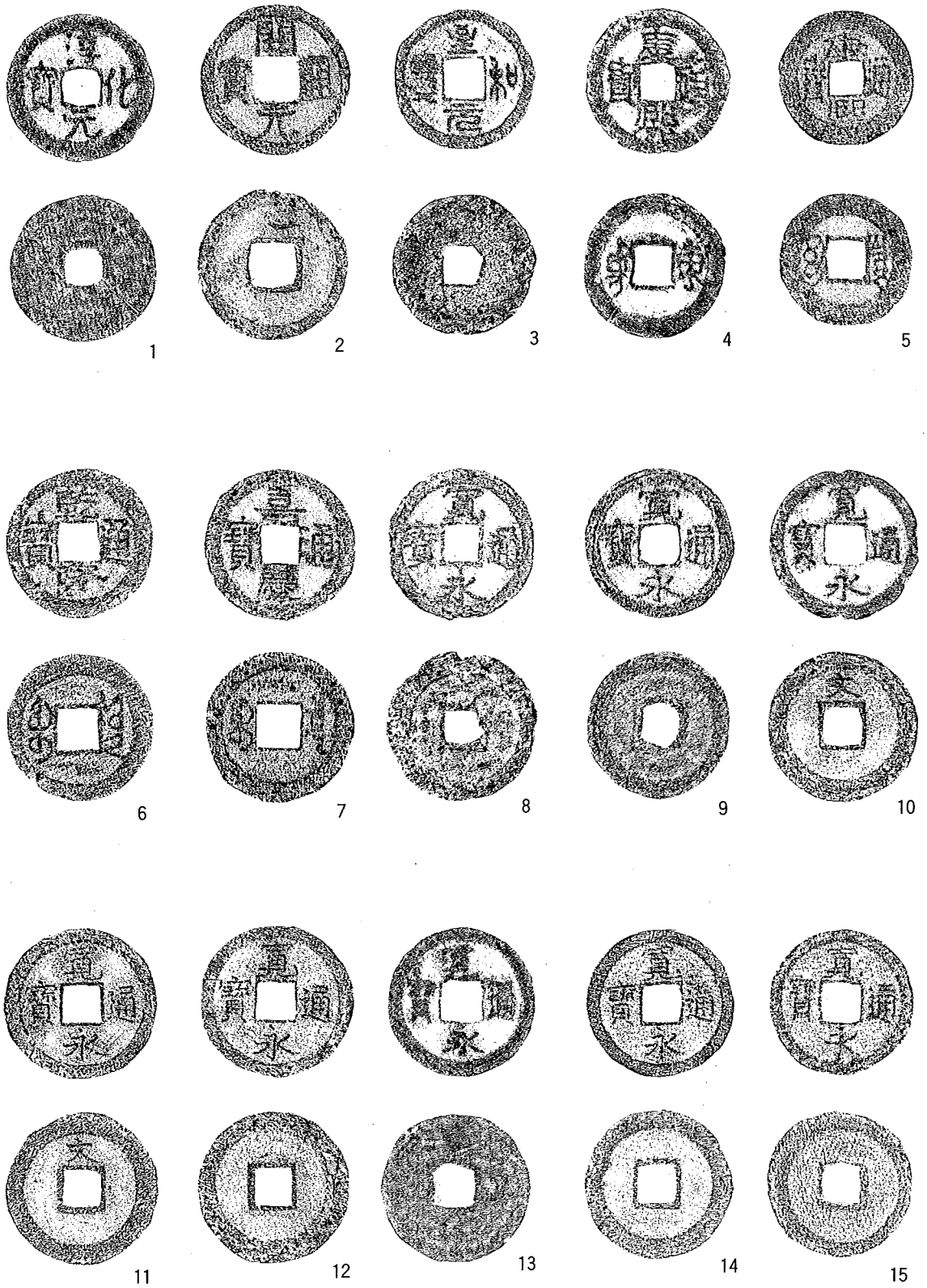
第49図　墓壙別錢貨出土状況（S＝1/100）

場所	墓壙	種類	初鋳年	数		
平場12	SC-24	新寛永通寶	1697	1	10枚	38枚
		不明	—	9		
	SC-25	古寛永通寶	1636	1	10枚	
		文銭	1668	1		
		新寛永通寶	1697	4		
		五銭銅貨(大正)	1922	1		
		一銭銅貨(大正)	1921	2		
		一銭銅貨(昭和)	1933	1		
	SC-26	康熙通寶	1662(清)	3	12枚	
		乾隆通寶	1736(清)	1		
		古寛永通寶	1636	1		
		文銭	1668	2		
		新寛永通寶	1697	5		
	SC-27	康熙通寶	1662(清)	1	6枚	
		古寛永通寶	1636	4		
		文銭	1668	1		
平場11	SC-20	文銭	1668	1	5枚	54枚
		新寛永通寶	1697	3		
		文久永寶	1862	1		
	SC-21	嘉慶通寶	1796(清)	2	41枚	
		古寛永通寶	1636	2		
		文銭	1668	1		
		新寛永通寶	1697	31		
		新寛永通寶(元銭)	1741	3		
		真鍮四文銭	1767	2		
	SC-22	新寛永通寶	1697	1	8枚	
		新寛永通寶(元銭)	1741	1		
		文久永寶	1862	6		

場所	墓壙	種類	初鋳年	数		
平場8	SC-2	古寛永通寶	1636	1	3枚	9枚
		新寛永通寶	1697	2		
	SC-2(甕内)	古寛永通寶	1636	1	1枚	
	SC-7	至和元寶	1054(北宋)	1	5枚	
		新寛永通寶	1697	3		
		五銭銅貨(明治)	1889	1		
平場9	SC-8	新寛永通寶	1697	6	6枚	6枚
平場10	SC-16	古寛永通寶	1636	3	7枚	17枚
		文銭	1668	2		
		新寛永通寶	1697	2		
	SC-17	開元通寶	621(唐)	1	10枚	
		文銭	1668	1		
		新寛永通寶	1697	2		
		文久永寶	1862	1		
		一厘銅貨(明治)	1883	4		
		一厘銅貨(明治)	1883	1		

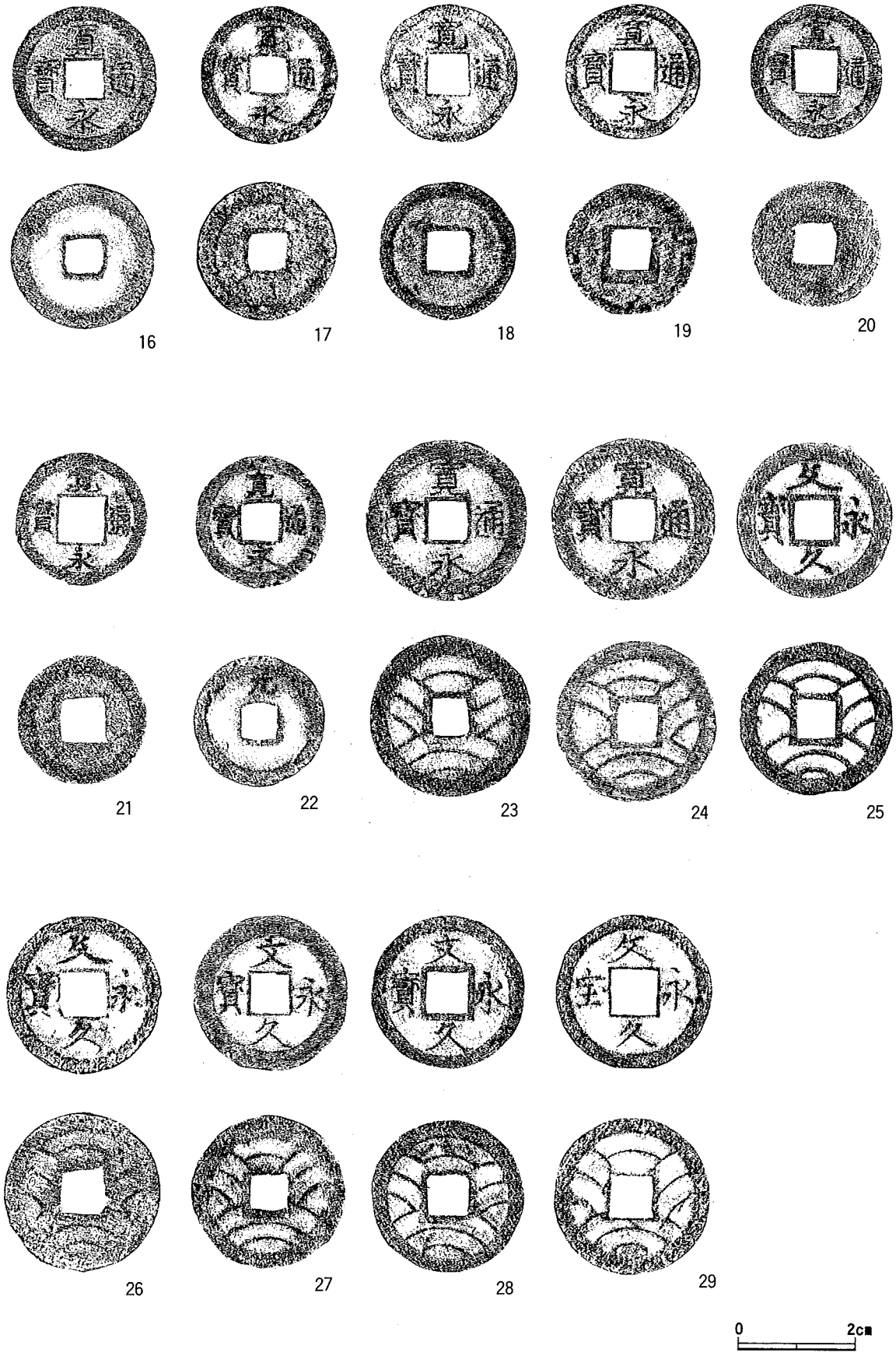
※この表は第49図の位置と対応する。

第17表　墓壙別銭貨出土数



0 2cm

第50図　銭貨拓影図①（S＝1/1）



第51図　銭貨拓影図②（S＝1／1）

番号	種類	出土場所		背文	初鋳年	備考
1	淳化元寶	C区	表採	なし	990年(北宋)	真書体
2	開元通寶	E区	SC-17	上背月	621年(唐)	低頭通，上背月
3	至和元寶	E区	SC-7	なし	1054年(北宋)	篆書体
4	康熙通寶	E区	SC-26	満州文字 漢字	1662年(清)	裏は満州文字と漢字の「東」 共に鋳造地を表す 「山東省局」鋳造
5	康熙通寶	E区	SC-26	満州文字	1662年(清)	裏は満州文字　左が「寶」 右が鋳造局を表す 「戸部寶泉局」鋳造
6	乾隆通寶	E区	SC-26	満州文字	1736年(清)	裏は満州文字　左が「寶」 右が鋳造局を表す 「雲南宝雲局」鋳造
7	嘉慶通寶	E区	SC-21	満州文字	1796年(清)	裏は満州文字　左が「寶」 右が鋳造局を表す 「戸部寶泉局」鋳造
8	寛永通寶	E区	SC-16	なし	1636年	古寛永
9	寛永通寶	E区	SC-16	なし	1636年	古寛永
10	寛永通寶	E区	SC-27	「文」	1668年	背「文」 文銭(寛文期亀戸銭)
11	寛永通寶	E区	SC-20	「文」	1668年	背「文」 文銭(寛文期亀戸銭)
12	寛永通寶	E区	SC-26	「文」	1668年	背「文」 文銭(寛文期亀戸銭)
13	寛永通寶	E区	SC-20	なし	1697年	新寛永
14	寛永通寶	E区	SC-20	なし	1697年	新寛永
15	寛永通寶	E区	SC-16	なし	1697年	新寛永
16	寛永通寶	E区	SC-26	なし	1697年	新寛永
17	寛永通寶	E区	SC-21	なし	1697年	新寛永
18	寛永通寶	E区	SC-21	なし	1697年	新寛永
19	寛永通寶	E区	SC-21	なし	1697年	新寛永
20	寛永通寶	E区	SC-21	なし	1697年	新寛永
21	寛永通寶	E区	SC-21	なし	1697年	新寛永
22	寛永通寶	E区	SC-21	「元」	1741年	背「元」→寛保期高津銭(1741)
23	寛永通寶	E区	SC-21	11波	1767年	真鍮四文銭・波銭
24	寛永通寶	E区	SC-21	11波	1767年	真鍮四文銭・波銭
25	文久永寶	E区	SC-22	11波	1862年	文久永寶　(草文)　金座鋳造
26	文久永寶	E区	SC-20	11波	1862年	文久永寶　(草文)　金座鋳造
27	文久永寶	E区	SC-22	11波	1862年	文久永寶　(真文)　銀座鋳造
28	文久永寶	E区	SC-22	11波	1862年	文久永寶　(真文)　銀座鋳造
29	文久永寶	E区	1層	11波	1862年	文久永宝　(草文玉宝・略宝)　金座鋳造

第18表　銭貨観察表

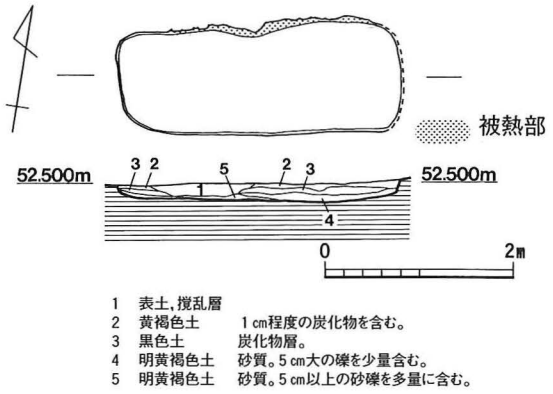
Ｆ区（図版11）

Ｅ区の南東の尾根部分とそこから調査区南端まで広がる斜面にあたる。尾根部の北側からは土壙１基が検出されたが，遺物は出土していない。斜面の南側においては，表土直下から土師器片が出土した。斜面の北側は，炭鉱稼動時期に廃棄されたボタが大量に確認された。当地区は現代遺構・遺物の確認はされたが，武辺城に関連する遺構・遺物は認められなかった。

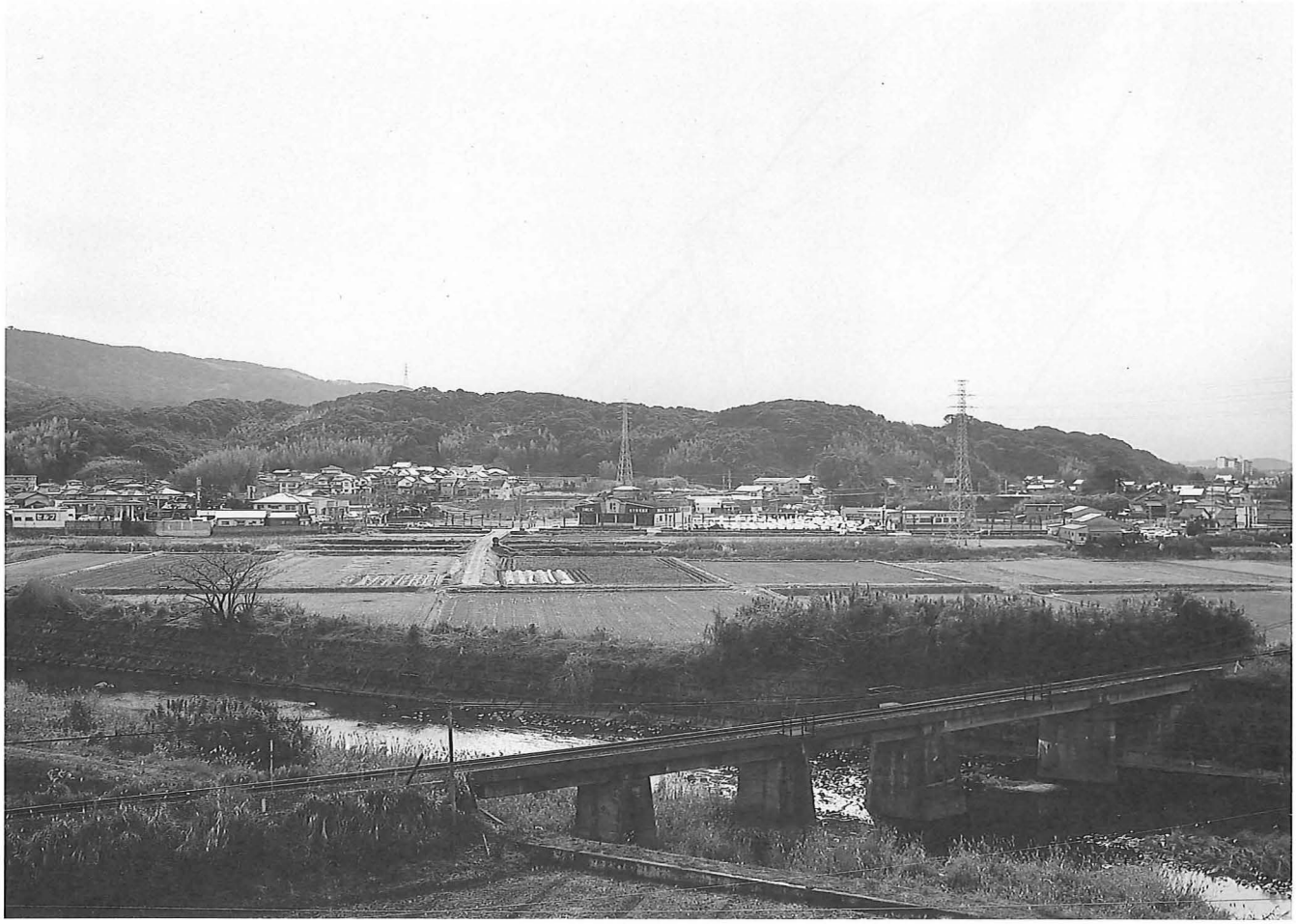
(1)　遺構

①土壙（SK-４）（第52図　図版11）

Ｆ区北側の平場において検出された。長軸3.0ｍ，短軸1.2ｍ，深さ0.2ｍを測り，平面は楕円形を呈する。５層に分層され，３層より多くの炭化物が確認された。北壁は赤褐色化している。遺物は出土していない。　（秋山千尋）



第52図　SK-４平面図及び土層断面図（Ｓ＝１/80）



第53図　武辺城跡遠景（北より）

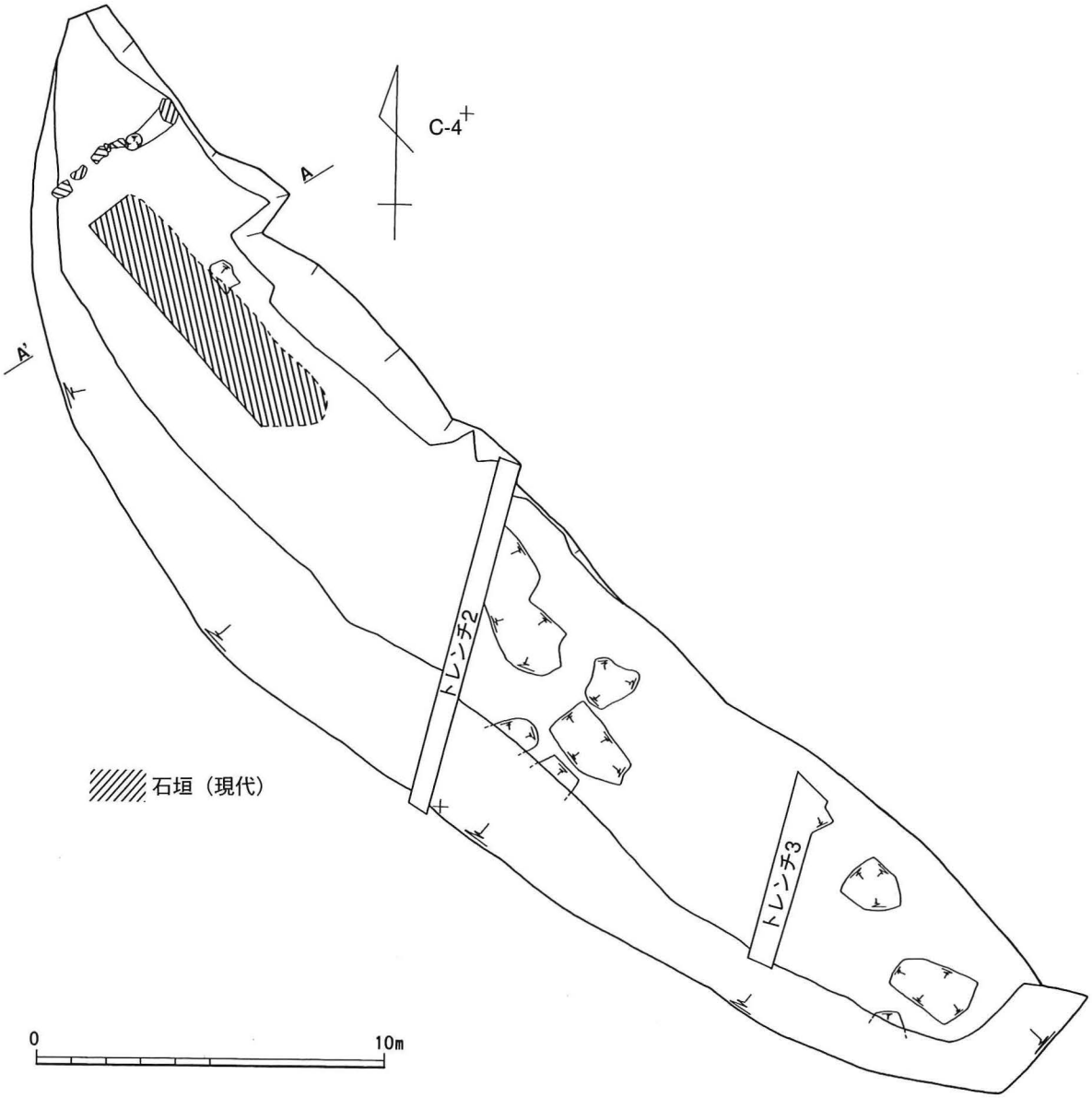
Ⅳ　平成18年度の本調査

1　調査概要

18年度調査地区をＧ区とした。17年度調査地区のＡ区とＢ区の間，西曲輪の西斜面，標高約30mに位置する，321㎡について調査を実施した。

17年度と同様に調査区を国土座標軸に合わせて南北を主軸とする20m方眼のグリッドを設定した。トレンチは，盛土と旧地形の状況を確認するために３本設定し，その内の２本は，調査区北側の尾根に直行するように入れた。重機による掘削を行い，その後人力による掘削に移行した。その結果，東から南西に向けての谷地形が確認され，谷と尾根の２方向からの堆積が見られた。

大量の盛り土を除去し，旧表土層の調査を行った。その下層からは近代の石垣が検出されたのみで，その他の遺構は認められなかった。調査区の南端部において水の影響を受けた土層堆積が確認できた。



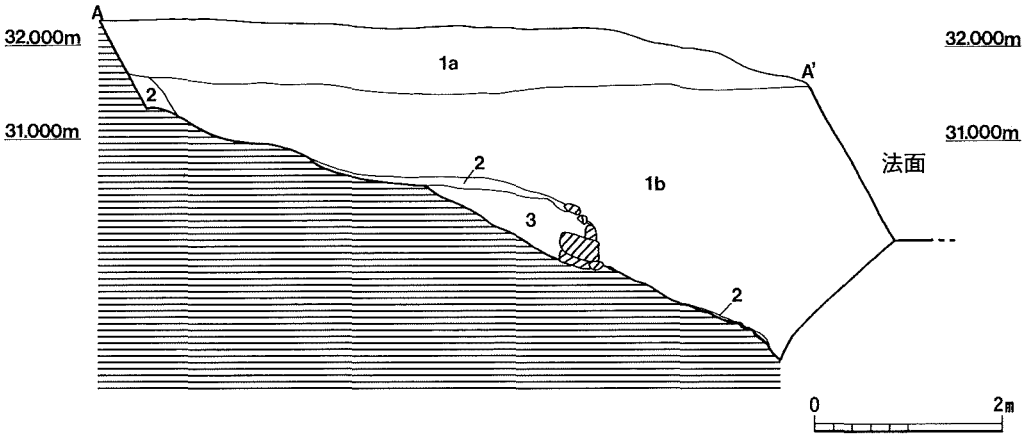
第54図　トレンチ配置図（Ｓ＝１/200）

遺物については，流れ込みと考えられる中世の石鍋片や龍泉窯系青磁碗の破片が数点出土した。これらの遺物は武辺城跡や周辺遺跡との関連が考えられる。なお，聞き取り調査によると大正・昭和初期には小さな堤があり，その後，1960年代に林道や土地の造成が実施されていたようである。

（今里順一郎）

2　土　　層（第54・55図　図版26）

調査区は近世・現代において造成され，南西側は大きく撹乱を受けている。岩盤に重機による掘削の痕跡がみられた。比較的良好な堆積を示す北東側においても，造成土，石垣が確認されるのみである。

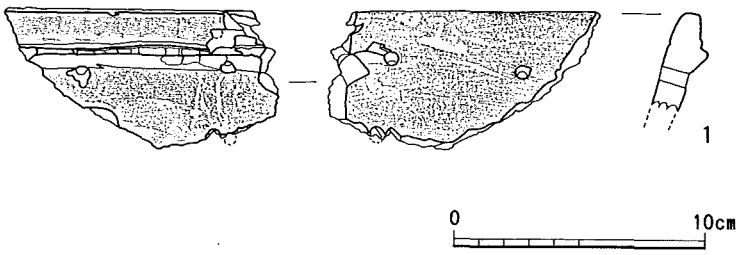


1－a　黄褐色砂質土　しまり強い。
1－b　黄褐色砂礫土　5～20cm大の砂岩礫を含む。　} 現代造成土
2　暗褐色砂質土　旧表土層。上部には炭化物を多く含む。ガラス片など出土。（旧表土）
3　黄褐色砂礫土　5cm前後の砂岩礫を含む。陶磁器片出土。（裏込め）

第55図　土層断面図（S＝1/80）

3　遺　　物（第56図　表19表　図版58）

口縁部から体部上半が残存し，外面上半に鍔が削りだされる。内面は体部から口縁にかけて直線的，外面は体部から鍔接続部にかけて直線的，口縁部にかけては直立する。鍔端部の平坦面は部分的に丸みを帯び，鍔は上方を向き，断面は台形を呈する。器面は外面の口縁部および体部に縦位のノミ痕が認められ，内面には使用による擦過痕がみられる。鍔下方の接続部に穿孔が2箇所，体部には欠損した穿孔が2箇所認められる。鍔下方の接続部，口唇部にススの付着が認められる。　（柴田妃三光）



第56図　遺物実測図⑮（S＝1/3）

番号	遺物名称	地区	技法・調整		色調		スス・炭化物		備考
			外面	内面	外面	内面	外面	内面	
1	石鍋	G区	ノミ痕／使用擦過	使用擦過	黒	黄灰	○		滑石製　穿孔あり

第19表　遺物観察表⑬（G区）

V まとめ

3年次におよぶ調査を地区ごとにまとめてみたい。

A区は，標高が低い竹辺D遺跡との境界付近で河川跡や溜井，暗渠，ピット群が検出された。しかし，それらの遺構は近・現代のものであった。遺物は，18世紀以降の陶磁器類が中心だが，12世紀中葉からの白磁皿，青磁碗などの輸入陶磁器が点数は少ないながらも出土した。他の遺物の出土数も少なく，西曲輪斜面下の当時の状況を推察することはできない。A区上部のB・G区においても昭和30年代の炭窯跡が2基検出されたが，武辺城関係の遺構は検出できなかった。

C区は，4箇所の平場が確認され，各平場から遺構が検出された。下段にある平場7からは，石列や3基の不明遺構が検出され，簪や絵唐津の皿，片口鉢，龍泉窯青磁片等が出土した。片口鉢には成人骨が火葬した状態で埋葬されていた。程度のよい残存部を抽出したような状態であったため，改葬後に新たに埋葬したものと思われる。片口鉢は17世紀前半から生産されているため，近世以降のものであろうと推察される。この平場は斜面からの湧水が伏流水となり谷部（D区）へ流れ込んでいる。平場7の上部の平場6からは溝や土壙が検出できたが性格，時期等は把握できなかった。C区斜面を形成している地質は，玄武岩と方形に割れる砂岩層が連続し広がっている。表土掘削後に露頭した岩が階段状を呈していたが，周囲の状況から自然地形と判断した。谷部床面から平場7へとつながる岩には，矢穴跡が確認できたため玄武岩の岩盤が石切り場など，何らかに使用されていたと考えられる。斜面中腹部に段違いに並列する平場4・5からは，14基の柱穴が検出された。この平場は敵が伝大手から侵入してきた際，真上から攻撃できる最適の場所に造成構築されており，城関係の遺構かと考えられた。しかし，非常に狭小なことと一端守勢に転じた場合，逃げ場がないことから，城の縄張り的機能ではなく，他の用途として利用されていたと推察される。平場4には8基の柱穴が検出された。簡単な1間×1間の掘立小屋を建てる際，補強用として支えを二重にしたと推察されるが，詳細な建物構造等は不明である。

D区は，5列の石列が検出された。流れ込みと思われる遺物が少数出土したのみで石列自体の構築時期，目的等は判明しなかった。この山域は湧水が多く武辺城がある古城山周囲には溜め池が点在している。調査区でもA区とC区に湧水地点があり，D区には「午の坂池」と呼ばれる溜め池が伝大手筋にある。それらのことから考えられることとして，①水路②谷を横断するための通路と水路③隣接する溜池「午の坂池」への土砂流入防止用④水曲輪⑤水確保のための貯水路等々あるが，調査報告書での事例研究の把握ならびに今後の類似遺構の検出を待ちたい。

E区は近世～現代の墓域として利用されていた。6箇所の平場が造成され，29基の墓壙が検出された。その内の3基から甕棺での埋葬が確認された。遺物は，人骨の他，18世紀以降の陶磁器が中心で古銭やキセル，簪も出土した。他の墓壙内からは墓石も確認された。地域住民からの聞き取り調査で昭和期に一部改葬されたことや主に桶に埋葬していたことなどが判明したが，詳細は不明である。

F区は一つの土壙が検出されたのみで，陶磁器類の遺物は出土しなかった。この地は炭坑のボタ廃棄場として利用されており，コンクリート基礎などの昭和時期の炭坑関係の遺構が検出された。

今回の発掘調査は，東西800m，南北400mという広大な城域の西側部分で，西曲輪の延長上と南曲輪の通路部，そこに挟まれた谷部であったが，武辺城が機能していた15・16世紀の遺構や遺物はほと

んど検出できなかった。城域は広大であるため，防御に必要な地点を重点的に固めることで最小の兵力で最高の防御効果を持たせることに領主は力を注いだと考えられる。主曲輪と南曲輪の通路的尾根であるＦ区は主曲輪からいかに素早く移動できるかに重点が置かれ，南曲輪の縄張りを充実させ，兵を常備させることで伝大手とされる谷部や南部を守り，海上からの敵の来襲も防いでいたのであろう。西曲輪から主曲輪へは，途中何本かの堀切で一気の来襲を防いでいる。また，高低差もあり，登ることが困難な地形であるので兵力はあまり割く必要はない。西曲輪主体部（調査区外）に何らかの施設を造っていたとすると，そこから馬の背状に延びている尾根には人為的な構築物はいらなかったのではないだろうか。標高が約60mあるため斜面の木を除去すると展望は非常によい。

以上のことより，当時の兵力等は不明であるが，広大な城を守るために主曲輪や北曲輪，南曲輪等の要所に主力をさいたため，調査区において遺構がなかったと考えられる。

今回の調査結果では武辺城域全体の構造把握はできなかったが，今後，西曲輪中心部や南曲輪が調査され，周辺遺跡との関係が検討されることで，武辺城の性格が明らかになるのではないだろうか。

（今里順一郎）

【参考文献】

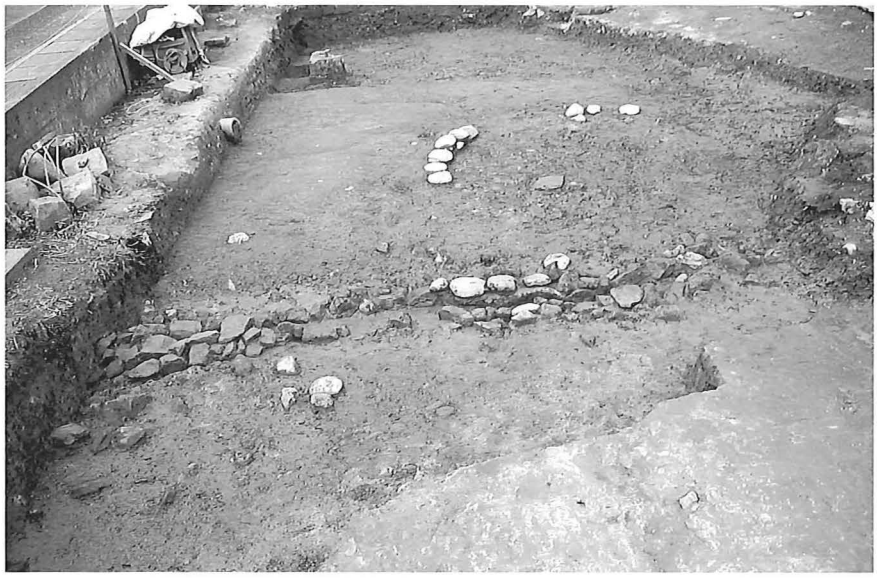
長崎県　1974『表層地質図（土地分類基本調査）』
町田洋・太田陽子・河名俊男・森脇広・長岡信治　2001『日本の地形７　九州・南西諸島』東京大学出版会
瀬野精一朗　1950『鎮西御家人の研究』吉川弘文館
外山幹夫　1990『松浦党のすがた』松浦市
古泉弘　1987『考古学ライブラリー48　江戸の考古学』ニュー・サイエンス社
東中川忠美　1987「肥前における近世の大甕」『東アジアの考古と歴史　下』岡崎敬先生退官記念論集
古泉弘　1990『江戸を掘る　近世都市考古学への招待』柏書房株式会社
鈴木公雄　1990『出土銭貨の研究』東京大学出版会
矢部倉吉　1992『改訂増補　古銭と紙幣　収集と鑑賞　和同開珎から現行貨幣まで』金園社
大塚初重他　1994『八百八町の考古学　シンポジウム　江戸を掘る』山川出版社
滝沢武雄　1996『日本歴史叢書　日本歴史学会編集　日本の貨幣の歴史』吉川弘文館
江戸遺跡研究会　2000『江戸遺跡研究会編　江戸文化の考古学』吉川弘文館
大橋康二　2004『考古学ライブラリー55　肥前陶磁』ニュー・サイエンス社
日本貿易陶磁研究会　1982『貿易陶磁研究　No.2』
九州近世陶磁学会　2000『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会10周年記念
九州近世陶磁学会　2007『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通（中国・四国・関西編）　第17回九州近世陶磁学会　資料』
中島恒次郎　2003「肥前国西部の食器－彼杵郡・松浦郡」『西海考古』第５号
九州近世陶磁学会　2006『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通（九州編）　第16回九州近世陶磁学会資料』
鈴木康之　1998『草戸千軒町遺跡出土の滑石製石鍋』草戸千軒町遺跡調査研究報告　2　広島県立歴史博物館
山本信夫・山村信榮　1997「[10] 九州・南西諸島１　北部九州」『国立歴史民俗博物館研究報告　第71集』国立歴史民俗博物館
下関市立大学　2002『九州・沖縄における中世貨幣の生産と流通　1999～2001年度科学研究費補助金基盤研究(C)』
久村貞男　1996『武辺城跡発掘調査報告書（第１次）』平成７年度佐世保市埋蔵文化財発掘調査報告書　佐世保市教育委員会
久村貞男編1997『武辺城跡発掘調査報告書（第２次）』平成８年度佐世保市埋蔵文化財発掘調査報告書　佐世保市教育委員会
長崎県波佐見町教育委員会　1998『三股青磁窯跡』波佐見町文化財調査報告書　第10集
東京都埋蔵文化財センター　2000『汐留遺跡　旧汐留貨物駅跡地内の調査』東京都埋蔵文化財センター調査報告　第79集
太宰府市教育委員会　2000『大宰府条坊跡ＸＶ』－陶磁器分類編－　太宰府市の文化財　第49集
本田秀樹編2002『森岳城跡』長崎県文化財調査報告書　第166集　長崎県教育委員会
久村貞男編　2002『平戸藩御用窯総合調査報告書』佐世保史談会
筑紫野市教育委員会　2003『原田第１・２・40・41号墓地　上巻』原田駅前土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告１
櫻木晋一　2003「第３節　原田第１・２・40・41号墓地出土の六道銭」『原田第１・２・40・41号墓地　中巻』原田駅前土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告１　筑紫野市教育委員会
財団法人北九州市芸術文化振興財団　埋蔵文化財調査室　2004『真光寺墓地跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書　第320集
櫻木晋一　2005「第５章　新馬場跡２区出土貨幣について－清朝銭を中心に－」『小倉城御花畠跡・新馬場跡』大門木町線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２　財団法人北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室
櫻木晋一　2005「(11) 長崎奉行所跡の出土銭貨」『長崎奉行所（立山役所）跡　岩原目付屋敷跡　炉粕町遺跡』長崎県文化財調査報告書　第183集　長崎県教育委員会
川内野篤編　2005『針尾城跡』平成16年度佐世保市埋蔵文化財発掘調査報告書　佐世保市教育委員会
川内野篤編　2007『福井洞窟範囲確認調査報告書』平成18年度文化財調査報告書　佐世保市教育委員会

調査前風景（C区）

近世墓検出状況（E区）

TP．5土層状況（D区）

図版1　範囲確認調査



暗渠・井戸検出状況

井戸完掘状況

遺物出土状況

図版 2　A 区遺構・遺物・検出状況

平場６・７調査前風景

SX-１～３　配石状況

SC-１（人骨）検出状況

図版３　Ｃ区遺構・遺物検出状況①

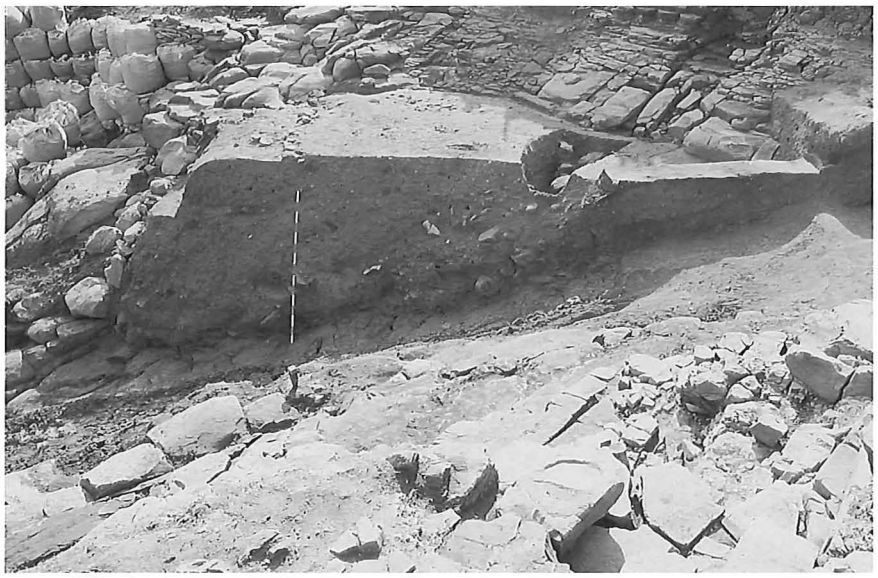
平場６　検出状況

遺物出土状況

平場４・５全景

図版４　Ｃ区遺構・遺物検出状況②

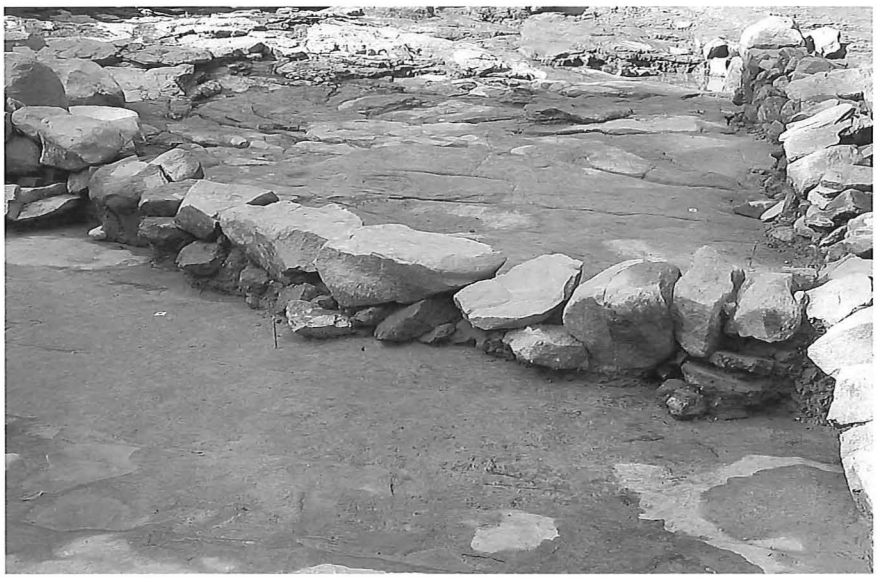
平場 4　Pit 検出状況



平場 7　土層断面

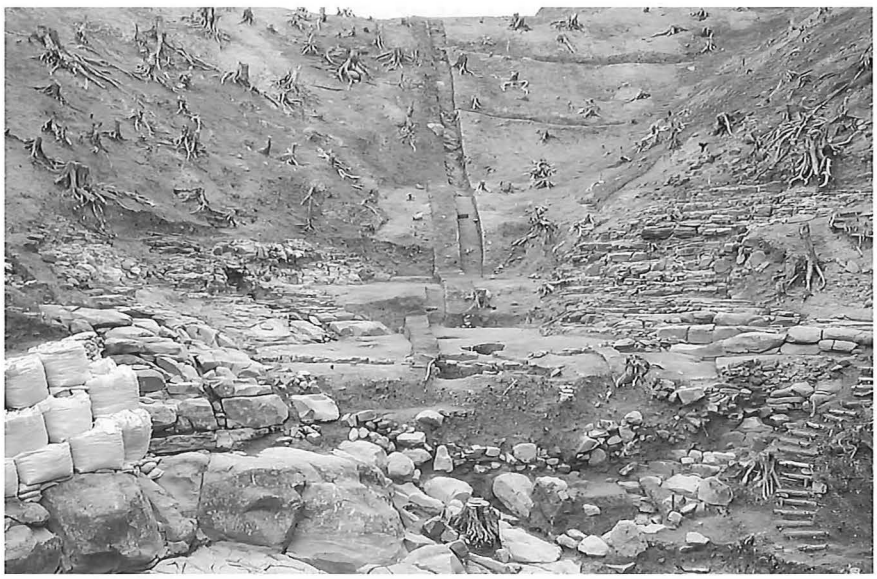
平場 6・7　岩盤露出状況

図版 5　C 区遺構・土層・完掘状況



SF-6　完掘状況

D区　完掘状況



C・D区間　岩検出状況

図版6　D区遺構検出状況

調査区風景

SC-5　甕出土状況

SC-15　完掘状況

図版7　E区遺構・遺物検出状況

暗渠（A区）

SR-1・2　土層状況（A区）

SK-1　遺物出土状況（A区）

北西斜面状況（B区）

炭窯跡（B区）

北西斜面（B区）〔土層断面図②〕

尾根平坦部表土掘削後状況（B区）

尾根平坦部（B区）〔土層断面図④〕

図版8　A・B区遺構・遺物・土層・調査区風景

平場７　SX-１

平場７　SX-２・３

蔵骨器検出状況

遺物出土状況

西斜面土層状況

調査風景

Ｃ・Ｂ区遠景（Ｅ区より）

湧水地点

図版９　Ｃ区遺構・遺物・調査区風景

平場７　SF－１・２　配石状況（Ｃ区）

平場６　完掘状況（Ｃ区）

索道稼動状況（Ｂ・Ｃ区）

Ｃ・Ｄ区間　矢穴痕がある石

SF－４（Ｄ区）

SF－８（Ｄ区）

北東部（Ｄ区）〔土層断面図⑦〕

SF－６土層状況（Ｄ区）

図版10　Ｃ・Ｄ区遺構・調査区風景

TP. 1　東壁土層状況（D区）

SC内　墓石検出状況（E区）

SC-25　完掘状況（E区）

SK-4　（F区）

F・C区　完掘状況（東南より）

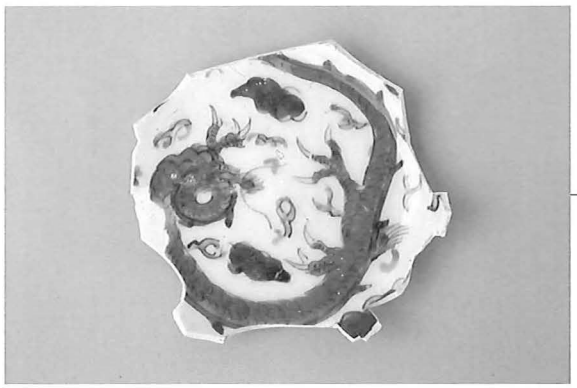
尾根部（E・F区）〔土層断面図⑧〕

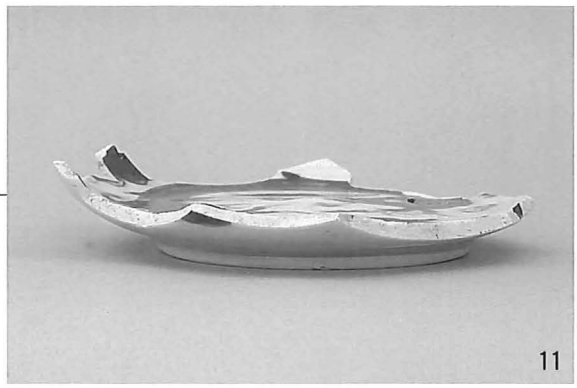
E・F区　完掘状況（北より）

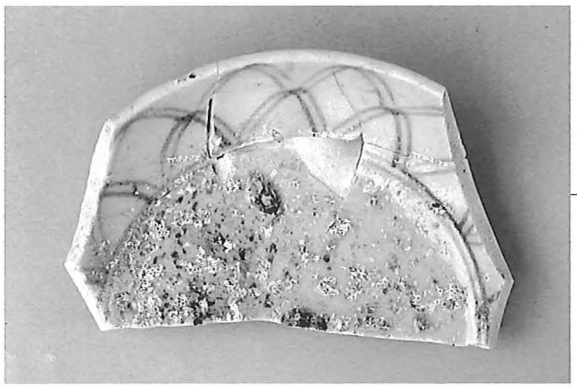
F区　完掘状況（南より）

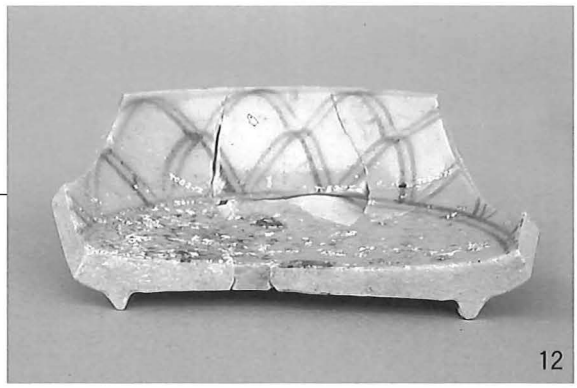
図版11　D・E・F区遺構・調査区風景

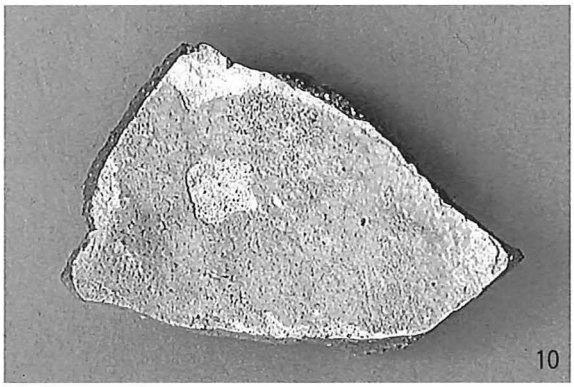
図版12　A区出土遺物①

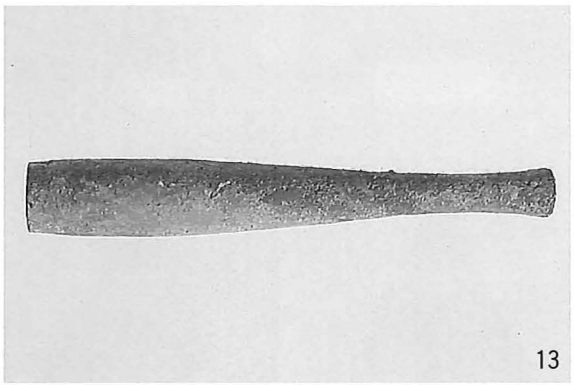




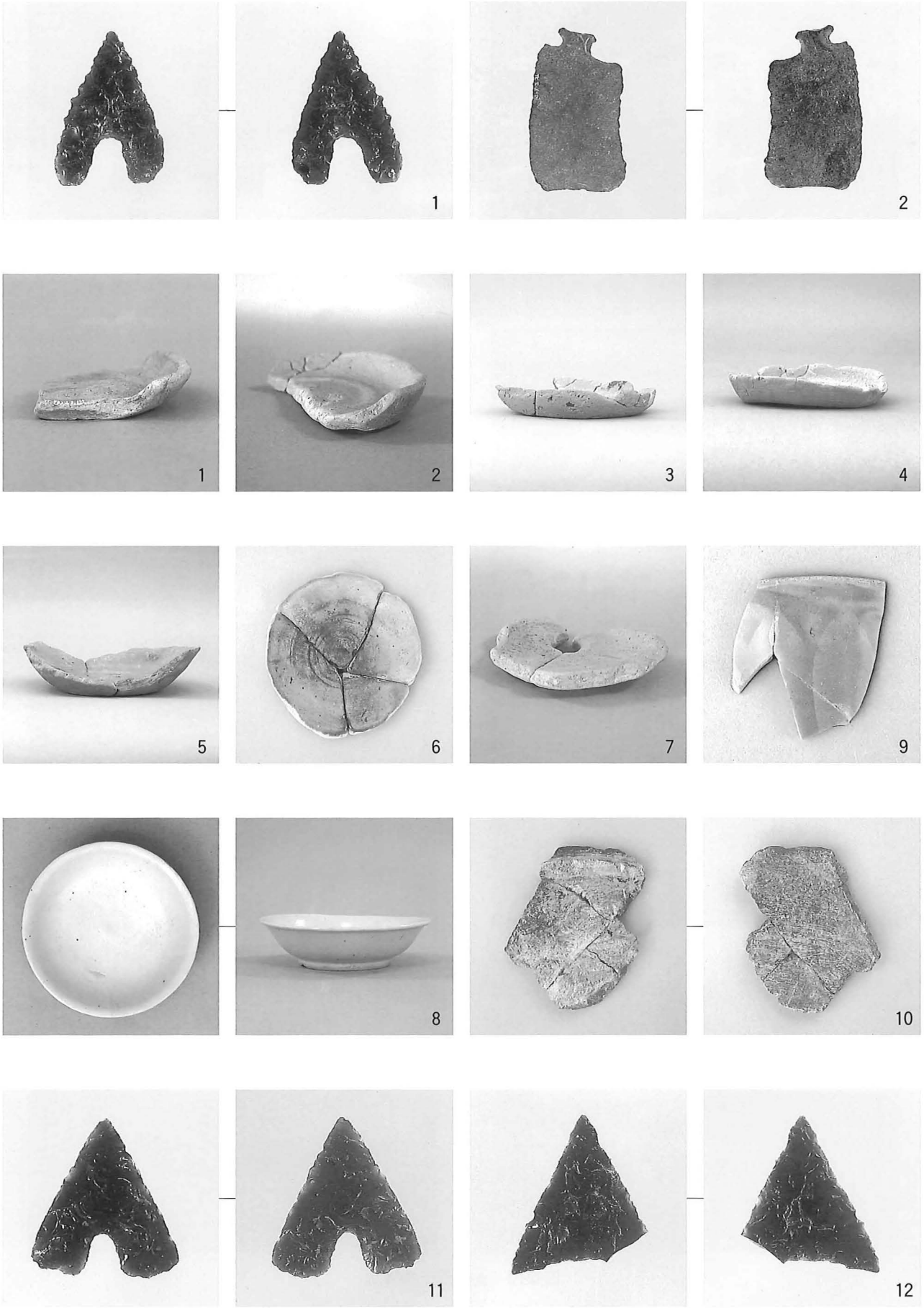




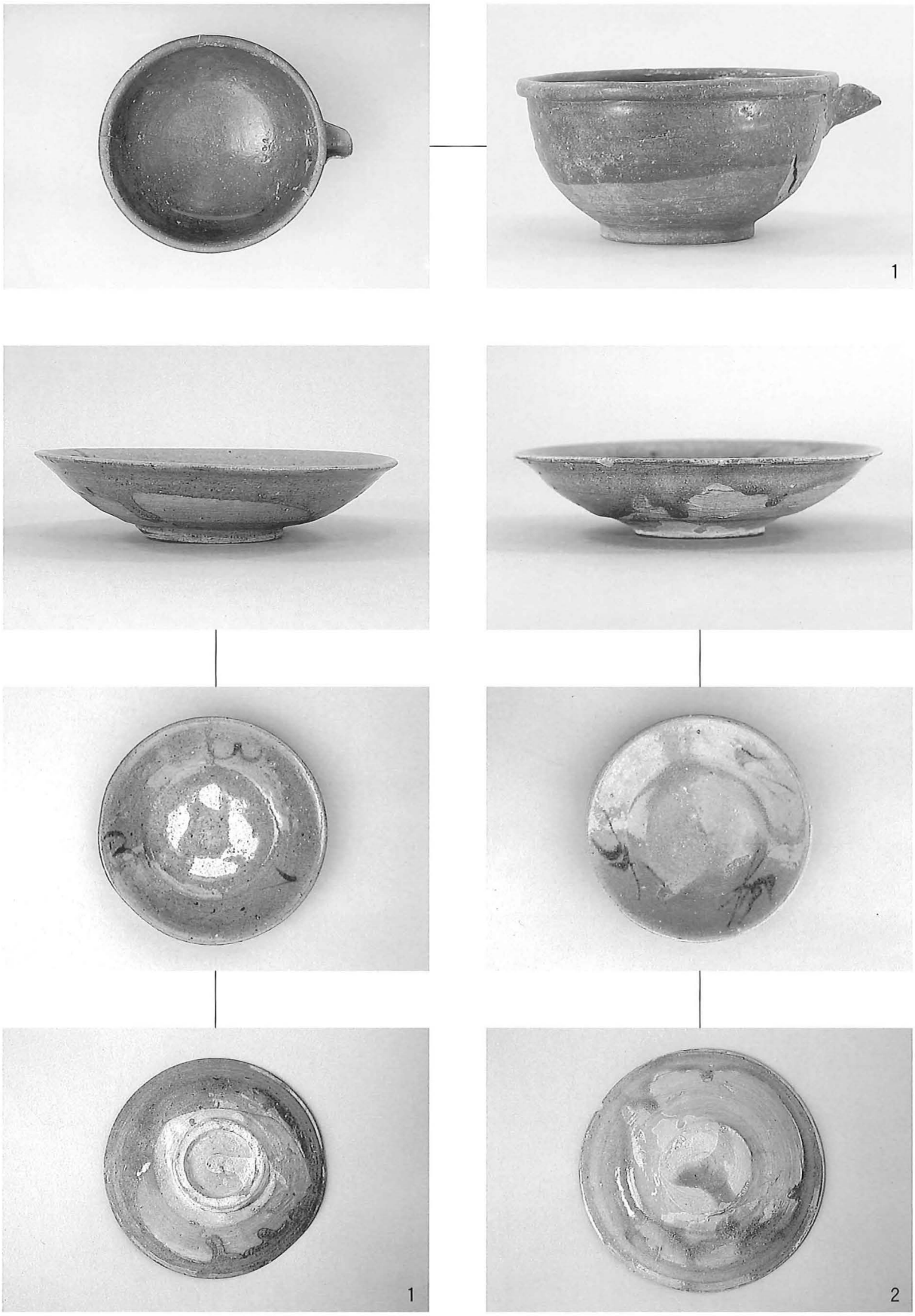




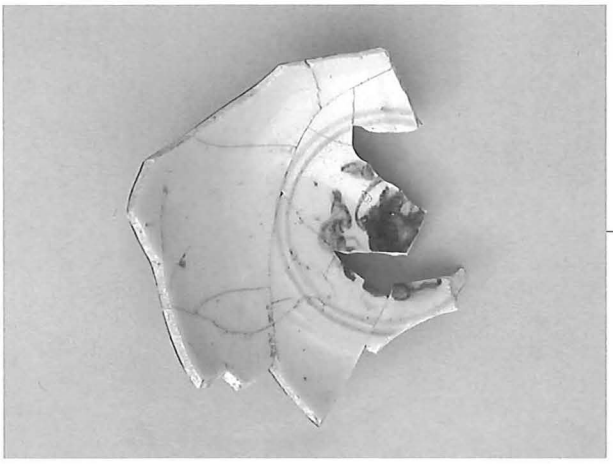
図版13　A区出土遺物②

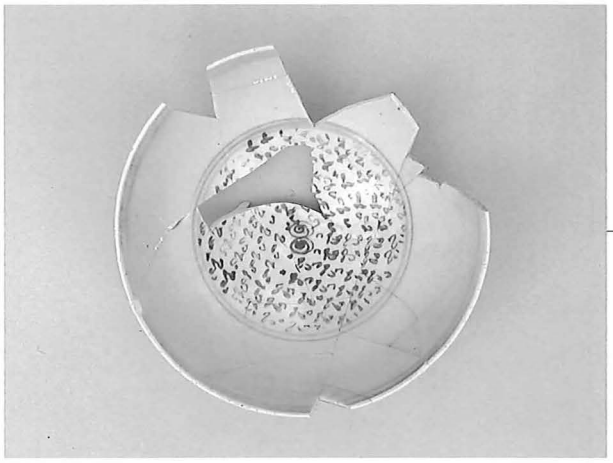


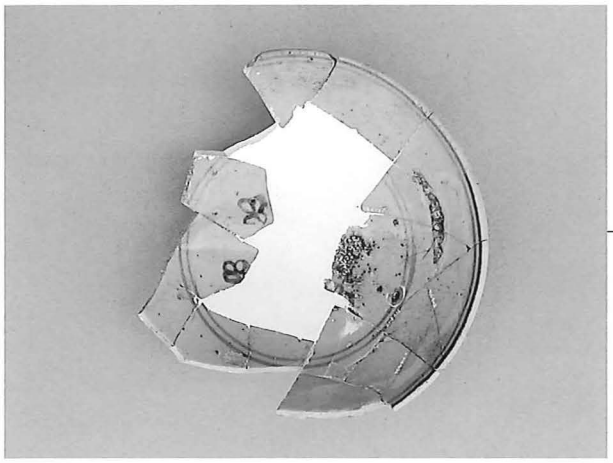
図版14　B・C区出土遺物



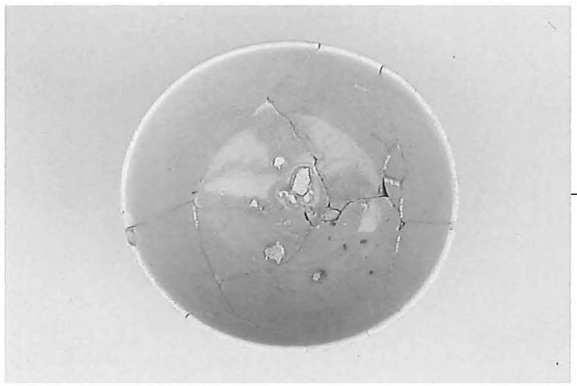
図版15　C区出土遺物①

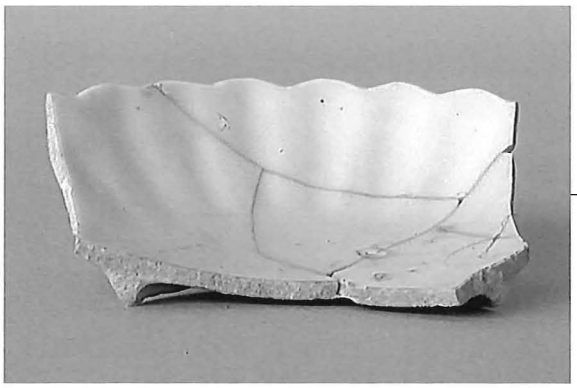


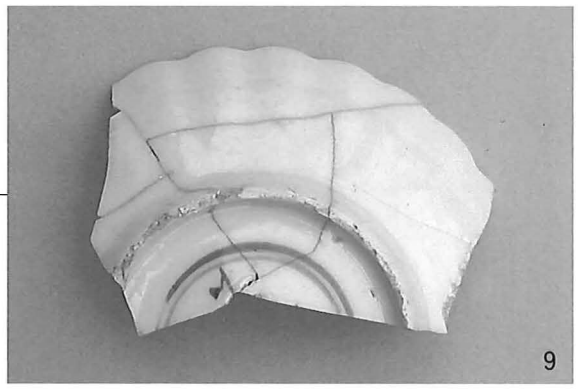


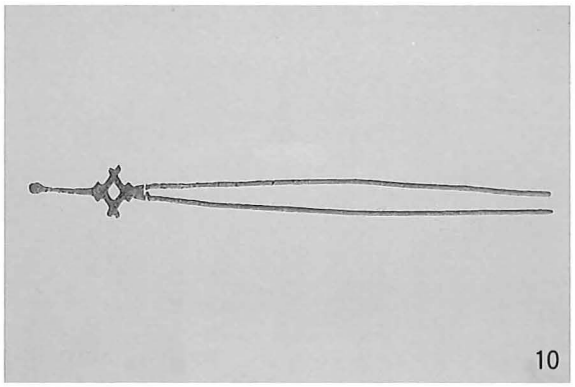


図版16　C区出土遺物②

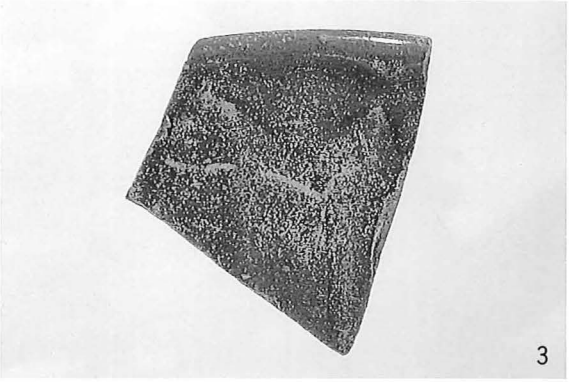


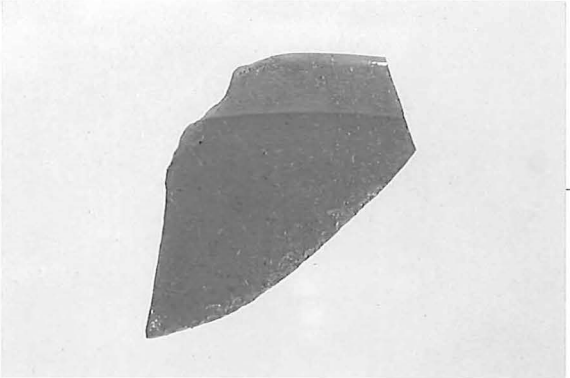


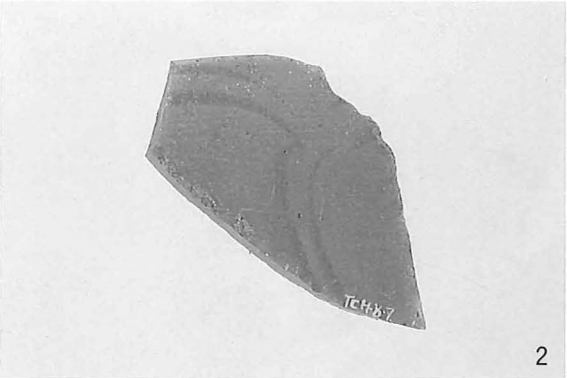


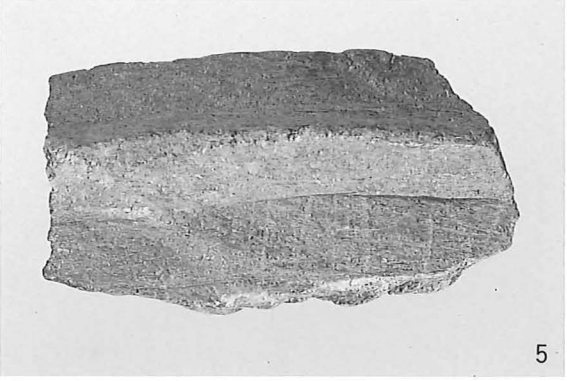


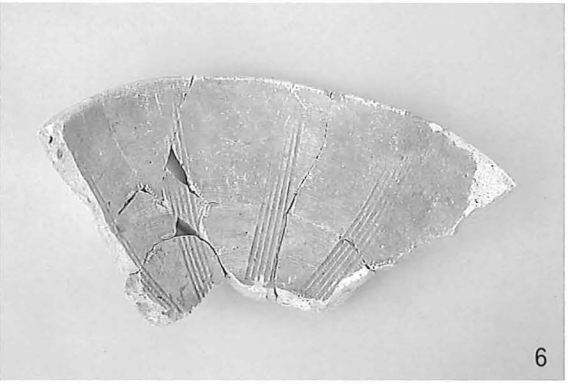
図版17　C区出土遺物③



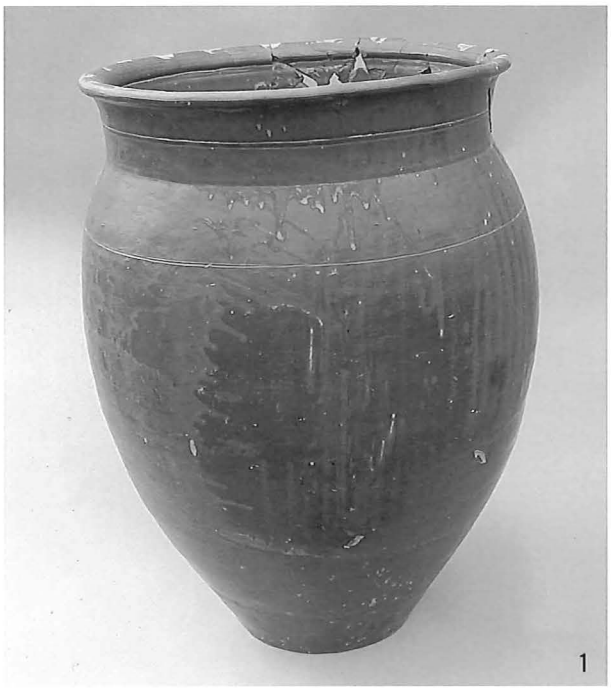


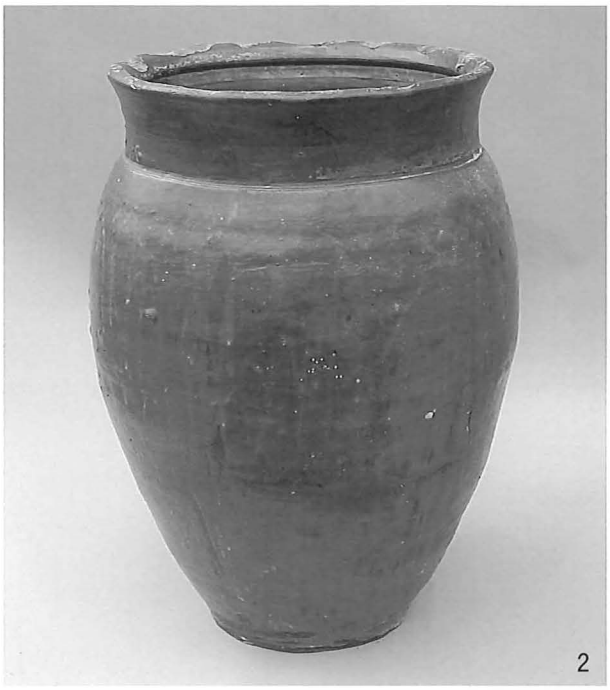


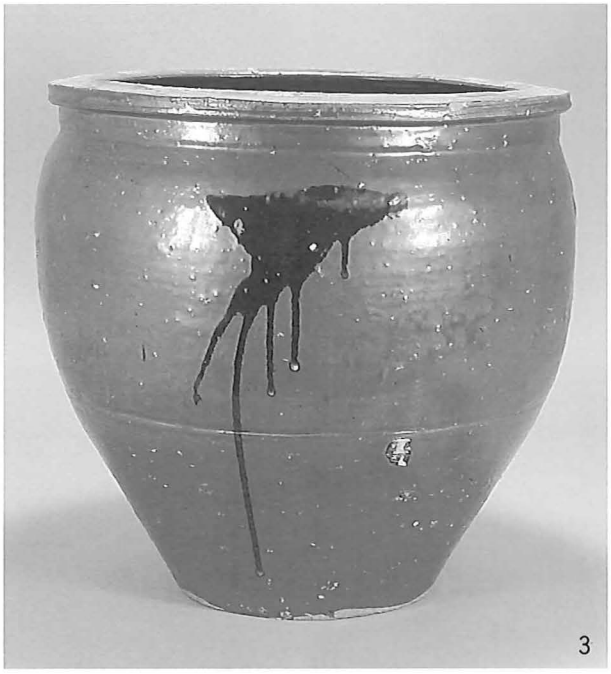




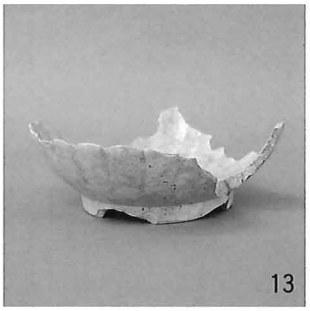
図版18　D区出土遺物

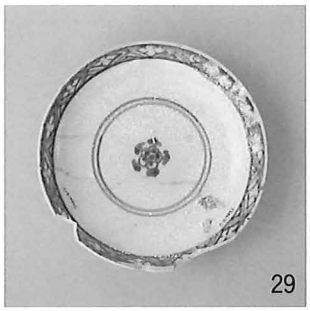




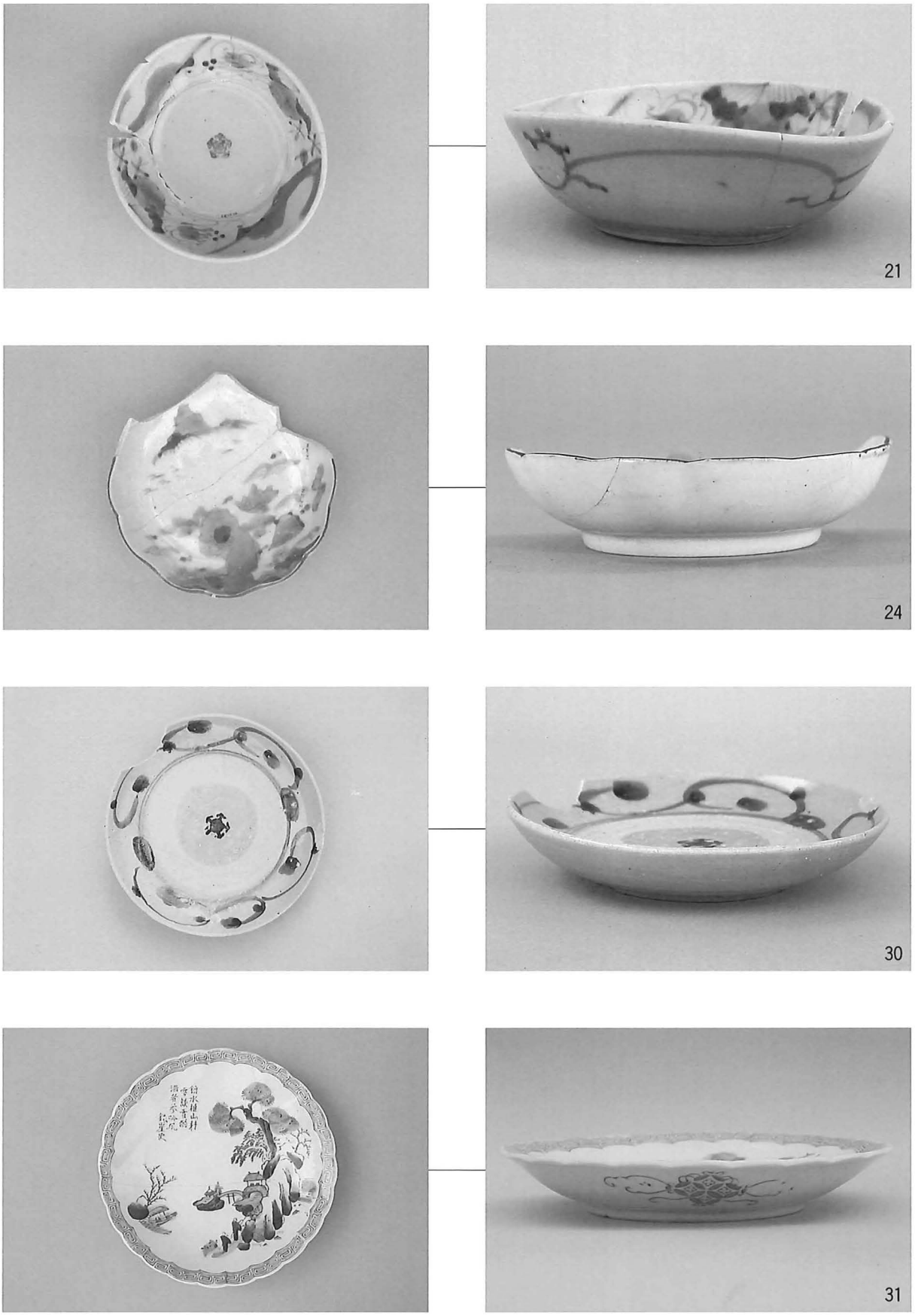


図版19　E区出土遺物①

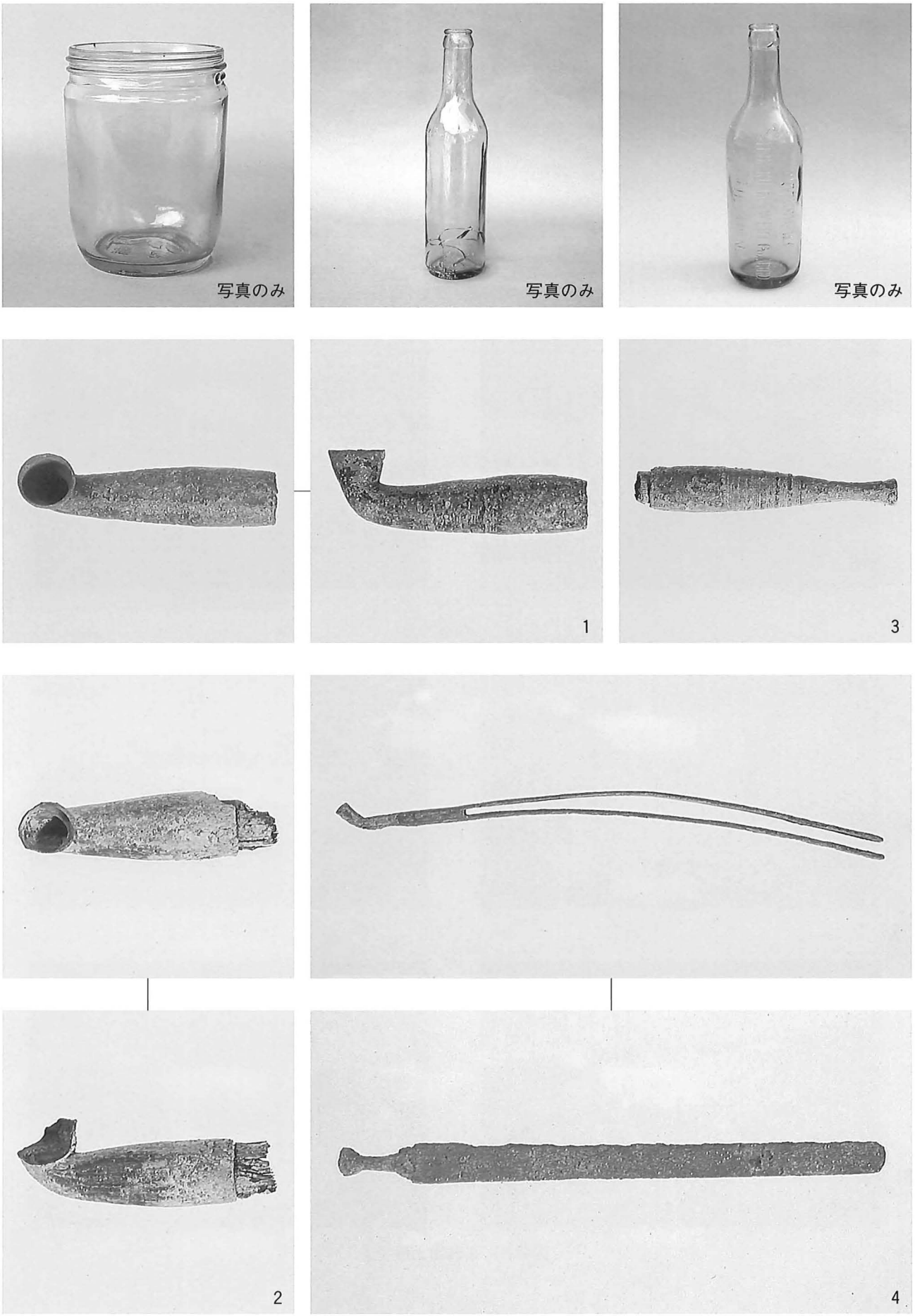




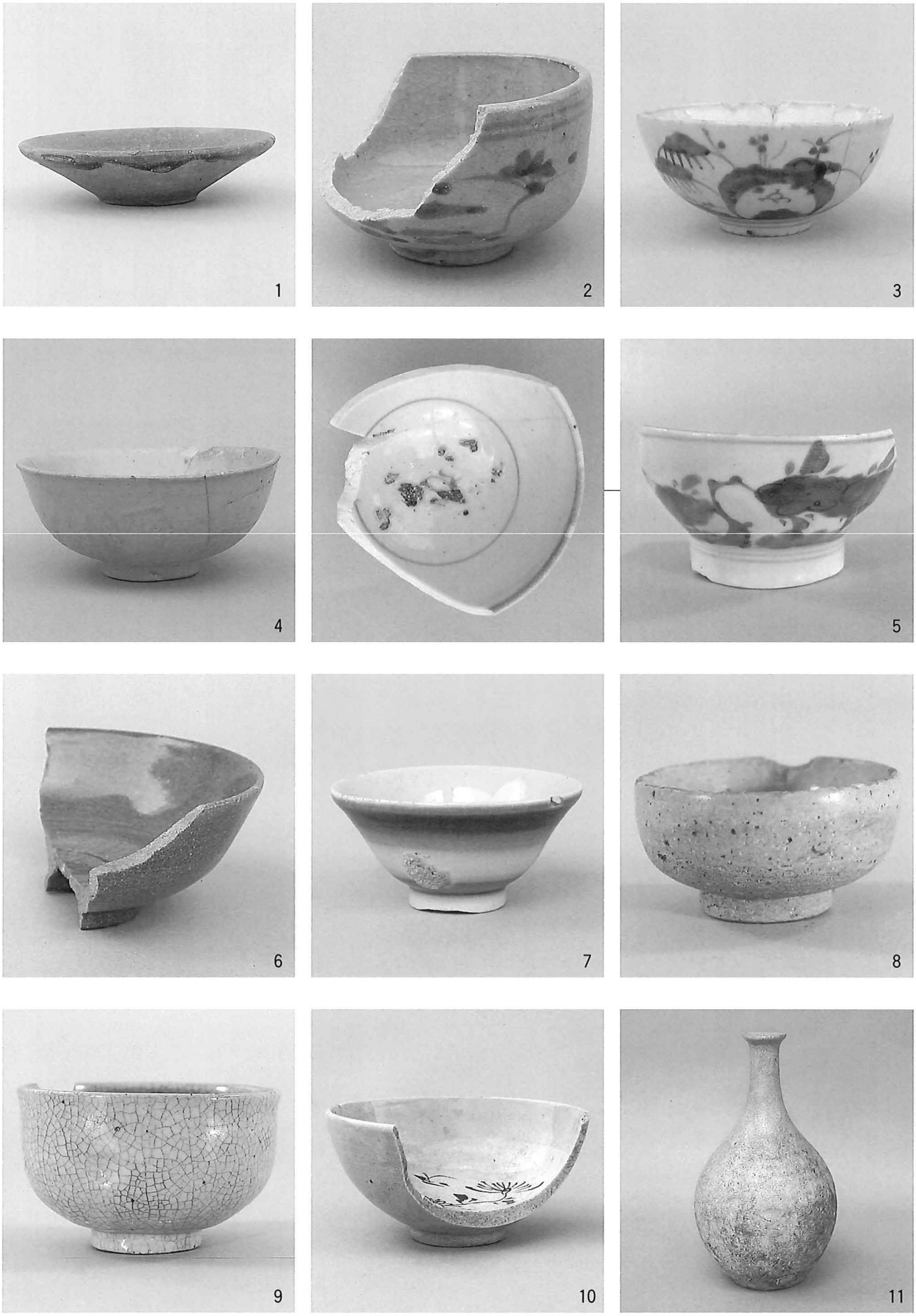
図版20　E区出土遺物②



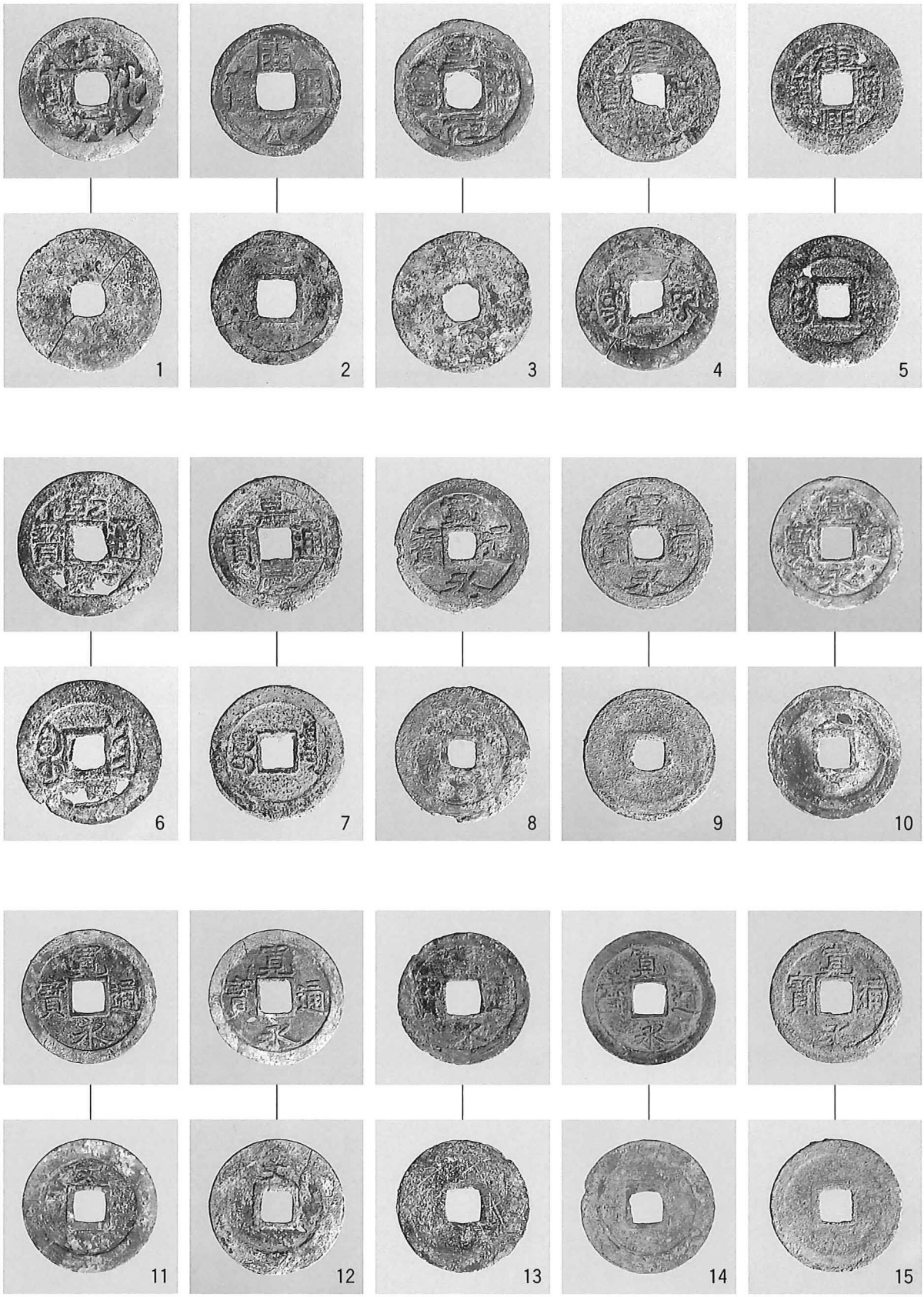
図版21　E区出土遺物③



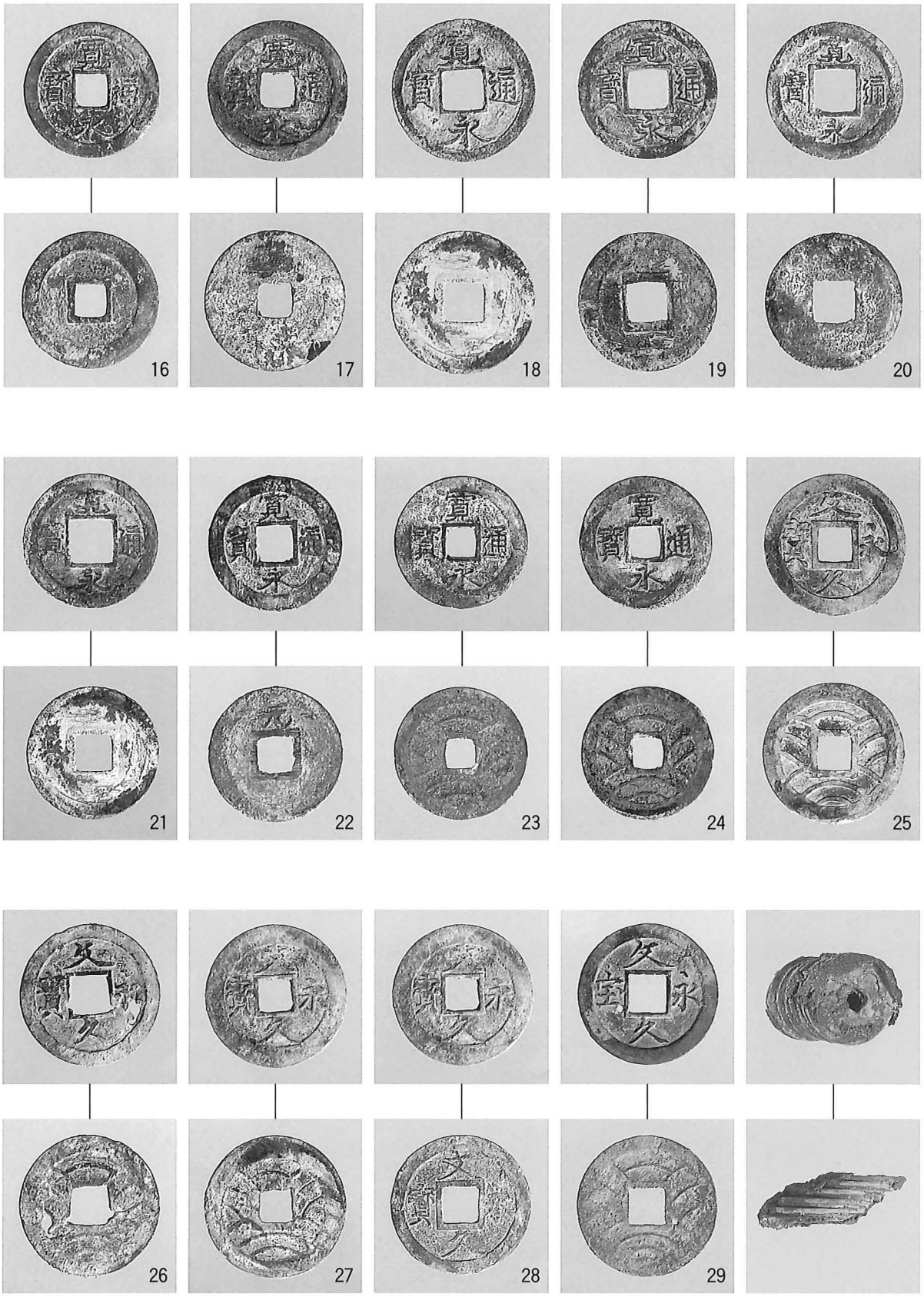
図版22　E区出土遺物④



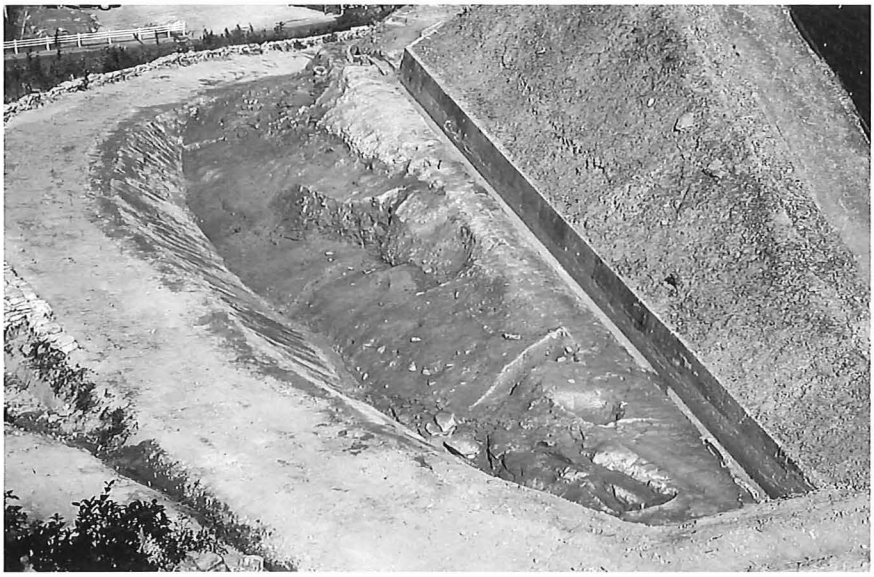
図版23　E区出土遺物⑤



図版24　E区出土銭貨①



図版25　E区出土銭貨②

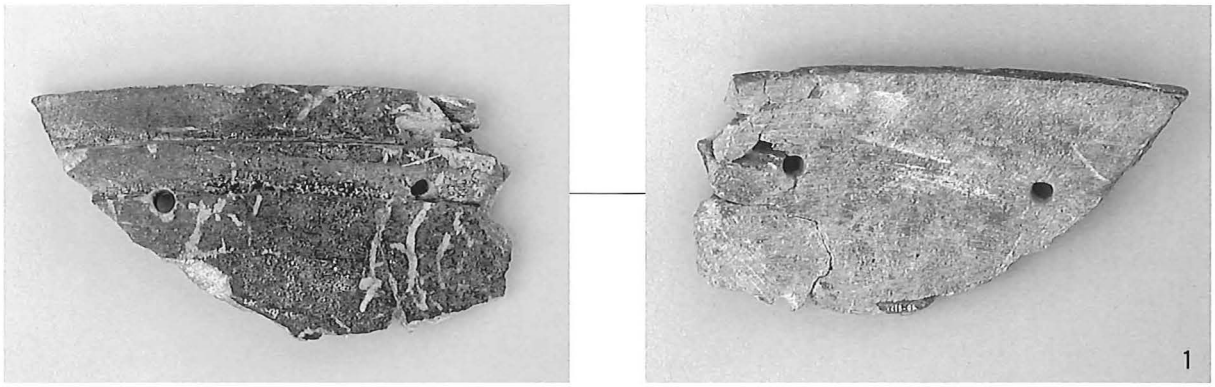


完掘状況

トレンチ（A-A’）東壁土層

遺物出土状況

図版26　G区調査区・土層・遺物出土状況



G区出土遺物

A区

B区

B区

B・C区

C区

C・D区

図版27　G区出土遺物・調査風景

堀切

主曲輪下　南西面状況

主曲輪下　石垣

竪堀

十二番札所裏　石塔群

北西部板碑

図版28　調査区外の武辺城跡の遺構

門前遺跡

竹辺Ｃ遺跡

竹辺Ｄ遺跡

松浦丹州守盛の墓

新田中世墓址群

阿弥陀堂　石塔群

新豊寺跡石塔群

三丸館跡堀切と土塁

図版29　武辺城跡周辺の遺跡

Ⅵ　附編　長崎県佐世保市武辺城跡出土の人骨について

分部　哲秋*，佐伯　和信*，岡本　圭史*

はじめに

長崎県佐世保市竹辺町に所在する武辺城跡は，2005（平成17）年１月から2006（平成18）年10月にかけて一般国道497号佐々佐世保道路（西九州自動車道）建設工事に伴い長崎県教育庁佐世保教育事務所により発掘調査が行なわれた。発掘区域は広大な範囲にわたるものであるが，発掘経過中に２つの発掘区（C，E区）から近世以降に所属する４個体分の人骨が検出された。

これらの出土人骨について性別および年齢の同定を始めとして，形質的特徴などの自然人類学的調査を行ったので，その結果を報告し，記録として残しておきたい。なお，遺跡の位置は，図１に示している。

資料及び方法

武辺城跡から出土した人骨は，表１に示すように計４体であるが，C区においては平場７より石列２列などの遺構の他に墓壙１基が検出され蔵骨器に埋葬された火葬骨（SC－１号人骨）が出土した。E区においては平場８～12より総数29基の墓壙が確認されて，その内平場８からは蔵骨器に埋葬された幼児骨（SC－５号人骨）が出土し，平場12からの１体分として持ち込まれた人骨は，非火葬骨（SC－26－１号人骨）と火葬骨（SC－26－２号人骨）の２体分が存在した。

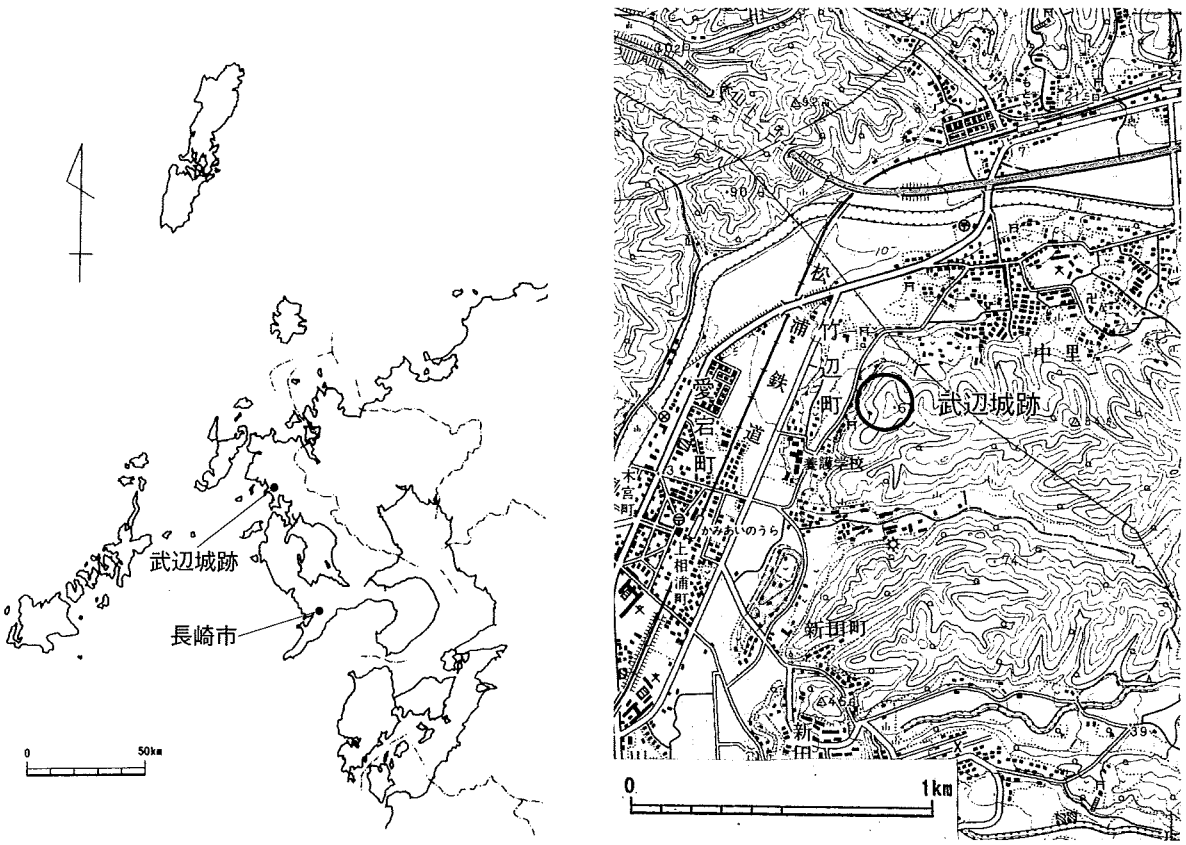
性別の判別できるものでは，成人骨に関しては寛骨が欠損し，また，頭蓋の遺存状態も不完全であるので四肢長管骨の形態より性別を同定した。未成人骨の年齢に関しては，主として藤田（1965）による現代人の歯の萌出時期を参考に推定を行っている。その内訳は，表１に示すように３体が成人骨，１体が幼児骨と推定され，内２体が火葬骨であった。人骨の所属時代については，別項に示されているように考古学的所見から近世から明治・大正にかけての墓壙群から出土したものであるが，改葬の可能性も高く，正確な人骨の所属時代は不明である。計測法に関しては，計測はMartin-Saller(1957)の方法で行ったが，脛骨の横径については，Vallois（1938）の方法を採用して計測した。

E区出土の幼児人骨の形態的特徴の検討に際しては，同年齢の長崎県国崎縄文人（分部；1995），成人骨の研究で縄文人の継続とされる長崎県五島列島出土の浜郷弥生人（分部；1995），現代人（分部；1995）の計測成績を用い，また，同じくE区出土の成人骨の大腿骨については，津雲縄文人（清野，平井；1928），大陸からの渡来系とされる北部九州地域弥生人（中橋他，1989），鎌倉材木座中世人（香原志勢，1956），畿内現代人（平井，田幡；1928）の計測成績を用いて直接比較した。

表１．武辺城跡出土人骨資料

発掘区	人骨番号	時代	性別	年齢	備考	蔵骨器の有無
C区平場７	SC-１号	江戸時代以降	不明	成人	火葬骨	有（片口鉢）
E区平場８	SC-５号	江戸時代以降	不明	幼児（３歳）		有（唐甕）
E区平場12	SC-26-１号	江戸時代以降	男性	成人		無
E区平場12	SC-26-２号	江戸時代以降	不明	成人	火葬骨	無

＊長崎大学 大学院医歯薬学総合研究科 生命医科学講座 肉眼形態学分野



(S＝1/25,000)

図1　武辺城跡位置図

所　　見

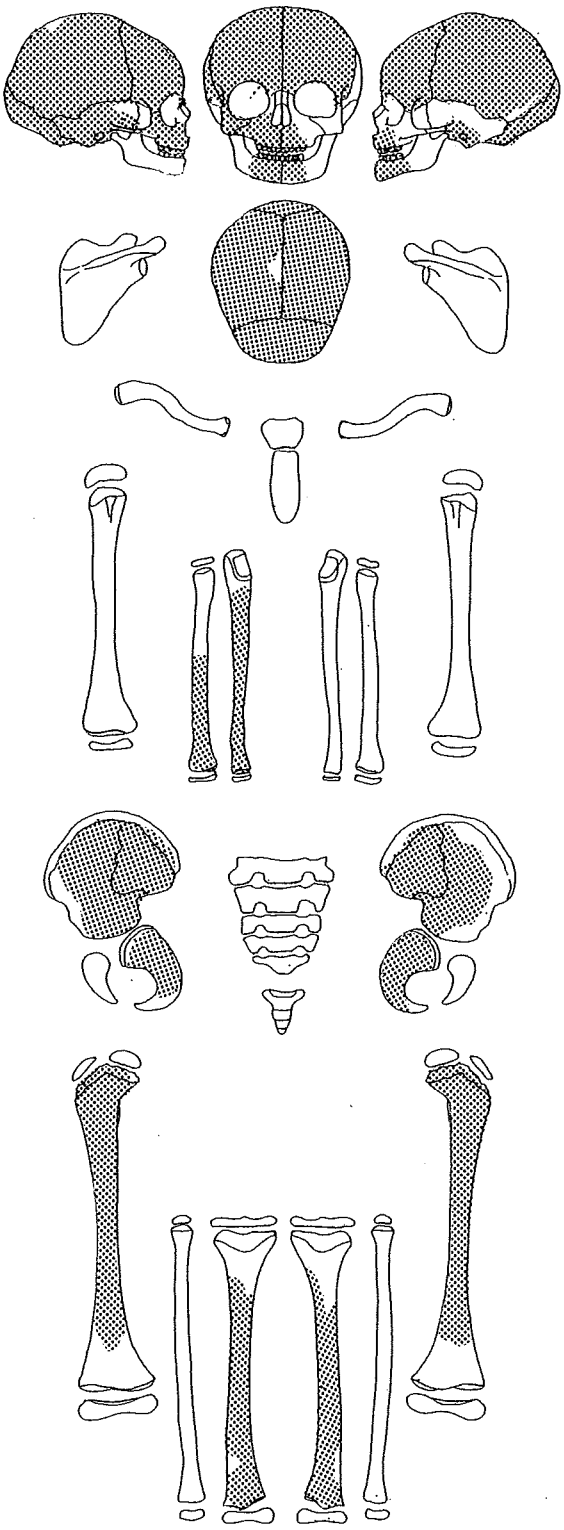
出土人骨ごとに所見を記載するが，人骨の遺存状態は図2に示している。また，四肢骨の個体別計測値は文末の附表1～4に一括して掲げた。

SC-1号人骨（性別不明，成人）

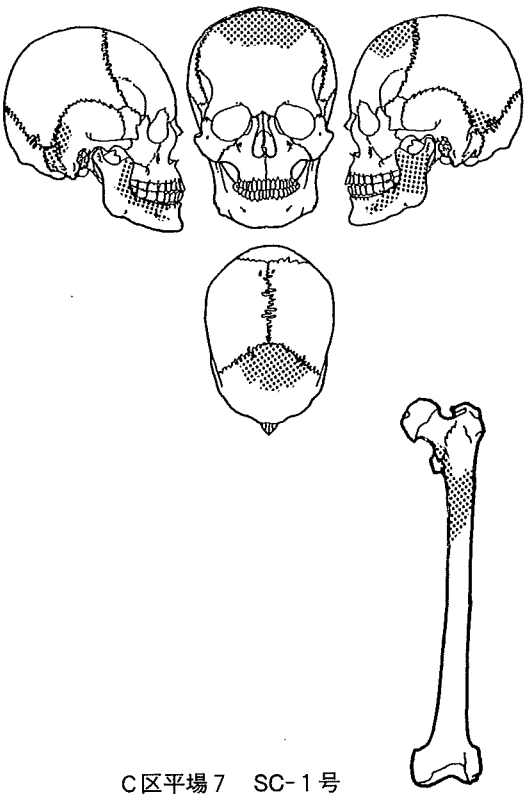
本人骨は片口鉢に埋葬されていたもので頭蓋及び四肢骨の一部が遺存し，いずれも火を受けており，色は青白色を呈している。

骨種及び部位が判別できる骨は，頭蓋では前頭骨の後部，右側頭骨と左頭頂骨の一部，右側下顎体と左側の下顎体から下顎枝にかけてである。特に左側下顎枝には高温の火を受けたものと推測される萎縮と5条の亀裂が認められる。歯は遺存していない。四肢骨では左側大腿骨の骨幹近位部が遺存し，萎縮とともに短い多くの亀裂が認められる。

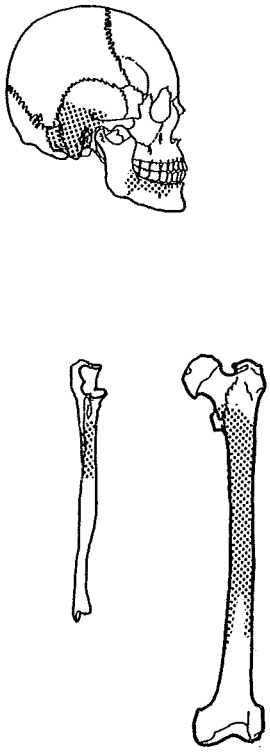
骨が火を受けて萎縮しているために骨の大きさからの性別の同定は不可能であるが，下顎の歯槽の形状から本人骨の年齢は，成人と推測される。また，骨の残存はごく一部であるが，砕片ではなく骨種の分かるものであり，かつ，全身の量からすると極めて少ない。したがって，火葬されたもののうち一部が蔵骨器に入れられたというよりは，後世において何らかの理由により掘り出された骨を再埋葬したものと考えた方がよさそうである。



E区平場8　SC-5号
（幼児，3歳，性別不明）



C区平場7　SC-1号
（成人，性別年齢不明）



E区平場12　SC-26-1号
（成人男性，年齢不明）

図2　人骨の遺存状態（アミ掛け部）

SC-5号人骨（性別不明，幼児；3歳）

本人骨は小型の甕から出土し，保存状態も比較的良好である。頭蓋は図2に示すように左側頬部と左右の下顎枝を除くほぼ全域の骨が遺存している。しかし，骨壁は薄く，それぞれの骨が分離してかなりの歪みが生じている。歯は乳歯が遺存しており，歯式で示すと以下のとおりとなる。

E区平場8区SC-5号歯式

$$\frac{m_2\ /\ /\ /\ /}{m_2\ m_1\ c\ i_2\ /}\ \Big|\ \frac{i_1\ /\ /\ m_1\ m_2}{/\ /\ c\ m_1\ m_2}$$ （／：不明）

残存した歯の咬耗度はBrocaの1度で，上顎の第二乳臼歯にも認められ，また，この歯の歯根も完成している。

四肢のうち上肢骨では右側の橈骨及び尺骨が，下肢骨では左右の寛骨の中の腸骨と坐骨，左右の大腿骨及び脛骨が遺存しており，また，肋骨の断片も7本残存している。保存状態も比較的良好である。

本人骨の年齢は，上顎の第二乳臼歯がすでに萌出し，歯根も完成しているので，3歳の幼児と推定され，性別は不明である。

本幼児骨から得られた大腿骨及び脛骨の計測値を縄文時代から現代の同年齢の成績と比較してみた。大腿骨の比較表は表2に示している。骨体中央部の周径（太さ）は成長期の骨格では数ヶ月の違いがあっても異なってくるので直接比較することは難しいので，形態を表す骨体中央部の断面示数で比較する。本示数は数値が大きいほど大腿骨骨体の後方への張り出しが強いことを現しており，成人骨では縄文人がもっとも大きい値を示し，現代に向かうとともに低下する傾向にある。幼児骨においてもこの傾向がうかがわれており，その中にあって本幼児骨の骨体中央断面示数は84.4と最低値を示している。

表2．幼児大腿骨計測値比較（性別不明，3歳，右，mm）

	武辺城跡E区平場8 SC-5 (近世以降)		国崎2号 (縄文)		浜郷 (弥生)		現代人 (近代)	
	N	M	N	M	N	M	N	M
1．最大長		—	1	《175》	4	175.8(L)	7	149.7
8．骨体中央周	1	41.0	1	38.0	4	40.8	7	35.9
8／2長厚示数		—	1	《21.7》	4	23.1(L)	7	24.1
6／7骨体中央断面示数	1	84.4	1	103.3	4	92.1	7	93.4

N：例数，M：平均値，《 》：推定値，(L)：左側

表3．幼児脛骨計測値比較（性別不明，3歳，右，mm）

	武辺城跡E区平場8 SC-5 (近世以降)		国崎2号 (縄文)		浜郷 (弥生)		現代人 (近代)	
	N	M	N	M	N	M	N	M
10．骨体周	1	40.0	1	40.0	4	39.8	7	33.9
10b．最小周	1	—	1	38.0	4	38.8	7	33.4
9／8中央断面示数	1	88.6	1	83.9	4	82.6	7	92.8

N：例数，M：平均値

次いで，脛骨の比較表を表３に示す。骨体中央部の周径（太さ）は大腿骨と同様の理由により比較は難しいので，形態を表す骨体中央部の断面示数で比較する。本示数は数値が小さいほど脛骨骨体の幅に対しての前後への径が大きく，扁平性が強いことを現しており，成人骨では縄文人がもっとも小さい値を示し，現代に向かうとともにこの傾向が弱まる。幼児骨においてもこの傾向がうかがわれており，その中にあって本幼児骨の骨体中央断面示数は88.6と縄文人よりもかなり大きく，現代人よりもやや小さい値を示して，扁平性はまったく認められない。

以上のように，大腿骨及び脛骨の骨体中央部の断面形態は，時代を追って比較した場合に，古い形質は認められず，新しい時代の形態的特徴を表わしたものと判断される。

SC-26号人骨

本人骨を精査した結果，残存骨の一部の重複と火を受けた骨とそうでないものとが混在しており，２体分の人骨が確認された。これらについて個別に所見を述べる。

(1) SC−26−１号人骨（男性，成人）

本人骨は火を受けていない人骨であり，頭蓋では右側側頭骨と右側下顎体の一部が遺存するが，この人骨に所属する歯は残存していない。また，四肢のうち上肢骨では左側の尺骨骨体上部が，下肢骨では左側の大腿骨骨体が広範囲に遺存している。本人骨の性別は側頭骨の乳様突起及び大腿骨の形状から男性で，年齢は成人と推定されるが，詳細年齢は不明である。

左側の大腿骨骨体は中央部の一部が朽ちて剥落しており，骨体の上部のみが計測可能であった。その計測値の比較表を表４に示す。本人骨の骨体上横径は比較群の中で畿内現代人と同様に小さく，骨体上矢状径は比較的大きい。したがって，上骨体断面示数は現代人よりもかなり大きくて，縄文・弥生人及び中世人に特徴的な骨体上部での扁平性はまったく認められない。本人骨も大腿骨の一部のみであるが古い形質は認められない。近世か近代かは不明であるが，新しい時代に所属する可能性が高い。

表４．大腿骨計測値比較（男性，右，mm）

	武辺城跡Ｅ区平場12 SC-26-1 (近世以降)		津雲 (縄文)		北部九州 (弥生)		鎌倉材木座 (中世)		畿内 (現代)	
	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
9．骨体上横径	1	28(L)	21	30.5	115	32.6	57	31.3	30	29.2
10．骨体上矢状径	1	26(L)	21	24.2	115	26.2	57	24.2	30	25.2
10／９上骨体断面示数	1	92.9(L)	21	79.5	115	80.5	57	77.9	30	86.3

N：例数，M：平均値，(L)：左側

(2) SC−26−２号人骨（性別不明，成人）

本人骨は火を受けている人骨であり，頭蓋では右側上顎骨の歯槽の一部が遺存し，歯も残存している。

四肢のうち上肢骨では左側の橈骨骨体遠位部が，下肢骨では左右大腿骨の骨体近位端及び左右腓骨

の骨体中央部が遺存している。また，胸椎の一部も残存している。全体の残存量は比較的多いが，大半の骨は判別が不能な骨片である。

骨の色は青白色を呈し，火による亀裂も多数認められて，高温で処理されたことをうかがわせる。

残存して同定が可能であった歯を歯式で示すと以下のとおりとなる。3本であるが，そのほか歯根のみが12点残存しており，いずれも永久歯である。歯冠が砕片となっており，年齢推定の参考となる咬耗の程度は不明であり，本人骨は性別は不明で，詳細年齢不詳の成人骨である。

E区平場12区 SC-26-2号歯式

／	／	M_1	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	（／　：不明）
M_3	M_2	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	

以上，両者は火葬骨と非火葬骨であり，もともと別々に埋葬されていたが，後世において掘り出された骨が一緒に再埋葬されたものと考える方が妥当である。

ま と め

長崎県佐世保市竹辺町に所在する武辺城跡は，2005（平成17）年から2006（平成18）年にかけて長崎県教育庁佐世保教育事務所により発掘調査が行なわれた。発掘経過中に2つの発掘区（C，E区）から近世以降に所属する4個体分の人骨が検出された。これらの人骨についての自然人類学的調査所見結果をまとめると次のとおりとなる。

1，SC-1号人骨は火葬人骨であり，性別不明の成人骨である。骨の遺存部位や量からして，後世において再埋葬された可能性が高い。

2，SC-5号人骨は，性別不明，3歳の幼児と推定される。骨も小型の甕に埋葬されて全体的に遺存しており，再埋葬された可能性はない。

3，SC-26号人骨は1例が火を受けていない人骨であり，男性の成人骨と推定される。他の1例は火を受けている人骨であり，残存量も比較的多く，性別不明の成人骨と推定された。両者は別々に埋葬されていたものが後世において再埋葬された可能性が高い。

4，SC-5号及びSC-26号人骨については，下肢骨の一部が計測可能であり，縄文時代から現代に至る計測成績と比較した結果，新しい時代の可能性が高いものと推測された。

〔稿を終えるにあたり，研究の機会と考古学的助言をいただいた長崎県教育庁佐世保文化財調査事務所の諸先生方に心から深謝いたします〕

参考文献

1）藤田恒太郎（1965）；歯の話，岩波書店：57-98.
2）平井隆，田幡丈夫（1928）；現代日本人骨の人類学的研究　第4部　下肢骨の研究，人類学雑誌．43（4附，5附）.
3）金田義夫（1957）；日本人の永久歯における歯根完成時期の研究，歯科月報．30：165-172.
4）九州大学医学部解剖学第二講座（1988）；古人骨資料集成，日本民族・文化の生成．六興出版.
5）清野謙次，平井隆（1928）；津雲貝塚人人骨の人類学的研究　第4部　下肢骨の研究，人類学雑誌．43　第4付録.
6）香原志勢（1956）；四肢骨特に大腿骨の形質　鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨，岩波書店，東京：149-154.
7）Martin, R. and Saller, K.(1957)；Lehrbuch der Anthropologie,Bd.T.Gustav Fischer Verlag Stuttgart.
8）内藤芳篤（1971）；西北九州出土の弥生時代人骨，人類学雑誌　79：236-248.

9）内藤芳篤（1981）；4 弥生時代人骨　日本人Ⅰ，人類学講座，雄山閣：57-99.
10）内藤芳篤，長島聖司，分部哲秋（1997）；古人骨，原始・古代の長崎県，長崎県教育委員会編，長崎：625-655
11）中橋孝博，永井昌文（1989）；形質，弥生文化の研究 1 ：3 弥生人，雄山閣，東京：23-51
12）Vallois H. V.(1938) ；Les methodes de mensuration de la platycnemie; Etude Critque,Bull. Soc. Anthropol. 8：97-108.
13）Wakebe T.(1992) ；Age of epiphyseal fusion in Japanese of modern times. 1. Upper limb skeleton,J. Anthrop. Soc. Nippon. 100：231.
14）分部哲秋（1992）；近代日本人の骨端癒合年齢　2．下肢骨，解剖学雑誌．67：508.
15）分部哲秋，佐伯和信，岡本圭史，長島聖司（1997）；長崎大学出展人骨資料．Anthropol. Sci., 105：

附表１．橈骨計測値（mm）

Matin's No.	人骨番号 Sex Age		E区平場8 SC-5 不明 3歳
1．	最大長	(右)	−
		(左)	−
2．	機能長	(右)	−
		(左)	−
3．	最小周	(右)	23.0
		(左)	−
4．	骨体横径	(右)	−
		(左)	−
4 a．	中央横径	(右)	8.1
		(左)	−
5．	骨体矢状径	(右)	−
		(左)	−
5 a．	中央矢状径	(右)	6.2
		(左)	−
5(5).	骨体中央周	(右)	23.0
		(左)	−
3／2	長厚示数	(右)	−
		(左)	−
5／4	断面示数	(右)	−
		(左)	−
5 a／4 a	中央示数	(右)	76.5
		(左)	−
推定身長値（P式：cm）		(右)	−
		(左)	−

P：(Pearson 氏)

附表２．尺骨計測値（mm）

Matin's No.	人骨番号 Sex Age		E区平場8 SC-5 不明 3歳
1．	最大長	(右)	−
		(左)	−
2．	機能長	(右)	−
		(左)	−
3．	最小周	(右)	19.0
		(左)	−
11.	尺骨矢状径	(右)	7.4
		(左)	−
12.	尺骨横径	(右)	8.4
		(左)	−
S．	中央最小径	(右)	6.1
		(左)	−
L．	中央最大径	(右)	9.1
		(左)	−
C．	中央周	(右)	25.0
		(左)	−
3／2	長厚示数	(右)	−
		(左)	−
11／12	断面示数	(右)	88.1
		(左)	−
S／L	中央断面示数	(右)	67.0
		(左)	−

附表３．大腿骨計測値（mm）

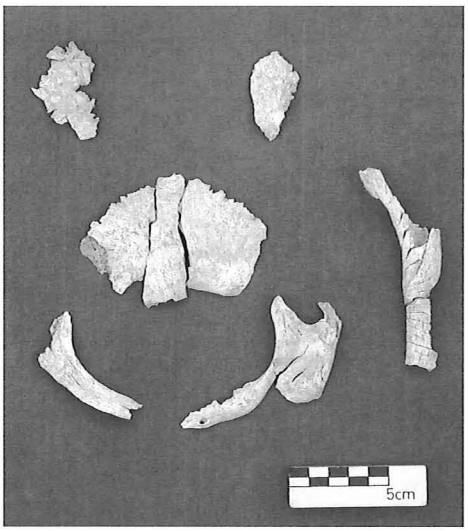
Matin's No.	人骨番号 Sex Age		E区平場８ SC-５ 不明 ３歳	E区平場12 SC-26-１ 男性 成人
１．	最大長	(右)	－	－
		(左)	－	－
２．	自然位全長	(右)	－	－
		(左)	－	－
６．	骨体中央矢状径	(右)	11.9	－
		(左)	12.6	－
７．	骨体中央横径	(右)	14.1	－
		(左)	13.9	－
８．	骨体中央周	(右)	41	－
		(左)	42	－
９．	骨体上横径	(右)	16.7	－
		(左)	16.8	28
９'．	骨体上最大横径	(右)	16.7	－
		(左)	16.8	－
10.	骨体上矢状径	(右)	13.1	－
		(左)	13.8	26
10'．	骨体上最小矢状径	(右)	12.9	－
		(左)	13.7	－
８／２	長厚示数	(右)	－	－
		(左)	－	－
６／７	骨体中央断面示数	(右)	84.4	－
		(左)	90.6	－
10／９	上骨体断面示数	(右)	78.4	－
		(左)	82.1	92.9
10'／９'	上骨体断面示数	(右)	77.2	－
		(左)	81.5	－
推定身長値（Ｐ式：cm）		(右)	－	－
		(左)	－	－

Ｐ：(Pearson 氏)

附表４．脛骨計測値（mm）

Matin's No.	人骨番号 Sex Age		E区平場８ SC-５ 不明 ３歳
１．	全長	(右)	－
		(左)	－
１ａ．	最大長	(右)	－
		(左)	－
１ｂ．	脛骨長	(右)	－
		(左)	－
８．	中央最大径	(右)	13.2
		(左)	－
８ａ．	栄養孔位最大径	(右)	－
		(左)	－
９．	中央横径	(右)	11.7
		(左)	－
９ａ．	栄養孔位横径	(右)	－
		(左)	－
10.	骨体周	(右)	40
		(左)	－
10ａ．	栄養孔位周	(右)	－
		(左)	－
10ｂ．	最小周	(右)	－
		(左)	－
10ｂ／１	長厚示数	(右)	－
		(左)	－
９／８	中央断面示数	(右)	88.6
		(左)	－
推定身長値（Ｐ式：cm）		(右)	－
		(左)	－

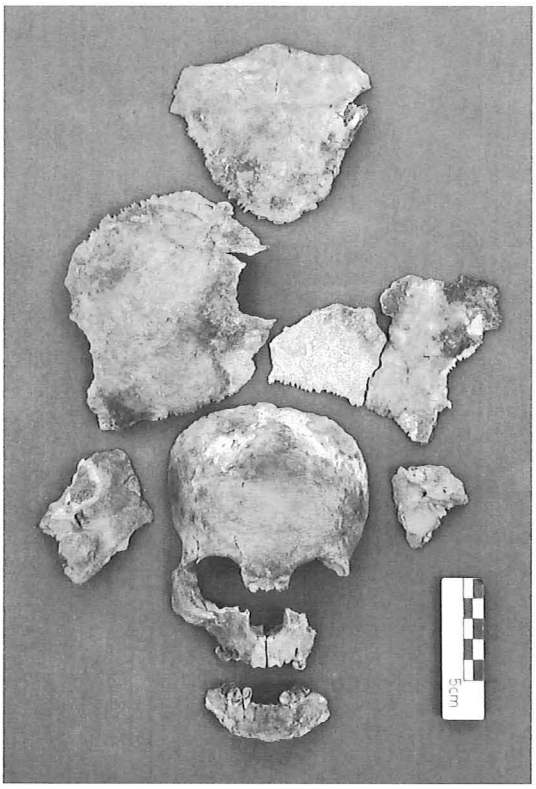
Ｐ：(Pearson 氏)



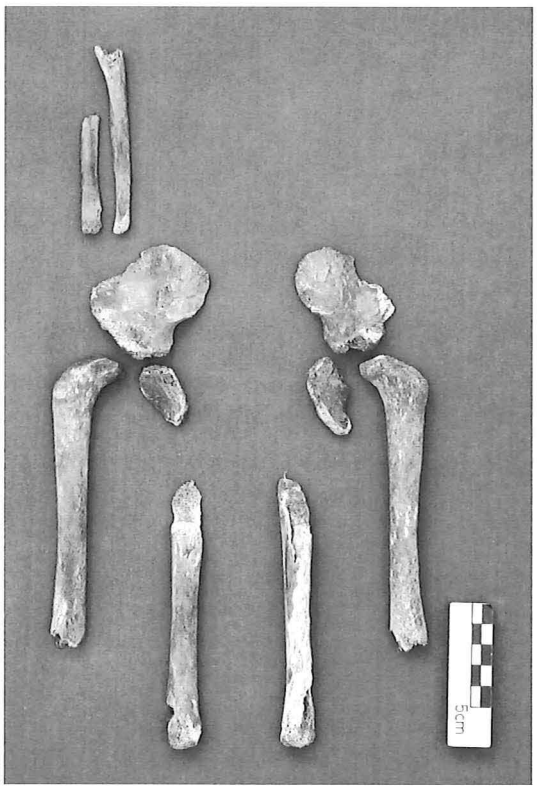
C区平場7　SC-1
（成人，性別年齢不明）

E区平場12　SC-26-1
（成人男性，年齢不明）

E区平場12　SC-26-2
（成人，性別年齢不明）



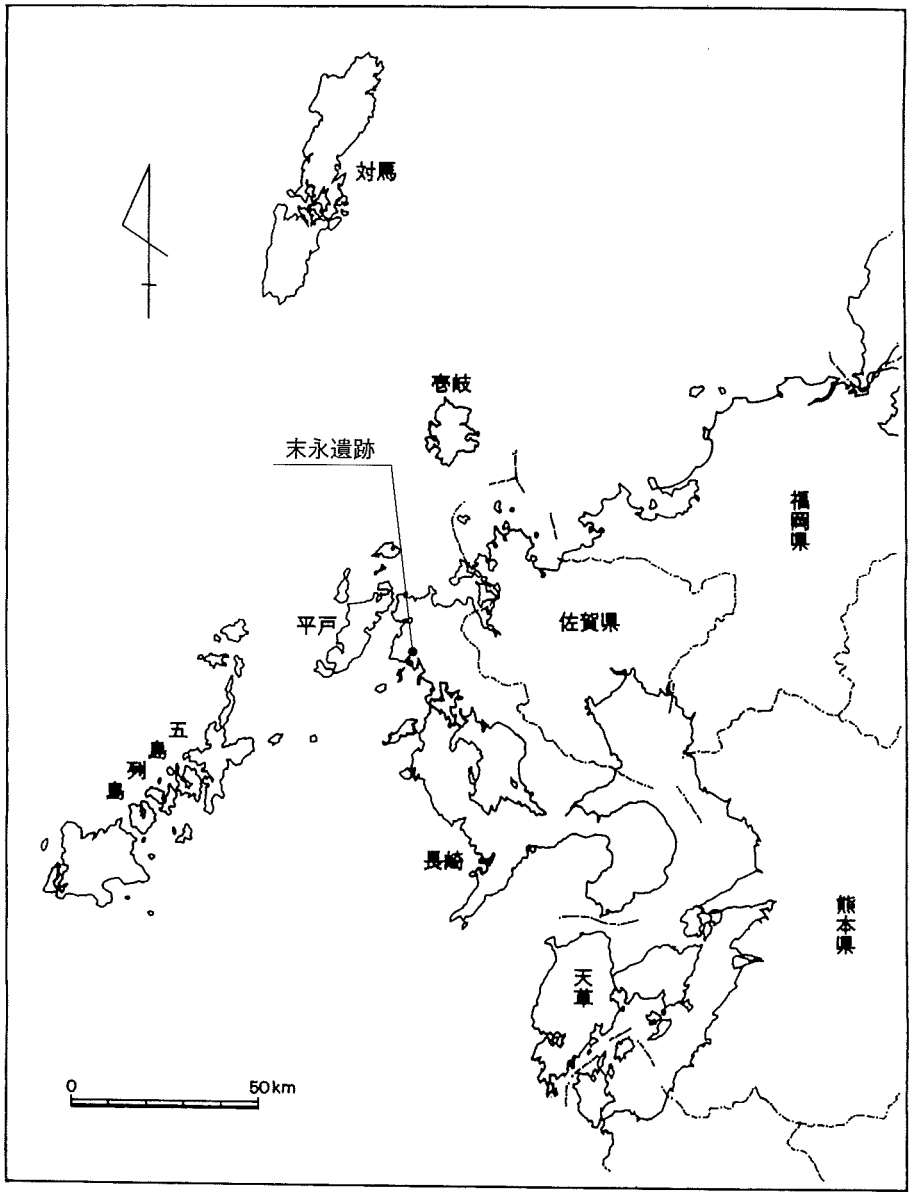
頭蓋骨



四肢骨

E区平場8　SC-5
（幼児，3歳）

Ⅲ　末　永　遺　跡


対馬
壱岐
末永遺跡
福岡県
佐賀県
平戸
五
島
列
島
長崎
熊本県
天
草
0
50km

例　　言

Ⅰ　本書は，一般国道497号佐々佐世保道路（西九州自動車道）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第４分冊である。

調査は長崎県教育委員会が国土交通省九州地方整備局長崎河川国道事務所の依頼を受け，平成13年度から平成19年度までの計画で実施している。

Ⅱ　当該遺跡に係る遺跡は，小野Ｆ遺跡，門前遺跡，竹辺Ｃ遺跡，竹辺Ｄ遺跡，武辺城跡，九州文化学園構内遺跡，末永遺跡の７箇所を数え，発掘調査が終了した末永遺跡について本書に収録するものである。

Ⅲ　今回報告する遺跡の内容は下記のとおりである。

1　末永遺跡範囲確認調査は，長崎県佐世保教育事務所文化財調査課で実施した。

2　末　永　遺　跡　　：長崎県北松浦郡佐々町口石免字末永に所在

平成17年度範囲確認調査：平成18年２月13日～平成18年２月28日

調　査　担　当　者　　：町田利幸　長崎県佐世保教育事務所文化財調査課係長（現佐世保文化財調査事務所係長）

川鍋知秋　長崎県佐世保教育事務所文化財調査課文化財調査員（現大成エンジニアリング株式会社）

松尾秀昭　長崎県佐世保教育事務所文化財調査課文化財調査員（現佐世保文化財調査事務所調査員）

平成18年度範囲確認調査：平成18年９月13日～平成18年９月21日

調　査　担　当　者　　：町田利幸　長崎県佐世保教育事務所文化財調査課係長（現佐世保文化財調査事務所係長）

松尾秀昭　長崎県佐世保教育事務所文化財調査課文化財調査員（現佐世保文化財調査事務所調査員）

3　本書の執筆及び編集を町田が担当した。

4　本書の図面及び写真類は，佐世保文化財調査事務所で保管している。

本　文　目　次

1　遺跡の立地と環境 ……129
(1)　地理的環境 ……129
(2)　歴史的環境 ……129
2　調査の概要 ……133
(1)　平成17年度範囲確認調査 ……133
(2)　平成18年度範囲確認調査 ……134
3　まとめ ……135

挿　図　目　次

第1図　佐々町内遺跡地図（1/40,000） ……130
第2図　末永遺跡範囲確認調査坑配置図（1/2,000） ……133
第3図　平成17・18年度調査坑詳細配置図 ……134
第4図　平成17・18年度調査土層図 ……135

図　版　目　次

図版1　平成17・18年度末永遺跡遠景ほか ……136

表　目　次

表1　佐々町内遺跡地名 ……131

1　遺跡の立地と環境

(1)　地理的環境

遺跡の所在する佐々町は，長崎県第二の都市佐世保市と南側で接し，東を佐世保市に合併した吉井町，西を同じく佐世保市に合併した小佐々町に接し北側を江迎町・鹿町町で接している。町域は東西約6.5km，南北約８kmの総面積は，32.3km²ある。海に囲まれた長崎県の中にあっては，海に接する面積が佐々川河口周辺に限られた地形的特徴を持っている。

地質は，第３紀層（堆積岩類の砂岩）と佐々川が形成した沖積層と部分的に玄武岩層とで地形を形成している。

(2)　歴史的環境

佐々町では，旧石器時代の遺跡として利須原遺跡・道芽木遺跡・竹ノ本遺跡・佐々角山遺跡・牟田原遺跡の５遺跡が分布調査によってあげられている。縄文時代の遺跡は，５遺跡に加えて狸山支石墓群・市瀬遺跡・神田上原遺跡・末永遺跡・ぜんもん岩陰遺跡・大谷岩陰遺跡がある。

佐々町は弥生時代～古代にかけての埋蔵文化財に関係する遺跡，遺物等の発見を今のところ確認されていない。

中世については，遺構を残した状態での山城跡[註1]が確認されている。佐々町郷土史によれば，鳥屋城跡[註2]は，村上天皇時代に（946～966）に古川伊予守が古川岳に砦を築き「三尊大明神」（神田家の系図）を祠るとあるのが始まりとされるが伝承であり確実な時期については言えない。遺構[註3]は，本丸，帯曲輪，空堀，物見台等の施設がある。東光寺山城跡[註4]は永享８年（1436）に洞家宗瑞雲寺の流れで平戸瑞雲寺の末寺として英岩和尚[註5]が開山したとされる。遺構は，本丸，二の丸，出丸，空堀，竪堀等の施設を備えている。野寄城跡[註6]（龍王城）は文明８年間（1476）に松浦豊久が佐々存（たもつ）の領地を併合[註7]し城主となっている。

この他に正福寺裏山が竪山[註8]と呼ばれており，平安時代～鎌倉時代初期にかけて山城のことを館山と関東以北では呼でいることから，この地名が残った山城と言われる。松浦義（よろし）の妾の子供で建長２年（1250）紫加田を名のっている。この紫加田氏が志方城跡[註9]を築いている。正興寺の僧が江戸時代初期に市瀬免に大日寺を創建している。この寺域に江戸時代以前の法筐印塔，五輪塔があり，これらの中世墓碑の存在から山城の伝承が伝わっているのが大日山城跡[註10]である。小浦の舟城跡[註11]は永禄６年（1563）真申（まさる）口の浦に軍船を集結させて飯盛城の攻撃を行っていることが「平戸藩印山記[註12]」に記されている。またこれ以前の応永28年（1421）に佐々存が松浦党契諾（けいだく）条々[註13]に記され，足利幕府への忠誠を誓う城主として現れている。木場の本陣跡[註14]は松浦豊久が東光寺を創建した1430～1460年代に相浦方の動向を監視する場に利用している。半坂の砦跡[註15]は永禄５年（1562）～永禄７年（1564）の役で大村相浦連合軍の砦としたと伝わるが実態は不明である。

近世の佐々は，平戸松浦藩の支配下となり，佐々の新田開発に力をいれている。

近世の窯跡に関しては，平戸松浦藩が豊臣秀吉による朝鮮出兵に参戦し，この帰り慶長３年(1598)に朝鮮咸鏡道熊川から平戸に陶工[註16]を連れて来て，平戸城下に高麗町を配して住まわせている。この時の陶工の取りまとめ役に巨関屯六（こせきとんろく）がおり，平戸の中野窯を開いている。その後巨関屯六の子が，藩内各地の陶土を探し求め三川内に辿り着き白磁焼きの製法に寛永11年（1634）に成功している。三川

第１図　佐々町内遺跡地図（1/40,000）

表1　佐々町内遺跡地名

番号	名　　称	種　別	時　代	所　　在　　地
1	利須原遺跡	遺物包含地	先・縄	大茂免字利須原
2	狸山支石墓群	支石墓	縄文	松瀬免字松瀬
3	正興寺跡	寺院跡	中世	神田免字久保
4	市瀬遺跡	遺物包含地	縄文	市ノ瀬免字田中
5	大日山城跡	城跡	中世	市ノ瀬免字大日
6	神田上原遺跡	遺物包含地	縄文	市ノ瀬免字上原
7	市の瀬窯跡	窯跡	近世	市ノ瀬鴨川免字皿山
8	鳥屋城跡	城跡	中世	古川免字城ノ辻
9	野寄城跡（龍王城）	城跡	中世	野寄免字榎ノ元
10	東光寺山城	城跡	中世	羽須和免字千本
11	道芽木遺跡	遺物包含地	先・縄	須崎免字道芽木
12	竹ノ木遺跡	遺物包含地	先・縄	口石免字竹ノ木
13	佐々角山遺跡	遺物包含地	先・縄	角山免字狩立
14	牟田原遺跡	遺物包含地	先・縄	迎木場免字牟田原
15	ぜんもん岩陰遺跡	洞穴・岩陰	縄文	江里免字日陰
16	大谷岩陰遺跡	洞穴・岩陰	縄文	大茂免字大谷
17	竪山城跡	城跡	中世	口石免字竪山
18	志方城跡	城跡	中世	志方免字千人堂
19	舟城跡	城跡	中世	小浦免字浜小浦
20	本陣跡	城跡	中世	迎木場免字本陣
21	半坂の砦跡	城跡	中世	口石免字半坂
22	川久保遺跡	遺物包含地	中世	口石免字川久保
23	**末永遺跡**	**遺物包含地**	**縄文**	**口石免字末永**

内から宝暦1年（1751）に福本弥治右衛門[註17]の次男新左衛門が佐々で，市瀬窯を開窯したのが佐々での陶磁器焼成の始まりとされる。

長崎県の北松浦郡一帯は，明治以降産業革命による石炭エネルギーの需要拡大を背景に石炭掘削が本格化する。石炭の採掘は，長崎港外の高島町で石炭を宝永年間（1700年頃）に採掘し，平戸・江迎に「五平太[註18]」が行商にいったのが始まりとされている。この後，相浦の斉藤松五郎[註19]が享和～文政（1800～1830年頃）に大瀬で採掘した石炭を長崎・博多・瀬戸内海の塩田に送り商品として取り扱い財をなすが，文政10年（1827）に平戸松浦藩に罪人として捕らわれ財産を没収されている。松五郎に続き真申の草刈太一左衛門[註20]が天保（1830）から石炭採掘業を始める。また久田繁左衛門[註21]も石炭採掘を始める。石炭の採掘で出たボタを水田開発に利用し，平戸松浦藩から何れも名字帯刀を許されている。江戸時代までは，平戸松浦藩が採掘権を有していた。

明治政府は明治2年（1869）石炭採掘を民間の産業として認める方針を打ち出し，明治6年（1873）に日本坑法[註22]を制定した。これによって，石炭採掘の会社が北松一帯に設立し昭和26年頃までは最盛期を迎えるが，石炭から石油にエネルギー転換されていくとともに昭和30年頃から斜陽化が始まり昭和44年には佐々町にあった10カ所の石炭採石場は全て無くなっている。

【参考文献】
1．長崎県ホームページ　21.kenhfieldidx.html　http://www.pref.nagasaki.jp/sizen/1 guidebook/kenhokuguide/kennhfield/kenhfieldidx.html（24,213bytes）フィールドノート県北地域　地質・地形　2005長崎県
2．長崎県の近代化遺産－長崎県近代化遺産総合調査報告書－長崎県文化財調査報告書　第140集　長崎県教育委員会　1998

【引用文献】
註１：第三章中世の佐々『第二節中世山城の創建　二佐々の中世山城』吉福清和　佐々町郷土誌　佐々町教育委員会　2004
註２：歴史編六佐々の城「４古川と鳥屋城」佐々町郷土史　佐々町郷土誌委員会　佐々町　1981
註３：第三章中世の佐々『第二節中世山城の創建　二佐々の中世山城』「２鳥屋城（佐々町古川免城ノ辻）」吉福清和　佐々町郷土誌　佐々町教育委員会　2004
註４：歴史編六佐々の城「５東光寺山城」佐々町郷土史　佐々町郷土誌委員会　佐々町　1981
註５：第三章中世の佐々『第二節中世山城の創建　二佐々の中世山城』「１東光寺山城（佐々町羽須和免東光寺城）」吉福清和　佐々町郷土誌　佐々町教育委員会　2004
註６：第三章中世の佐々『第二節中世山城の創建　二佐々の中世山城』「３野寄城（佐々町野寄免榎ノ元）」吉福清和　佐々町郷土誌　佐々町教育委員会　2004
註７：第三章中世の佐々『第三節平戸松浦氏の佐々進出』吉福清和　佐々町郷土誌　佐々町教育委員会　2004
註８：歴史編六佐々の城「12竪山（正福寺裏山）」佐々町郷土史　佐々町郷土誌委員会　佐々町　1981
註９：第三章中世の佐々『第一節周辺土豪の動向と佐々』「二佐々村と佐々氏」吉福清和　佐々町郷土誌　佐々町教育委員会　2004
註10：第三章中世の佐々『第二節中世山城の創建　二佐々の中世山城』「４その他の山城」吉福清和　佐々町郷土誌　佐々町教育委員会　2004
註11：歴史編六佐々の城「７小浦の舟城」佐々町郷土史　佐々町郷土誌委員会　佐々町　1981
註12：歴史編六佐々の城「７小浦の舟城」佐々町郷土史　佐々町郷土誌委員会　佐々町　1981（印山記：松浦史料博物館所蔵）
註13：第三章中世の佐々『第一節周辺土豪の動向と佐々』「二佐々村と佐々氏　応永の宗族会盟(松浦史料博物館蔵)」吉福清和　佐々町郷土誌　佐々町教育委員会　2004
註14：歴史編六佐々の城「８木場の本陣」佐々町郷土史　佐々町郷土誌委員会　佐々町　1981
註15：歴史編六佐々の城「９伝育坊と半坂合戦」佐々町郷土史　佐々町郷土誌委員会　佐々町　1981
註16：佐々の皿山編「佐々の皿山以前の平戸藩の窯業」佐々町郷土史　佐々町郷土誌委員会　佐々町　1981
註17：佐々の皿山編「福本家の系図」・「佐々の皿山」佐々町郷土史　佐々町郷土誌委員会　佐々町　1981
註18：炭鉱編『炭鉱の盛衰』「１石炭産業第一期（江戸時代1700～1800)」佐々町郷土史　佐々町郷土誌委員会　佐々町　1981
註19：炭鉱編『炭鉱の盛衰』「１石炭産業第一期（江戸時代1700～1800)」佐々町郷土史　佐々町郷土誌委員会　佐々町　1981
註20：炭鉱編『炭鉱の盛衰』「２石炭産業第二期（江戸時代末期～明治中期22年1800～1890」佐々町郷土史　佐々町郷土誌委員会　佐々町　1981
註21：炭鉱編『炭鉱の盛衰』「２石炭産業第二期（江戸時代末期～明治中期22年1800～1890」佐々町郷土史　佐々町郷土誌委員会」佐々町　1981
註22：第二章長崎県の近代化とその過程（総論）第１節長崎県の近代化３．近代産業の形成と発展「石炭産業の発展と高島炭鉱」都野尚典　長崎大学経済学部教授　長崎県の近代化遺産－長崎県近代化遺産総合調査報告書－長崎県文化財調査報告書　第140集　長崎県教育委員会　1998

2　調査の概要

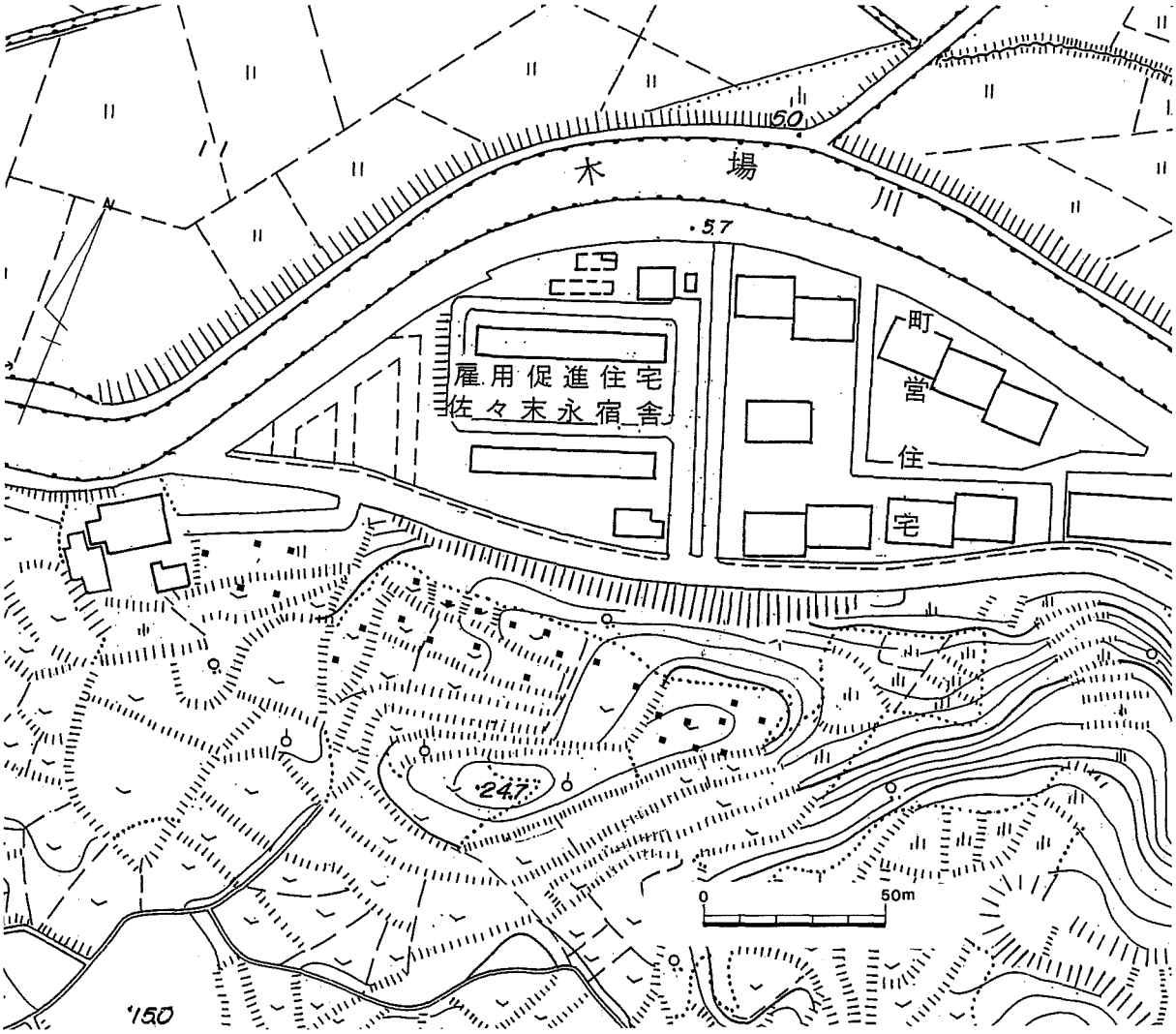
(1)　平成17年度範囲確認調査

①調査

調査は，大きく３区に区分し，遺跡の東側で標高の高い部分を東区とし，調査坑の名称をTP１～TP７・TP12とした。東区から延びる丘陵西側部分が，新設された町道によって切られるまでの間を西区とし，TP８～TP11・TP13とした。宮ノ前区は，新設の町道西側の水田として利用されていた部分でTP14～TP18の調査坑の名称を付して調査を実施した。

②層位

東区で，小規模な基盤整備が行われており40～50cm程度，土を入れて嵩上げされていた。埋土（２層）は，黄褐色の粘質土と灰色の粘質土のブロックが混ざり合った状況を呈していた。西区のTP10・TP８は表土層下は砂岩の地山（４層）となっていた。TP11・TP13は，耕作土以下に黄色粘質土（３層）が比較的厚く堆積していた。宮ノ前区は，遺跡北側にある雇用促進住宅を建設する際に耕作地が現道路より低くなるため埋め立てを行っていた。耕作土以下の埋め立ての状況は，約140cm程を礫と粘質土を入れて嵩上げを行っていた。埋土以下は，明黄褐色粘質土（３’層）に砂岩小礫が混じる無



第２図　末永遺跡範囲確認調査坑配置図（１/2,000）

遺物層が堆積している。

③遺構・遺物

遺構は西区 TP11に小ピットを確認し，土師器小片が出土しているが充填土が耕作土と近似している点や遺物の摩滅が著しい点から，人為的なものではなく，流水か木の根によるピットと判断される。東区 TP 7 の 2 層埋土から蛇の目釉剥ぎ見込み碗で17世紀末～18世紀前半の陶磁器及び近世陶磁器片 6 点が出土している。この他に調査坑東区 TP 3 陶磁器 1 点，西区 TP13の耕作土から陶磁器 7 点，黒曜石 1 点を採取している。

④小結

調査は用地買収が終了し，耕作物が作られていない箇所についてのみ実施しており，遺構・遺物が残存する可能性のある西区南側については調査できなかった。このため，未調査部分1,758m²については，用地及び耕作物等の問題が処理された後に調査を実施する必要がある。

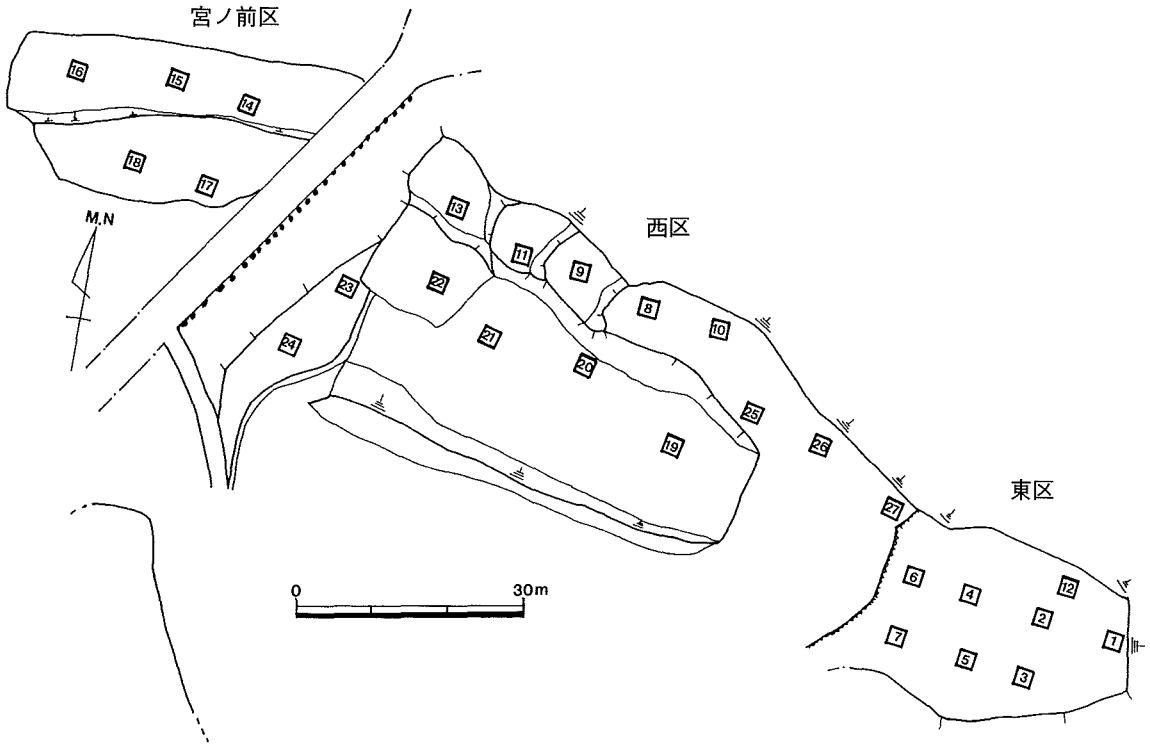
(2) 平成18年度範囲確認調査

①調査

調査は，平成17年度の調査区名称及び試掘坑の番号を踏襲し，地区名の西区にあたる TP19～TP27 の 9 カ所について確認調査を実施した。

②層位

TP19～TP22は，1 層が耕作土。3’層に明黄褐色粘質土（砂岩の風化礫混じり）が堆積していたが遺物包含層・遺構を確認することができなかった。TP23～TP24も 3’層に明黄褐色粘質土が10cm 程度堆積するが遺構及び遺物包含層を確認できなかった。TP25～TP27は 1 層耕作土で，以下は 4 層



第 3 図　平成17・18年度調査坑詳細配置図

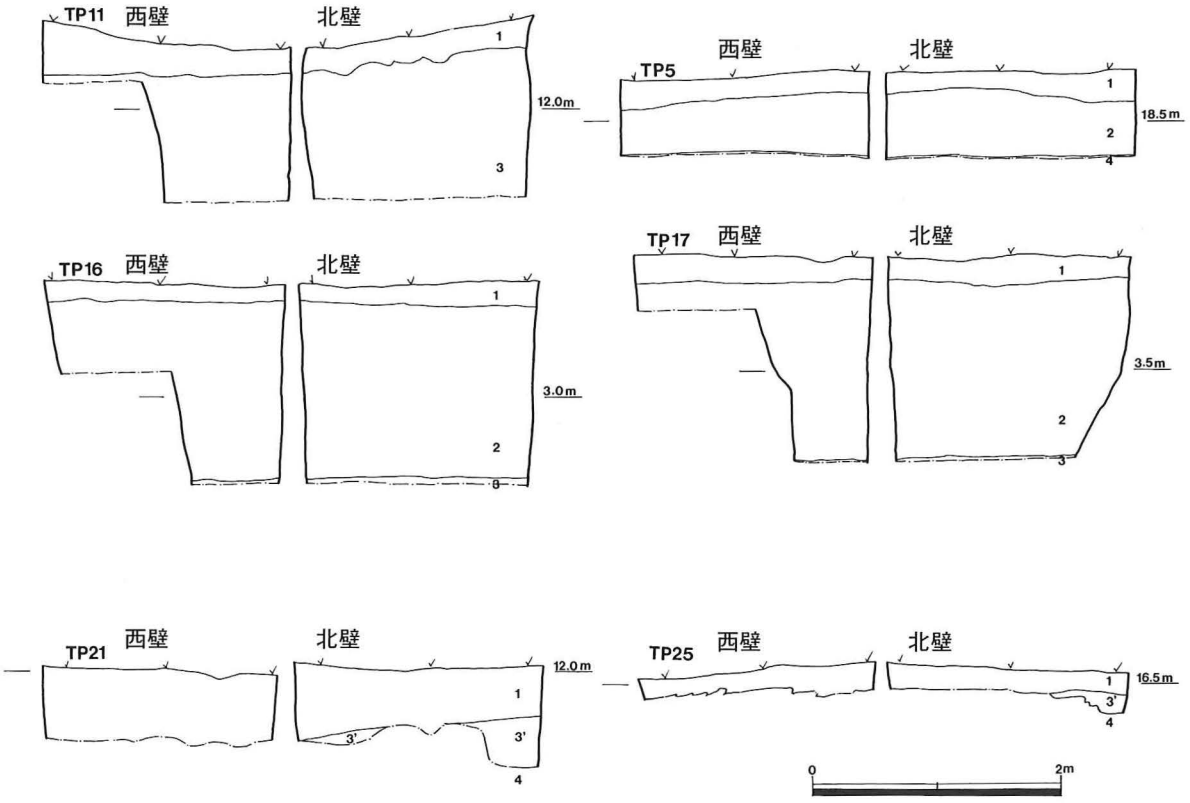
砂岩の岩盤となっていた。

③遺構・遺物

遺構については，いずれの調査箇所からも確認することがなかった。遺物については，１層の耕作土から近世以降の陶磁器片がTP19で１点，TP20で６点，TP23で４点，TP24で２点と耕作土採集が６点あった。

④小結

以上の調査から遺構・遺物を包含する層が残存する可能性は無いものと思われる。よって，平成17年度及び18年度の範囲確認調査結果から末永遺跡での工事計画地区については，支障ないものとした。



第４図　平成17・18年度調査土層図

3　ま　と　め

遺跡は，標高２～20mの緩斜面にあり，平成９年３月に県学芸文化課で分布調査を実施し，石核再生剥片・剥片を採取している場所である。また，周辺の畑地では，黒曜石剥片の外に須恵器片等も散布しており縄文時代から場の利用があった状況が窺えるところであった。

調査地点の位置と環境は，北側に木場川及び西側に宮ノ川と呼ばれる湧水地があり生活の環境としては良好であると思われたが遺物包含層を確認することができなかった。

このことから，遺跡の範囲が予想より南西側の現在畑地として利用されている地区に拡がる可能性が高いと思われた。

遺跡遠景

平成17年度
調査風景

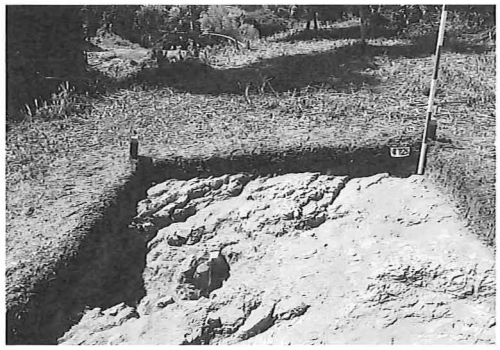
TP 5 北壁

平成17年度
調査風景

TP11北壁

TP21北壁

TP16西壁



TP25西壁

TP17西壁

平成18年度
調査風景

図版１　平成17，18年度末永遺跡遠景ほか

報告書抄録

ふりがな	たけべじょうあと　すえながいせき
書名	武辺城跡　末永遺跡
副書名	一般国道497号佐々佐世保道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅳ
シリーズ名	長崎県佐世保文化財調査事務所調査報告書
シリーズ番号	第2集
編著者名	副島和明・町田利幸・今里順一郎・柴田妃三光・秋山千尋
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850－8570　長崎市江戸町2番13号　TEL095－824－1111
発行年月日	西暦2008年3月

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
武辺城跡（たけべじょうあと）	佐世保市（させぼし） 竹辺町（たけべちょう）	42202	61-68	33° 11′ 51″	129° 40′ 35″	20060522 ～ 20060927	20,021	道路建設
末永遺跡（すえながいせき）	佐々町（さざちょう） 口石免（くちいしめん）			33° 13′ 25″	129° 38′ 59″	20060213 ～ 20060228 20060913 ～ 20060921	72 36	道路建設 〃

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
武辺城跡	城館	・中世 ・近世	・近世墓 ・石列 ・溝 ・溜井 ・柱穴	・土師器 ・石器 ・陶磁器 ・石製品 ・金属製品 ・銭貨	・宗家松浦氏の居城
末永遺跡	遺物包含地	・近世		・陶磁器	

長崎県佐世保文化財調査事務所調査報告書　第２集

一般国道497号佐々佐世保道路建設に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　Ⅳ

武　辺　城　跡
末　永　遺　跡

平成20年（2008）３月発行

発行者　長崎県教育委員会
〒850-8570　長崎市江戸町２番13号
☎095－824－1111

印刷所　株式会社　昭　和　堂
長崎県諫早市長野町1007-２
☎0957－22－6000

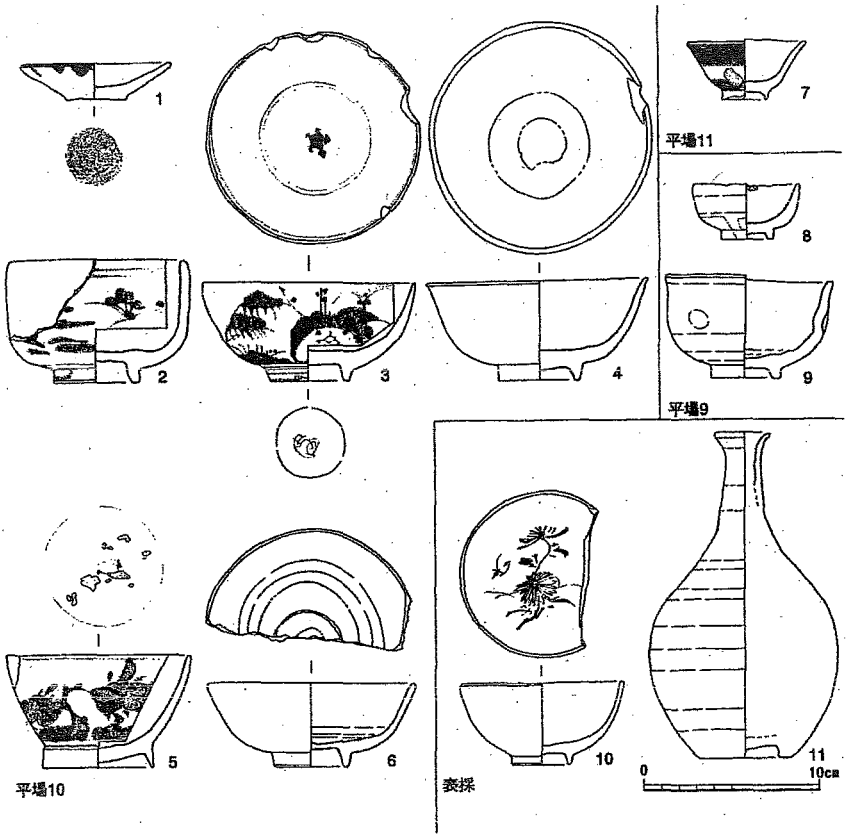
長崎県佐世保文化財調査事務所調査報告書　第2集

一般国道497号佐々佐世保道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　Ⅳ

武辺城跡　末永遺跡

＜正誤表＞

頁	誤	正
70	第13表　遺物観察表　「灰泊」	第13表　遺物観察表　「灰白」
72	第48図　遺物実測図　遺物番号・出土地点未記入	第48図　遺物実測図　遺物番号・出土地点記入 下図参照
109	図版25-28の表面が27と同一	図版25-28の裏面が上段の表面へ。28の裏面なし



第48図　遺物実測図⑭（S＝1/3）